

# 太平寺古墳群

安堂配水池に伴う発掘調査

1983. 3

柏原市教育委員会

## はしがき

柏原市東山の山麓地帯には多数の古墳群が存在しており、大阪府下でも最も多く密集している地域です。この中の1つである太平寺古墳群は、標高40～160mまでの丘陵上に在り、生駒山地西端に位置し、この古墳群より西側を眺望すれば、大型古墳を擁する古市古墳群や百舌鳥古墳群を眼下にする事が出来ます。

また、多くの古墳が存在する事は、言いかえれば、それだけ古墳に埋葬された人々が多く住んでいた事であり、その人達の住む集落も多く存在していた事の証明です。

柏原市教育委員会は、この太平寺古墳群の一画に計画された上水道配水池建設に沿って、昭和56年度試掘調査を実施し、その結果に基づき発掘調査に着手しました。

調査地からは、古墳時代の一括遺物が出土し、太平寺古墳群の規模や時期、埋葬施設等多くの新知見を得ました。この地域における古墳のあり方を考えるにあたり、当調査出土資料の果す役割は大きなものがあります。この他に、古墳時代から奈良時代に継ぐ祭祀遺物も多く出土して、今後大いに注目されるところです。

古墳の保存については、幾度も協議を持ちましたが、周辺地域にもまた多くの古墳を擁する古墳群があり、代替地も困難であるところから記録保存をする事になりました。昭和57年度から資料の整理に着手し、発掘調査の成果の一部をここに公にして、その責を果したいと思います。

最後に、発掘調査ならびに整理作業にあたって、多くの関係各位、特に大阪府教育委員会文化財保護課、柏原市土地開発公社からは協議以来一貫して御協力を頂いた事を記して感謝いたす次第です。

昭和58年3月

柏原市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、昭和56年度に実施した安堂山配水池建設に伴う事前緊急発掘調査概要である。

1. 発掘調査は、柏原市教育委員会社会教育課、指導主事竹下 賢、同課北野 重を担当者として3次にわたり実施した。

3. 調査の実施及び本書の作製にあたっては、多くの方々に参加及び協力を頼いた。ここに記して感謝の意を表します。

大阪府教育委員会文化財保護課 技師 大槻康宏

柏原市教育委員会社会教育課 課長 石田 博、同課 花田勝広 安村俊史

(調査員) 藤原喜信、広岡 勉、山内 都、大塚淳子、西原清美、松田光代、米谷厚子。

(調査補助員) 藤沼敏則、山下祐司、石田成年、坂井利和、井宮好彦、上篠裕典、佐藤 尚、橋場久幸、畠田 榮、前田克彦、前川清成、高橋恵子、高橋俊恵、竹下典江、横尾明美、原田久美子、甲斐美恵子、竹下彰子、辻本三津子、馬場千代美、峰谷直子、林 香織。

(作業員) 奥野 清、道藤甚蔵、井上岩次郎、浦 廉吉、成山貞逸、谷口鉄治、尾崎正夫、成山熊太郎、武田義男、麻栄三郎、山田貞一、井関喜三夫、朝田行雄、川端良三郎、秦 春海、森口喜信、分才春信、西岡武重、福嶋剛一、玉野正一、杉田 茂、岸本重夫、山本芳一、竹下幸子、大谷麻弓、乃一敏恵、松成早苗、村口ゆき子、柏尾スミ子、森山美代子、飯村邦子、寺内信子、高橋いね子、池田奈良菊、中島美代子、有江マスミ、岸部涼子、島田俊子。

(事務員) 荏野絹子、松岡由紀子。

4. 実測図中に表示した方位は磁北、標高はT、Pである。

5. 当調査区は従来太平寺古墳群に含まれていたが、尾根を中心として分類し、北側からA、B、C、D、支群とした。

6. 本書の原稿執筆は主に北野が行ない、第1章を竹下、第4章を山内が担当した。

# 目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 太平寺古墳群の概要	2
第1節 太平寺古墳群の位置と環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査	5
第1節 調査の概要	5
第2節 調査日誌	6
第3節 トレンチ調査	9
第4節 第1次調査	12
第1項 D-5号墳	12
第2項 D-7号墳	13
第3項 D-8号墳	15
第4項 平坦地	18
第5項 土器だより	19
第6項 窯1	19
第5節 第2次調査	20
第1項 第1トレンチ	20
第2項 第2トレンチ	22
第6節 第3次調査	25
第1項 A区	25
第2項 B区	28
第3項 C区	29
第4章 遺物	30
第1節 古墳時代の遺物	30
第2節 7・8世紀の遺物	35
第5章 まとめ	41
第1節 古墳の概要	41
第2節 土器棺と道状構造	42
第3節 祭祀遺物	43

## 図版目次

- 図版1 太平寺古墳群  
図版2 第1次調査区 第1～3トレンチ  
図版3 第1次調査区 第4～5トレンチ  
図版4 第1次調査区全体図  
図版5 D-5号墳  
図版6 D-7号墳  
図版7 D-8号墳  
図版8 D-8号墳 主体部  
図版9 窯平面図・断面図  
図版10 第2次調査区 第1トレンチ  
図版11 第2次調査区 第2トレンチ  
図版12 第3次調査区全体図  
図版13 古墳出土須恵器実測図  
図版14 古墳出土須恵器、鉄器実測図  
図版15 円筒埴輪実測図（1）  
図版16 円筒埴輪実測図（2）  
図版17 形象埴輪実測図（3）  
図版18 その他の土器実測図  
図版19 小型手挽高杯実測図  
図版20 土馬実測図  
図版21 太平寺古墳群遠景 その1  
図版22 太平寺古墳群遠景 その2  
図版23 調査区遠景  
図版24 第1、2、3トレンチ  
図版25 第4トレンチ  
図版26 第4、7トレンチ  
図版27 D-5号墳 その1  
図版28 D-5号墳 その2  
図版29 D-5号墳 その3  
図版30 D-7号墳 その1  
図版31 D-7号墳 その2  
図版32 D-8号墳 その1  
図版33 D-8号墳 その2  
図版34 D-8号墳 その3  
図版35 D-8号墳 その4  
図版36 窯1 その1  
図版37 窯1 その2  
図版38 墓輪出土状況  
図版39 作業風景  
図版40 調査区遠景  
図版41 第2次調査区 その1  
図版42 第2次調査区 その2  
図版43 第2次調査区 第2トレンチ  
図版44 第2次調査区 第2トレンチ  
図版45 第3次調査区 その1  
図版46 第3次調査区 その2  
図版47 土器棺1  
図版48 土器棺2 その1  
図版49 土器棺2 その2  
図版50 土器棺3  
図版51 集石造構1  
図版52 調査区内に見られた石垣  
図版53 出土遺物 その1 須恵器  
図版54 出土遺物 その2 須恵器  
図版55 出土遺物 その3 須恵器  
図版56 出土遺物 その4 鉄製品  
図版57 出土遺物 その5 円筒埴輪  
図版58 出土遺物 その6 馬形埴輪  
図版59 出土遺物 その7 形象埴輪  
図版60 出土遺物 その8 形象埴輪  
図版61 出土遺物 その9 須恵器  
図版62 出土遺物 その10 壺  
図版63 出土遺物 その11 祭祀遺物

## 挿 図 目 次

第1図 柏原市位置図.....	2
第2図 調査区トレント配置図.....	5
第3図 D-5号墳 周濠断面図.....	12
第4図 D-5号墳 周濠内遺物出土状況.....	13
第5図 D-7号墳 周濠断面図.....	14
第6図 D-7号墳 遺物出土状況.....	14
第7図 D-8号墳から第1次調査区を望む.....	16
第8図 D-8号墳 周濠断面図.....	17
第9図 D-8号墳 遺物出土状況(周濠下層).....	17
第10図 北東部平坦地周辺遺構位置図.....	18
第11図 窯出土焼土塊.....	19
第12図 D-2号墳 埋葬施設内遺物出土状況.....	23
第13図 第2次調査区 遺構位置図.....	24
第14図 土器棺1.....	27
第15図 土器棺2.....	27
第16図 土器棺3.....	27
第17図 集石遺構1.....	28
第18図 D-5号墳出土須恵器.....	31
第19図 D-8号墳出土直刀.....	32
第20図 形象埴輪実測図.....	34
第21図 土器棺1 実測図.....	36
第22図 刀子実測図.....	39
第23図 祭祀遺物出土地点.....	44

## 表 目 次

第1表 調査区一覧表.....	6
第2表 太平寺D尾根古墳一覧表(暫定表).....	42
第3表 祭祀遺物 出土遺物別一覧表.....	44

## 第1章 調査に至る経過

柏原市土地開発公社は自己所有の柏原市安堂町878番地外（概算の総面積、29000m<sup>2</sup>）を仮称堅下南中学校建設用地に利用する造成工事を、昭和55年度事業として計画した。当該用地が太平寺古墳群内に位置するものであるところから、柏原市教育委員会は柏原市土地開発公社と協議の結果、昭和55年10月から発掘調査を実施していた。

この学校建設用地の造成計画の中に、隣接する柏原市安堂町875-1番地外における新安堂配水池建設予定地の造成に伴う剩余残土をもって盛土を実施する計画があった。この配水池建設予定地も学校建設用地と同様に太平寺古墳群内に位置するので、柏原市教育委員会は柏原市土地開発公社と協議を重ねた。この協議は学校建設用地内の発掘調査の実施中、学校建設用地内における遺跡保存の協議が進められている中で、平行してなされた。学校建設については開校予定の時期が決定されており、それを遅滞させないようにするために、配水池建設予定地の土砂採り工事が実施可能でなくてはならないものであった。

柏原市教育委員会はこの協議に臨み、保存と開発のジレンマに陥りながらも、一応試掘調査を実施し、その結果を基幹として、改めて遺跡保存の協議をすることとしてとりあえず昭和56年4月から試掘調査を実施した。

この試掘調査によって、古墳の周溝と認められる遺構が検出され、古墳に繋がる遺物の出土をみたので、配水池建設用地として削平することは遺跡保存上、適切でないものであると認めた。大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下に、柏原市教育委員会は柏原市土地開発公社に対し保存に努めるように指示し、協議を重ねた。配水池の建設については全体計画の中で、配水池の基盤高を標高70mの位置に設置しなくてはならず、代替え地を近接地に求めると、より一層の遺跡破壊に繋がる調査を実施しなくてはならない状況となるので、やむなく、レプリカを残すこと、学校建設予定地内に設計変更により保存区域を設定すること等を条件として、記録保存を前提とする発掘調査を実施することとなった。

## 第2章 太平寺古墳群の概要

### 第1節 太平寺古墳群の位置と環境

柏原市は、大阪府の東南部に位置し、大阪府と奈良県の間に連なる生駒山脈の麓にあたり、広ぼう東西方向6.60km、南北方向6.63kmを測る、大阪府下30市中第19番目の面積(24.77km<sup>2</sup>)を擁する小都市である。

行政区画は、奈良県と境を接する内陸地にあり、東側に三郷町、王寺町、香芝町があり、西側に大阪市、八尾市、藤井寺市、羽曳野市が接している。<sup>1)</sup>

交通は、近鉄大阪線、国鉄関西本線、国道25、165号線、西名阪自動車道路がある。道路等交通網の発達は、自動車産業の発展とともに、その沿線地域の産業や交通に著しい原動力を与えるが、柏原市もこの例えにもれず、産業や交通の要所となり発展しつつある。また、交通の開わりとして、大和川が奈良県下の水を集めて、生駒山脈南側の龜ノ瀬峡谷を通過し、大阪平野へ流れ出る丘陵の出口部にあたる接点としての重要な位置に在る。大阪と奈良を生駒山脈や金剛山脈がさえぎるが、陸運、川運が共にこの地区を通過する事が多くの歴史的環境を造ったといえる。

太平寺古墳群は、市域のほぼ中央部に位置し、大和川の北側で、生駒山脈の南端部に属し、平野部に向かって派生する尾根上突端に構築された古墳群である。大阪平野の方から見れば、生駒山脈はほぼ南北方向に伸びて大和川が流れ出る南端部に向かってゆるく下がり低くなっている。

平野部に派生する尾根は、同一に傾斜するのではなく、尾根ごとに様相が異なるが、尾根上方ではゆるやかな傾斜を呈し、平野部との接点となる丘陵裾部は急な斜面地であり、狹少な面積しか持たない。

また、尾根の稜線上の幅が狭いのも特徴である。古墳の位置する標高は、約40~140mの間に見られる。周辺古墳群と比較して低い古墳群に属する。古墳は尾根の稜線上に形成するのが主であるが、尾根の南北斜面を問わず、斜面の中腹部や縁辺部にも散見され、古墳を構築するための空間が狭少になった事を物語っている。



第1図 柏原市位置図

## 第2節 歴史的環境

太平寺古墳群は、柏原市安堂町に所在する古墳群である。周辺には、多くの古墳群が存在し大阪府下では随一の規模を誇る地域である。生駒山脈の南端部で、大和川以北約3.5km、東側平野部から約2.5kmの範囲に、千数百の古墳が造営されている。<sup>2)</sup> 生駒山脈の西端部の平野部に向けて突出した尾根上に形成した古墳群として、平野古墳群、大県古墳群、太平寺古墳群、安堂山古墳群、高井田古墳群が存在する。<sup>3)</sup> これらの古墳群の東側にあたる丘陵内部にも、雁多尾畠古墳群、本堂古墳群、堅上古墳群、平尾山古墳群、<sup>4)</sup> 青谷古墳群が存在する。

これらの古墳群は、概ね古墳時代後期に属する群集墳である。<sup>5)</sup> 大和川、石川を狭んで対岸に、大型古墳が造営された古市古墳群に近接しているが、古市古墳群が形成された時期にやや遅くれてこれらの群集墳が出現はじめる。そこに古墳の規模の変遷や社会構造の変化を如実に示す現象が見い出される地域である。

大和川が形成する氾濫源や溢源地を背景として、微高地や丘陵上に多くの集落遺跡がある。大和川以西の羽曳野丘陵北側の国府台地、船橋、国府、林、土師ノ里等の集落遺跡が存在する。大和川の東岸にあたる、生駒山脈西麓部にも多くの集落が存在する。北接する八尾市やさらに北側の東大阪市にかけて、集落遺跡がみられる。柏原市域だけに限ると、平野、大県、大県南、太平寺、安堂遺跡がある。これらの遺跡では、旧石器時代以来の各時期の遺構・遺物が検証されてきているが、生駒山脈から流出する土砂が厚く堆積して、遺構・遺物をよく保存している事から判明する事もまた少ない。現在知られていない地区に新しく遺構や遺物を検出した遺跡が発見される場合も多い。沖積低地部の遺跡については、大規模な土木工事に伴なう調査によって多くの遺跡が発見されている。ごく最近では瓜破北、山賀、龜井、八尾南遺跡がそうである。近接地では、本郷、川北遺跡が発見されており、いぜん深く埋蔵した遺跡の実態が把握出来ていない事を証明しているものであろう。集落遺跡の解明が進む中で、古墳群の調査も徐々に実施されるようになり、旧知されている古墳以外に新しく発見される古墳が増加している。この現象は、果樹園栽培のため旧くから破壊されてきた事を示している。そして、新しく発見される古墳もその周濠や基底部を造しているだけの場合が多い。太平寺古墳群についても、尾根筋上に築造された古墳の調査が成され、予想外に多くの古墳が密集して発見された。そしてこれらの古墳は、埴輪を持つ中期の古墳から継続した時期の古墳が造営されている事を示している。さらに、歴史時代に変遷して、手掘高杯や土馬、あるいは小力などの祭祀遺物が多数出土し、飛鳥から奈良時代にかけての時期が想定される。この時代は当古墳群直ぐ下の平野部に建立されている古代寺院が2～3kmの間隔をあけずに密集しており、祭祀遺物との関連性が注目される。

註

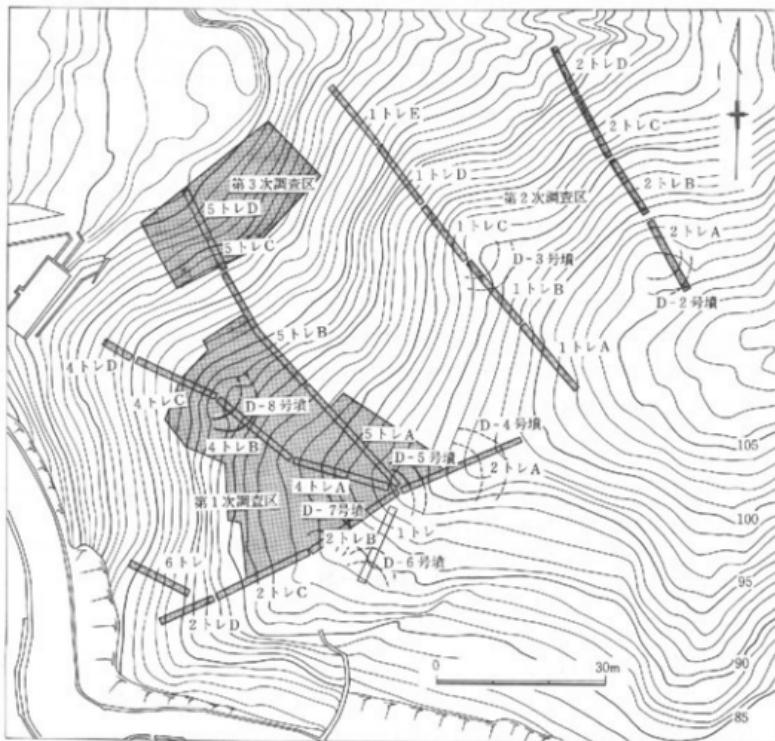
- (1) 柏原市史 第2巻 本編(I) 昭和48年
- (2) 柏原市東山地区における遺跡分布調査報告書 大阪府・柏原市教育委員会 1980
- (3) 太平寺古墳群 大阪府教育委員会 1980
- (4) 大阪府柏原市高井山所在遺跡試掘調査報告書 大阪府文化財センター 昭和49
- (5) 平尾山古墳群分布調査概要 大阪府教育委員会 1975
- (6) 「畿内の後期大型群集墳に関する一試考」「古代学研究」第42・43号合併号 白石太一郎 1966
- (7) 柏原市埋蔵文化財発掘調査概報 柏原市教育委員会 1982
- (8) 川北遺跡発掘調査概要 大阪府教育委員会 1981

### 第3章 調査

## 第1節 調査の概要

調査は、昭和56年4月1日から昭和56年12月7日までの期間、柏原市安堂町785-1 所在の太平寺古墳群最南端部において実施した。調査対象面積は、約10,000m<sup>2</sup>である。調査は、同地区を第1次、2次、3次に分けて実施した。

第1次調査区は、太平寺古墳群南端の丘陵地に位置する。この丘陵は、東西方向の伸びる尾根の先端部にある。



第2図 第1~3次調査区

調査区が位置する標高は、最高位約103.5mを測り、最低位約83.5mを測る。当地区内での既知されている古墳は、今回の調査においてD-5・7号墳とした古墳2基である。

古くから畠として整地あるいは開墾している為、旧地形からの変形が著しく行なわれており、D-1・7号墳に至ってもその外観から古墳の墳形を想定するのは困難な状態である。

これらの事情を考慮して、当地区における古墳の存在が新たに確認される可能性があるため通常古墳が存在する可能性が高い位置にトレンチを設定した。

トレンチは、また古墳以外の遺構をも考慮し、当地区内の旧状を知るための資料収集としてそれぞれ任意の適当な長さにした。このトレンチ調査によって判明した遺構について発掘調査を実施した。

第2次調査区は、第1次調査区の東側部分にあたる。標高は、最高位約111.0m、最低位約73.0mを測る。当地区は、丘陵尾根筋を中心として、北半部全域を占め、尾根筋上にはある程度平坦面が見い出せるが、ほとんど斜面地である。既存の古墳は、当地区最高所にある関西電力㈱の送電用鉄塔が建っている所を中心部分とするD-1号墳が確認されている。

また、第1次調査区と同様に、当地区内も畠としての整地あるいは開墾をした地形変化が著しく、古墳等の遺構の遺存状態が悪いように推察された。

しかし、下草伐採を実施したところ、現地形から古墳の墳丘と考えられる形状が見られた。これらの古墳と考えられる位置にその規模や時期あるいは遺存状態を知るために、古墳の保存について留意し、トレンチを設定した。よって、トレンチ位置は、古墳の周濠および墳丘部分においてのみ設定し、墳頂部にあたる中心施設より除外するようにした。トレンチは、尾根の頂上より谷筋に向けてほぼ一直線上に2本のトレンチを平行して設定した。

第3次調査区は、第1次調査区の北側の斜面地の一帯下にあたる。当地区は、第1次調査のトレンチ調査において出土した遺物や遺構と第2次調査における調査結果から、遺構の存在が予想されたので発掘調査を実施した。

	調査期間	調査対象面積	調査の方法
第1次調査	4月1日～8月20日	4,000m <sup>2</sup>	トレンチ調査後発掘調査
第2次調査	10月13日～11月14日	4,500m <sup>2</sup>	トレンチ調査
第3次調査	11月20日～12月7日	1,500m <sup>2</sup>	発掘調査

第1表 調査区一覧

## 第2節 調査日誌

昭和56年4月1日・柏原市安堂町785-1所在の太平寺古墳群の発掘調査を開始した。

第1次調査（昭和56年4月1日～8月20日）

4月1日～同月10日

トレントの位置を設定し、その位置を中心として幅10m程の範囲にわたり下草刈りを実施した。ぶどう畑の針金が多数残存しており、草刈機による伐採が困難で、急斜面地という事も調査進行を停滞させた。

4月11日～20日

伐採終了、第1、2、3トレントの掘削開始。第1トレントでは、新規の古墳（D-6号）の周濠を検出する。同溝下層の茶褐色粘質土より埴輪が出土する。第2トレントAでは、新規の古墳（D-4号）の周濠を検出する。同溝下層の茶褐色粘質土中より土師器の細片が出土する。また、同トレント内で既知の古墳（D-5号）の周濠が検出され、土師器、須恵器、埴輪が出土する。第2トレントBでは、新規に発見された古墳（D-7号）の周濠を検出する。第2トレントでは、表土下に多数の埴輪が出土する。

4月21日～30日

第2、4、5トレントの掘削、第2トレントCでは、埴輪、須恵器、土師器等が出土する。第4トレントBでは、新規の古墳（D-8号）の周濠を検出する。埴輪、須恵器、土師器が多く出土する。第5トレントA～Dでは、埴輪、土師器が出土する。第5トレントEでは、小型手挽高杯が出土し、道状遺構を検出する。

5月1日～10日

第2トレントBで確認した溝の規模や方向を調べるため、幅約7.0×8.0mの拡張を行なう。周濠の上層面で南側から西側に向けて円弧状に巡る小溝を検出する。溝上層の黄褐色粘質土中より瓦器片が出土する。下層の茶褐色粘質土より土師器、須恵器等が出土する。

5月11日～20日

拡張部の周濠を最下層まで掘削する。土師器、須恵器、埴輪等出土。基準杭を設定し、トラバースを組む。第1、2トレントの断面図の作製及び写真撮影を行なう。

5月21日～31日

第3、4、5トレントの断面図の作製及び写真撮影を行なう。

6月1日～10日

第1～5トレントの平板実測を行なう。トレント調査が終了する。

6月11日～20日

第1次調査区の古墳の発掘調査開始。調査区範囲内の下草の伐採開始。D-7号墳の表土剥ぎ開始する。周濠の全容を検出する。D-7号墳の周濠から10m程北側のところで、窯を検出する。

6月21日～30日

D-8号墳の表土剥ぎを開始する。同周濠の全容を検出する。第4トレントB（D-8号）

北側から大刀が出土する。

7月1日～10日

D-8号墳の表土剥ぎ続行。多数の埴輪と共に須恵器、土師器等が出土する。

7月11日～20日

D-8号墳の周濠の掘り下げ開始。第1次調査区全体のトラバースを組む。D-5号墳の墳丘部分の掘下げ、埴輪、土師器、須恵器等の土器片を検出する。

7月21日～31日

D-8号墳の同濠の掘り下げ続行。周濠下層遺物の出土状態の実測及び写真撮影。D-5号墳についても同様の作業を行なう。同8号墳の主体部を検出。鉄族、直刀、鎌等出土する。

8月1日～10日

D-8号墳の周濠内の遺物実測及び写真撮影。D-5、8号墳の周濠セクション断面実測を行なう。窓の立割り。土器溝りの遺物実測及び写真撮影。

8月11日～20日

D-5、7、8号墳の全景写真及び空撮。

#### 第2次調査（昭和56年10月13日～11月14日）

10月13日～20日

第1トレンチの位置を設定し、その周辺の下草刈りを開始する。

10月21日～31日

第1トレンチを、A、B、C、D、Eとして分けて掘削を開始する。第1トレンチAでは、埴輪の破片が集中して出土する。第1トレンチBでは、古墳の周濠と思われる溝を検出する。第1トレンチEでは、小型手捏高杯が出土し、道状遺構を検出する。第2トレンチの位置を設定し、その周辺の下草刈りを開始する。第2トレンチを、A、B、C、Dと分ける。

11月1日～10日

第1トレンチの掘削を終了し、A～Eまでの断面実測及び写真撮影。第2トレンチの掘削を開始する。第2トレンチAでは、古墳の周濠と思われる溝を検出する。埋葬施設を検出する。また、下層よりもう一つの埋葬施設を検出する。

11月11日～14日

第2トレンチの掘削を終了し、A～Dまでの断面実測及び写真撮影を行なう。第2次調査区の平板実測を行なう。

#### 第3次調査（昭和56年11月20日～12月7日）

11月20日～30日

調査範囲をA、B、Cに分けて設定し、下草刈りを開始する。A区では、小型手捏高杯、土器棺、羽釜棺、小刀等が出土する。炭を含む道状遺構を検出する。B区では、集石遺構を検出

する。

12月1日～10日

調査区A、B、C区の割り付け。羽釜棺、土器棺の実測及び写真撮影。C区では、道状遺構を検出する。小型手捏高杯が出土する。

12月11日～20日

A区堆積土の除去作業。全体平板実測図作製

12月20日～25日

A区一部抜張。旧地形の測量。

### 第3節 トレンチ調査

第1次調査区は、事前の試掘調査として、第1～5トレンチを設定し調査した。このトレンチ調査の結果に基づき、既知の古墳（D-5号墳）や新規に発見された古墳（D-4、6、7、8号墳）および窓等の遺構について、後日、調査をするに至ったのである。各遺構について詳細な説明は後述するが、今後のトレンチ調査の一助になれば幸いと思いここに述べておきたい。

#### 第1トレンチ

D-5号墳丘部分からD-6号墳に続く、幅1.5×長さ約15mの南西方向のトレンチである。比高差は約6.7mを測る。トレンチの中央部よりやや南側にある傾斜変換点部分から幅3.5m、深さ1.0mの古墳の周濠と思われる溝を検出した。同溝内より埴輪、須恵器、土師器等の遺物が出土した。遺物は、それぞれ細片で量的にもわずかである。溝の北側部分は、幅約1mのテラス状の平坦面がある。このテラス状の平坦面は、直ぐ北側に設けた第2トレンチBからも検出されている。D-5号墳の墳丘部分は、盛土がなく、葺石の存在は見られない。溝の堆積状況は上層から、黄茶褐色粘質土（3）、黒茶褐色粘質土（4）、薄茶褐色粘質土（5）、が見られた。

#### 第2トレンチA

第2トレンチは、丘陵尾根筋上を一直線に、A～Dに分けて設定したトレンチで、ほぼ東西方向を向き、幅1.5×長さ約23mを測る。比高差約8.2mである。D-4、5号墳のほぼ中央部分を貫くトレンチである。トレンチ東側部分には、幅5.3m、深さ1.3mの古墳の周濠と思われる溝を検出した。同溝の埋土は、上層から、灰茶色粘質土（6）、黒茶褐色粘質土（4）、薄茶褐色粘質土（5）がみられほぼ水平堆積である。（5）から、土師器、埴輪の細片が出土した。D-4号墳の墳丘については、溝の西側部分にあたるが、後世の削平を受け、確認されなかつた。この部分については、表土を約30cmを除去すると、花崗岩の岩盤である。トレンチ西側部分にも、古墳の周濠と思われる溝を検出した。当古墳については、第1次調査において詳細な

調査を実施し、後述する別項にて記述するので省略しておきたい。この二つの溝の距離は、約21mである。また、溝底の比高差約5.7mを測る。この事から、当トレンチ東側に存する古墳（D-4号墳）は、最大規模20mを越える事はない。トレンチ全体について、葺石状の石はみられなかった。

#### 第2トレンチB

第2トレンチAに統いて尾根筋上の西側に設定した。トレンチは、幅1.5×長さ約18.5mを測る。比高差は約10.3mである。トレンチ東側部分は、D-5号墳の墳丘部分については、ほとんど見られなかった。トレンチ中央部付近に、幅6.5mに、深さ1.5mの古墳の周濠と思われる溝を検出した。同溝については、後述記したい。

トレンチ西側部分については、同墳の墳丘部分と思われる土層を検出した。溝の東側部分に約1m幅のテラスを検出した。同トレンチにおいても、葺石の存在は確認されなかった。

#### 第2トレンチC

第2トレンチA、Bの西側に設定したトレンチで、幅1.5×長さ18.5mである。比高差は、約10.4mを測る。D-7号墳のある場所は、なだらかであるが、当トレンチのある場所は、急傾斜になり、上方からの堆積土がみられる。

#### 第2トレンチD

尾根筋の先端部分である。第2トレンチCに続き急傾斜である。幅1.5×長さ約10.5mである。比高差は約6.6mである。第2トレンチCからやや急な斜面になるにしたがい、斜面地利用として石垣を組み、幅の狭い段々畑が作られ、当トレンチ内にも2ヶ所の石垣が見られた。また、この石垣の裏込めの土砂は、1m以上の厚さがあり、当トレンチの上方にあるD-7号墳の墳丘の削平した土砂が、自然にあるいは人工的に移動し堆積したのではないかと考えられる。

#### 第3トレンチ

第2トレンチと約8m程の間隔をあけて北側に、ほぼ平行して設定したトレンチである。幅1.5×長さ約9.5mを測り、比高差約4.0mである。D-5号墳の墳丘西下には台形状の平坦地があり、トレンチの位置は、この平坦地の南側部縁辺部にあたる。トレンチ全体に、埴輪、土師器、須恵器等の遺物が出土した。

#### 第4トレンチA

第4トレンチは、D-5号墳の墳丘中心部分から北西方向に設定したトレンチで、A～Dに分けた。第4トレンチは、この中の南端にあたり、D-5号墳の墳丘から墳丘下の平坦地にかけて掘削した。幅2.5×長さ約17.5mであり、比高差7.9mを測る。第2トレンチBでも見られたように、墳丘は、後世の擾乱ないし削平のため、そのほとんどが消滅し、約20cmの表土を除去したところ直ぐ地山（花崗岩）がみられた。しかし、墳丘最下層部分が一部認められた。遺物の出土は僅少である。

#### 第4トレンチB

第4トレンチAの続きで、D-8号墳にかけて設定したトレンチで、幅1.5×長さ16.5mを測り、比高差約9.8mである。トレンチ中央よりやや北側部分に、古墳の周濠と思われる溝を検出した。当古墳は、全面調査を実施したので、第4節で説明を行ないたい。当トレンチ北端部には、斜面地利用の為に石垣が組まれており、その裏込めとして入れた土砂の中に、全長86cmの大刀が出土した。

#### 第4トレンチC、D

第4トレンチBの続きで、D-8号墳の墳丘裾部から北西方向に伸ばしたトレンチである。幅1.5×長さ約16m、幅1.5×長さ約6mを測り、比高差は、それぞれ約7.5、3.0mである。全体に浅く、上方から転落した土砂は少なく、約20cmの表土を除去すると、直ぐ地山（黄褐色砂礫土）である。遺物の出土は僅少であった。

#### 第5トレンチA

第5トレンチは、D-5号墳の周濠を検出した第2トレンチAから、ほぼ北側方向に、谷側に向けて、A～Dに分けて設定したトレンチである。幅1.5×長さ約26mを測り、比高差は約7.8mである。D-5号墳の中心部分に設定したトレンチであるが、後世の削平を受け墳丘の盛土についても確認されなかった。

#### 第5トレンチB、C

第5トレンチAの続きで、傾斜が急になる。この場所にも、斜面地を利用するための石垣が多く組まれている。幅1.5×長さ約24m、幅1.5×長さ約7mを測り、比高差は、それぞれ約12.8m、2.8mである。各トレンチ共に急な傾斜であるため、土砂の堆積がほとんど見られず、石垣の裏込めの土砂のみである。

#### 第5トレンチD

第5トレンチの一一番下方に設定したトレンチで、幅1.5×長さ8.8m、比高差約5.0mを測る。当トレンチは、丘陵裾部にあたり、谷との境であるところから、上方から転落した土砂の堆積が最も厚い所で約1.8m見られた。土層の堆積状況は、大別して、表土（1）、茶褐色粘質土（12）、茶褐色砂質土（13）である。トレンチ南側部の標高73m付近で、（1）、（12）の土層中より小型手挽高杯が出土した。また、（12）上層部分では、約1mの幅を持ちテラス状を呈した平坦面が検出された。この部分には、厚さ5cm程度の炭を含む土層が見られ、トレンチの東側反対側の断面にも見られたところから、繰続する遺構である事が認められた。

第1～5トレンチの他に、遺構の状況が明確にされない折必要に応じて各所に付随的なトレンチを設定し、第1～5トレンチに従属性のある結果を得た。重複するのでその成果は省略したい。

## 第4節 第1次調査

第1次調査区は、試掘調査として実施したトレンチ調査の結果に基づいて、既に古墳と判明している古墳（D-5号墳）と新規に発見された古墳（D-4、6、7、8号墳）について、安堂山配水池建設計画の予定範囲内に入る古墳についてのみ、調査を実施する事になり、D-5、7、8号墳の調査を行なった。以下、各古墳の発掘調査の成果を述べていきたい。また、古墳の周辺から検出された遺構についても同様である。

### 第1項 D-5号墳

当古墳は、調査以前から既に古墳として既知されており、第2、4、5トレンチによって、墳丘及び周濠を確認した。位置は、東側から西側にかけて伸びる尾根筋の真中に在り、トレンチ調査において発見された古墳中、中心部分になる場所である。標高最高位は、約98mを測り、各古墳の周濠の底を基準にして比較すれば、D-4号墳とは、約3mを測り、D-7号墳とは、約6m、D-8号墳とは、約10mを測る。当古墳の西側は、急傾斜に、落ち込んでおり、下方および遠方から見れば、ひときわ目立つ位置にある。

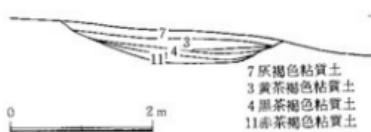
墳丘部分は、後世の擾乱を受けほとんど削平されており、主体部については何の痕跡もなかった。周濠については、尾根筋を切断するように地山掘削されており、全体として、ほぼ半円形を呈する。当古墳復元規模は、径9.0mの円墳と予測される。墳丘部分はほとんど削平されているが、地山整形後の盛土がわずかに見られた。

#### 主体部

当古墳の主体部は検出されなかった。主体部の予想された墳丘部分は耕作のために整地あるいは開墾によって削平されている。よって主体部の内部構造や規模について言を持たない。しかし、地形や墳丘遺存部分から推察すれば、横穴式石室ではなく木棺直葬であると考えられる。標高は、約97m以上を測る。

#### 周濠

周濠は、尾根筋を切断するように、地山掘削されており、尾根が伸びる方向に平行するように端部が曲折する。つまり、中央部付近は南北方向に伸び、端部になると東西方向を向く。検出した周濠の規模は、最大幅3.8m、最深部0.5m、全長10mを測る。調査では、南端部は調査対

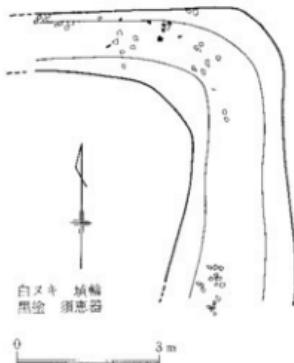


第3図 D-5号墳 周濠断面図

象外にあるところから、検出しなかった。周濠の遺存状態は、南側は概して良好であったが、北半部はかなり悪い状態であった。

層序は、表土（1）除去後、上層から、灰褐色粘質土（7）、黄茶褐色粘質土（3）、黒茶褐色粘質土（4）、赤茶褐色粘質土（11）が周濠埋土の基本層序である。堆積はほぼ水平を成しており自然埋没したものと考えられる。

遺物の出土は、主に（3）、（4）から、埴輪、須恵器、土師器等があり、埴輪が大部分を占める。これらの遺物は摩耗が激しく全体に小片が多く、同古墳に供獻された遺物とは考え難い。出土位置は、周濠中央部に集中し、北半部は点在している。周濠下層の出土遺物は、南側については埴丘寄りの底部にあり、北側については周濠外側に見られる。



第4図 D-5号墳 遺物出土状況

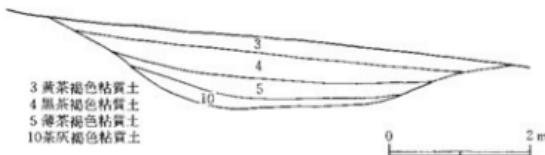
## 第2項 D-7号墳

D-7号墳は、第1次調査区で検出された5基の古墳の西側端に位置する古墳で新規に発見された古墳である。位置は、D-5号墳の西側にあたり、尾根添いに一段下がった場所で、尾根筋上にある。トレント調査において、第2トレントによって、埴丘及び周濠を確認した。現存する埴丘最高位は、約92.0cmを測る。

埴丘部分については、当古墳も後世の削平を受け、そのほとんどが消滅している。一部埴丘盛土の最下段を第2トレントB、Cにおいて見られた。このような状態で、主体部についての遺構及び遺物は何も検出されなかった。周濠については、尾根筋を切断するように地山掘削されており、今回の調査においては北半部分だけ検出しただけにとどまったが、全体として円形を呈すると考えられる。当古墳復元規模は、径10mを測る円墳と考えられる。埴丘が削平されており、明確にしえないが、周辺の調査状況から推しても葺石は存在しないだろう。

### 主体部

当古墳の主体部は、後世の削平あるいは擾乱を受け、検出されなかった。表土10~20cm除去後の埴丘最頂部は、標高約98.0mを測り、主体部はこの標高より上方に存在したと考えられる。周濠底面との比高差は、約0.5mを測る。これらの事から、当古墳の主体部施設について構造や規模及び方向性等は一切不明である。



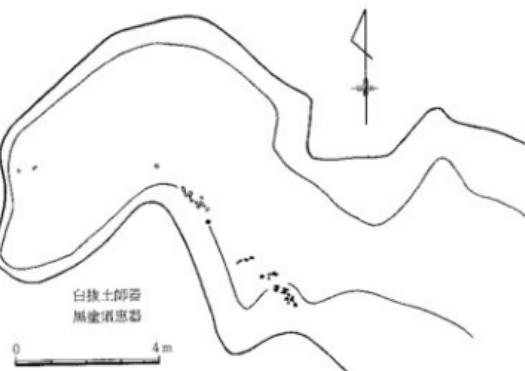
第5図 D-7号墳 周濠断面図

### 周濠

周濠は、尾根筋を切断するように地山掘削を行ない、南北方向から西側方向に向けて円弧状に巡っている。検出した周濠の規模は、最大幅6.0m、最深部1.0m、全長15mを測る。今回の調査では、北半部だけの調査にとどまり、南側については、検出しなかった。周濠の遺存状態は、概して良好であった。周濠の埋土は、ほぼ水平を成しており、自然堆積したものと考えられる。周濠の形狀は、概ね円弧状に巡っているが、検出した周濠外縁部で、当古墳の北東部分にあたる位置にやや突出した所がある。その規模は、横巾約2m、周濠縁区から長さ約1.5m突出し、周濠が地山掘削されているが、この部分については掘削を行なっていない。また、遺物及び付属するような遺構は検出されなかった。

周濠埋土の基本層序は、上層から、表土（1）、黄茶灰色粘質土（8）、黄茶褐色粘質土（3）、黒茶褐色粘質土（4）、薄茶褐色粘質土（5）、茶灰褐色粘質土（10）がある。それぞれの土層中から遺物の出土がみられたが、全体として、薄茶褐色粘質土（5）および茶灰褐色粘質土（10）からの出土が多い。

出土遺物は、埴輪、土師器、須恵器、瓦器等が出土した。埴輪は、周濠中層部分に多く見られた。周濠内側底面には、土師器、須恵器が出土したが、古墳に供獻された遺物というより7～8世紀代の祭祀遺物と考えられる。



第6図 D-7号墳 遺物出土状況

### 第3項 D-8号墳

D-8号墳は、第1次調査区の範囲内から検出された古墳の中で最北部に位置し、墳頂は87.0mを測り、一番低位の場所に構築された古墳である。当丘陵尾根の北側斜面のほぼ中腹部分にある。D-5、7号墳は、尾根筋上に構築されているのに対して、D-8号墳は、この尾根から派生した支尾根上に構築され、周辺はかなり急な斜面地である。D-5、7号墳との比高差は、現存する墳頂部を基点とすると、それぞれ11.5m、5.0mである。

周濠は、尾根筋を背にして、谷筋に向かって円弧状に掘削されている。周濠の掘削は、地山整形である。当古墳の東側の一部は、後世の削平により消滅している。残存部分は約70%である。周濠の中から、破片が多いが、沢山の遺物が出土した。D-5、7号墳と比較して一番多い量である。出土遺物は、土師器、須恵器、埴輪、鉄器等がある。主体部については、一部削平を受けているが、欠損をまぬがれた部分もあり、第1次調査範囲内で発見された唯一の主体埋葬施設である。墳丘についても、古墳の墳丘部分の盛土はほとんど削平を受け、表土除去後に直ぐ花崗岩質の地山が見られた。

当古墳の復元規模は、径9mの円墳となる。葺石については、当古墳も墳丘部分が削平されD-5、7号墳と同様な状況が見られるところから、当初からなかったものと考えられる。

#### 主体部

D-8号墳の主体部は、墳丘部分のやや北側寄りの位置に、主軸を磁北より20° 東側寄りに傾きを持って、南南西の方向に開口した埋葬施設である。丘陵地における小古墳については、尾根の先端部分を切断するように周濠を掘削するところから、墳丘部分の方が周濠を設定する場所より低い事が多く、周濠も墳丘より高い場所だけに限られるから、古墳の半周だけしか掘削していない。埋葬施設の方向性は、この半周だけの周濠の内側に向かうのが通常であるが、同墳の埋葬施設は、周濠の内側へ向かう方向と90°の傾きを持つ。

主体部の検出は、横幅0.25m、縦幅2.0m、深さ約0.5mを最大として遺存している。しかし、当初の規模は、後世の搅乱により削平され不明である。削平は、南側から北側にかけて削平された状態である。検出された坑底はほぼ水平を成しており、掘方上方から坑底にやや斜めに傾くように地山掘削を行なっている。横断面によってみれば、逆台形の形状を呈するものと思われる。掘方上面には、段を有するところがあるが、新らしい削平によるものか、墓坑を構築する際の2段掘りの段となるのかは明らかでない。

埋葬施設から次の遺物が出土した。

直刀 1点

鐵 鐵 6点

鐵 錄 1点



第7図 D-8号墳から第1次調査区を望む

この他に基坑内側床面に朱が検出された。この朱は、基坑東側隅部、基坑南側端から約10cmに位置する。大きさは、約15cm径の円形である。どのような性質のものかは不明で、朱の内側には何も検出されなかった。

また、当古墳の周辺部から鉄製品等の遺物が出土した。これらは、埋葬施設が削平された折に廃棄された副葬品と考えられる。廃棄された場所は畑の耕作時に積んだ石垣の裏込めの2次堆積土中から出土した。大刀1点、鉄鎌7点である。この土層中をよく検索したが、他の遺物は出土しなかった。

また、当古墳の埋葬施設は木棺直葬であるが、鉄製品等がよく遺存しているにもかかわらず鉄釘については発見されなかった。この事により、当古墳の埋葬木棺には鉄釘を使用しない組合せ木棺が考えられる。

### 周 漢

周漢は、尾根筋を背にして円弧状に巡り、それぞれの両端は、北側を向いて半円形で消滅している。検出した周漢は、東側端部で一部削平されて消滅しているが、大部分が遺存している。

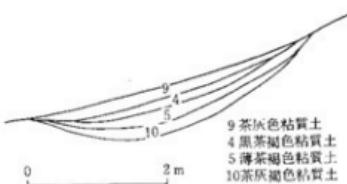
周漢は、D-5、7号墳と同様花崗岩質の地山掘削であるが、堅固な岩盤を掘削しているのが特徴的である。

周濠の規模は、最大幅3.6m、最深部0.8m全長11mを測る。周濠底面は、東側から西側にかけてゆるく傾斜している。

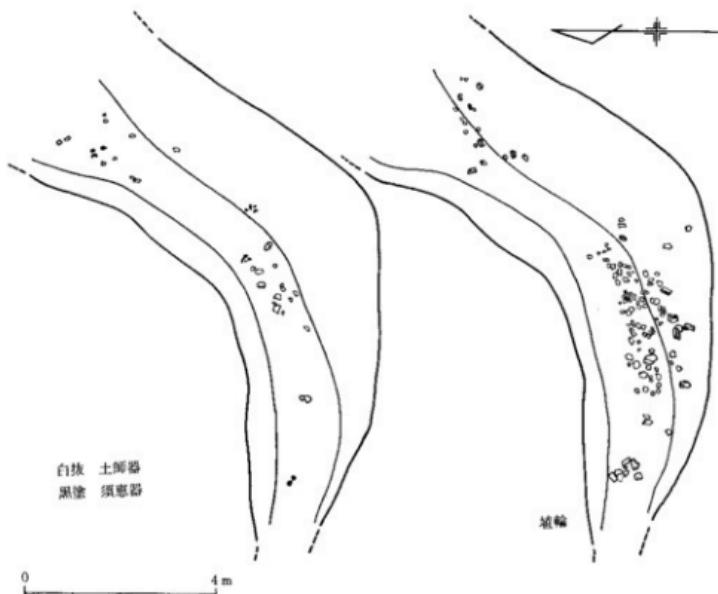
周濠の埋土の基本層序は、表土（1）、茶灰色粘質土（9）、黒茶褐色粘質土（4）、薄茶褐色粘質土（5）、茶灰褐色粘質土（10）である。遺物の出土は、それぞれ各層からみられたが、（5）、（10）層からの出土が圧倒的に多く、また、周濠の西半部に集中している。

当古墳は、調査区内の古墳の中で一番低い場所に築造されたもので、遺物の出土状況は、南側斜面上のD—4、5号墳から転落した可能性が高く、また、周濠西側が割合低い地形条件を持つ事も認められる。

遺物は、中世の土器等も見られ、後述する7～8世紀代の祭祀遺物と共に古墳からの出土遺



第8図 D—8号墳 周濠断面図



第9図 D—8号墳 遺物出土状況（周濠下層）

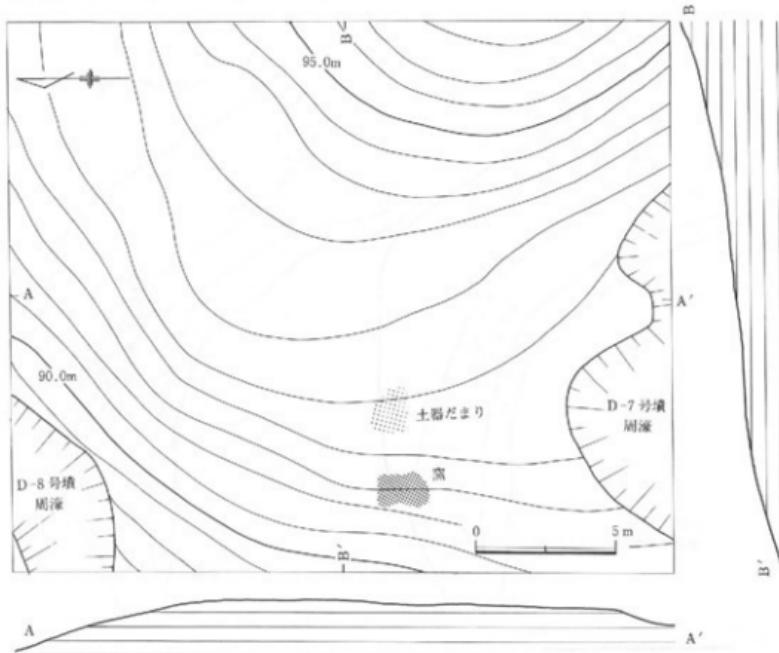
物は、埴輪、土師器、須恵器、鉄製小刀などが見られ、数量的にも、他の周濠に比べて異常に多い事が言える。しかし、完形の遺物が少なく、各器種とも細片であり、転落あるいは廃棄された遺物である公算が強い。

出土遺物の器形は、須恵器では、杯身、蓋、魁、甕、壺がみられ、土師器は、遺存状態が悪く不明である。埴輪は、馬、蓋、盾等の形象埴輪と円筒埴輪がある。

当古墳における葺石の存在は、D-5、7号墳と同様に、明確にしえないが、存在しなかったものと考えられる。

#### 第4項 平坦地

この平坦地は、D-5、7、8号墳の三つの古墳の間にあり、D-5号墳の北西方向、D-7号墳の北側、D-8号墳の南側に位置する。また、D-7号墳とほぼ同一標高で、約91.0～93.0mである。東西方向の横幅が約9m、南北方向の長さが約20mの細長いテラス状の平坦地である。この平坦地の西側方向に土器だまりと窯がある。



第10図 平垣地周辺遺構位置図

## 第5項 土器だまり

この土器だまりはD-5、7、8号墳のほぼ中間部に位置し、D-5号墳の北西方向、D-7号墳の北側、D-8号墳の南側にあたる平坦地のほぼ中央部に在する。規模は、約2.0×1.5m幅の不定形である。土器だまりの底部は、皿底状に中央部が凹んでおり、最深部で約30cmを測る。

この中には土器の他に、約10~30m 大の自然石（花崗岩質）も多く混入している。出土遺物は、須恵器、土師器、埴輪がある。遺物は破片が多く、6~8世紀代までの幅の広い時代のものが見られる。

## 第6項 窯1

本窯は、上記平坦地の西側縁辺部に位置し、大半が削平された状態で検出されたものである。規模は明確でないが、酸化層の及ぶ範囲は、南北方向4.0m、東西方向2.0mを測る。標高は、約90~91mを測る。床面は、大部分が消滅し、部分的に見られるだけで、黒茶褐色焼土層（還元層）と赤褐色粘質土（酸化層）が遺存するのみである。窯の構造は、部分的な床面の遺存から見て登窯である事が認められる以外不明である。



第11図 窯出土焼土塊

## 第5節 第2次調査

第2次調査区は、第1次調査区の東側尾根上方にあたり、その東西に伸びる尾根の背を境として北側の谷筋までの範囲である。標高は、約75~110mの範囲である。第1次調査に引き続き古墳の分布状況を把握するための調査として実施した。

当調査区の現状は、鉄塔が最高所に設置されており、その周辺、尾根筋に近い所では、ぶどう畠等の畑地として利用するための開墾が随所になされており、第1次調査区と同様ある程度造構の削平が成されている事が伺われた。尾根筋から少し離れた場所は、かなりの急傾斜になるのだが、各所に石垣が施されて畠として利用された様である。

当地区内での既知されている古墳は、D-1号墳があるが、下草の伐採を実施したところ、D-1号墳の北側に隣接する位置に1基および北西方向にやや下がった位置に1基が新発見された。当地区は、保存区域となったが、当初第1調査との比較検討するための資料収集調査が必要となり、古墳の規模や遺存状態を調査した。

第1トレンチは、小トレンチA、B、C、D、Eに分け、ほぼ南北方向に、古墳の周濠を見つけるために設定した。

第2トレンチは、小トレンチA、B、C、Dに分け、第1トレンチに平行して約25mの距離を隔てて、D-1号墳墳丘部分を南端にして設定した。

各トレンチによる調査成果を順次述べていきたい。

### 第1項 第1トレンチ

#### 第1トレンチA

幅は、2m、全長、15mを測る。第1トレンチ内では一番なだらかな斜面地である。標高102.0~107.0mを測るぶどう畠内にあたり整地または削平を受けていると思われる。表土を約10~20cm程除去すると、直ぐ地山（茶灰色粘土）がみられた。出土遺物は、尾根に近いトレンチ南側端の表土中より埴輪が数片出土した。この埴輪は、直ぐ東側に位置するD-1号墳の前方部から転落した遺物であると考えられる。

#### 第1トレンチB

規模は、2.0×15.0m、標高97.0~101.0mを測る。トレンチ北側で周濠を確認した（D-3号墳）。

周濠は、南側から北西方向にかけて伸びており、東側の墳丘を中心として、尾根筋を背にして半円形の円弧状に描くと考えられる。周濠幅は約2~3m有り、深さは約0.8mである。周濠

埋土は、上層から、表土（1）、茶灰色粘質土（9）、茶灰褐色粘質土（10）、薄茶褐色粘質土（5）である。（10）から、土師器、須恵器の細片が出土したが、時期的な判断は不可能である。他の部分からは遺物の出土はなく、周濠以外の場所では、約10~20cmの厚さの表土の下層は直ぐ地山（灰茶色粘質土）である。

#### 第1トレンチC

巾は、2m、全長、15mを測る。現状はぶどう畑として利用されており、第1トレンチCで検出した古墳を傾斜変換点として、この部分より北側寄りは、急な斜面地となる。表土の厚さは約10~20cm程あり、その下層は直ぐ地山（茶灰色砂質土）である。出土遺物は、サヌカイト剝片が出土した。風化も進んでいるところからみて、また、当地点から約100m北側へ隔てた場所から有舌先尖器が出土しており、旧石器時代の関わりをもつ遺物として注目される。

#### 第1トレンチD

トレンチ規模は、2.0×15.0mを測る。標高81.0~90.0mである。傾斜が急であり、上層からの堆積土は見られず、表土の厚さ約10mを除去すると、直ぐ地山（灰茶色砂質土）である。遺物の出土はなかった。

#### 第1トレンチE

トレンチ規模は、2.0×15.0mを測る。第1トレンチの一一番北側部で、谷筋に近いトレンチである。標高72.0~81.0mである。当トレンチは、上方からの転落した土砂の堆積が見られ、最大約1.0mの厚さを測る。標高76~78m付近で、幅約1mの平坦面を検出した。表土から約1m下層にあたり、この平坦面は、斜面地を東から西にかけて緩く下がるように地山（茶灰色砂質土）の掘削が行なわれている。この平坦面付近の層序は、上層から、表土（1）、灰茶色砂質土（14）、薄茶褐色砂質土（15）である。（14）は、地山掘削されたこの平坦地上に自然堆積した土層である。（15）は、この平坦地の直上に、約20cmの厚さで、全体を被うように堆積している。

また、（14）下層には、5~10cmの厚さで炭が、比率的に壹~壹程度混入している。全体に各層とも非常に柔かい土層であり、上方から流出した自然堆積であると考えられる。

出土遺物は、（1）および（14）から、小型の手捏の高杯と土馬が出土した。その位置は主に、平坦地の上層あるいは山側にある場所からの出土が多く、平坦地の下方からの出土はあまり見られなかった。（14）からは炭や上述の遺物以外に、土師器、須恵器が出土したが、それぞれ細片であり、各2~3片であった。これらの遺物は、器形や時期を明らかに出来ないが、祭祀遺物と考えられる。この炭を含んだ土層の状態が、第1次調査区の第5トレンチDに見られた状況と類似し、その下層にも約1m程のテラス状の平坦地を持ち、類似性が認められ、何らかの関連を求める事が出来るだろう。

また、遺物についても、小型手捏高杯や土馬等の祭祀遺物が出土し、同様の性格を持つ事が確認される。

## 第2項 第2トレンチ

### 第2トレンチA

大きさは、 $2.0 \times 15.0\text{m}$ を測り、標高は、105.5~109.0mである。

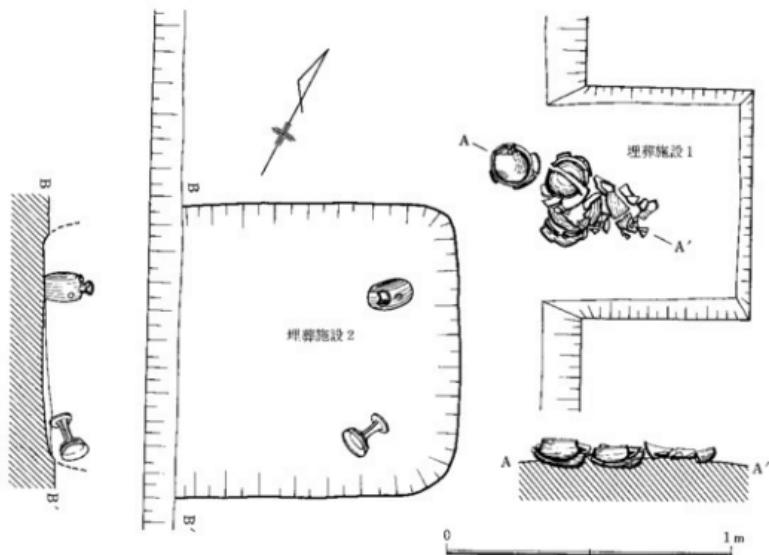
トレンチ南側より、D-2号墳の周濠と思われる溝を検出した。この溝は、南側から北東方向に向かってD-1号墳を背にし、円弧状に巡っている。幅は2.5~3.0mを測り、深さは約80cmである。検出部分は、現存する墳丘部分から見れば、当墳中心部から南東方向になる。溝の埋土は、上層から、表土（1）、黄茶灰色粘質土（8）、黄茶褐色粘質土（3）、薄茶褐色粘質土（5）である。各層とも水平堆積であり、自然埋没したものと思われる。溝底面から口縁部が破損しているが、完形に近い須恵器の壺が出土した。また、（3）からは須恵器、土師器の破片がわずかに出土している。

溝からトレンチ北端までは、D-2号墳の墳丘部分である。トレンチ断面図によって、墳丘縁辺部という制約があるが、その構築方法がよく観察出来た。

それによると、地山部分は、不自然な凹凸した場所が見られる。当墳の造営前に事前の地山整形を施した痕跡ではないかと考えられる。この地山上に構築されている。盛土の土層は、約1.4mを測る。基本的には大きく分けて上下二層に分かれ。上層は、約80cmの厚さがあり、さらに、黄茶灰色粘質土（7）、（7'）が大きく分かれ、この間層として、黒茶灰色粘質土（4）が約10cm厚さを測る土層がある。（7）と（7'）は基本的には同一であるが、（7）には、黒茶灰色粘質土の混入が認められた。下層は、約50cmを測り、さらに4層に分れる。上方から、黒茶灰色粘質土（4）、黄茶灰色粘質土（7および7'）、茶灰色粘質土（9）である。（4）は、約10~20cmの厚さを測る。次に、（7および7'）が、約10cmの厚さを測り、部分的には、20数cmを測る部分もある。さらに最下層は、地山と接する最初に基盤として積まれた土層（2）である。厚さは約10cm程である。この土層には、2~5cm大の花崗岩の小礫が混入している。

以上、D-2号墳の墳丘部分の土層を大きく上下2層に分け、さらに分層して説明を加えたが、この上下2層には、基本的に相異点がある。つまり、上層は単なる盛土として土盛したと考えられ、割合柔らかい土層である。下層は、上層と比較して全体に堅緻で、版築状に堅く敷き詰めてある。

遺物としては、墳丘縁辺部付近で、表土を約10cm掘り下げた時点で、須恵器の杯蓋が重なって出土した。東西方向に約50cm、南北方向に約25cmの範囲内に密集し、蓋と身のセットが4組以上見られた。墳丘に近い西側寄りの個体は、ほぼ完形に近い状態で遺存していくが、東側になるにつれて破損が多くなっている。墳丘の傾斜が西側から東側にかけて傾いており、そのため、西側部分はより浅い事から後世の攪乱により破壊されたものと考えられる。これらの遺物は、埋葬施設のものと考えられるが、遺構について明らかにされなかった。



第12図 第2トレンチA [D—2号墳 埋葬施設1(左)、2(右)]

遺物の出土状況は、ほぼ水平面に、正當位の杯身を上側にのせ、杯蓋を下側に裏向けて重ねてある。杯身と杯蓋がそれぞれ各1個体を1セットとして認められ、その中の3セットは一直線上に密着して置いてある。この3セットの内、東側に位置する1セットは、土圧又は攪乱等によってかなり破損しているが、他の2セットと同一であると考えられる。また、これらの3セットの南側に、同一の形態をした杯身セットが、少し上方から落ち込んだ状態で、横方向にもたれかけてある。上方を向いた杯身の内側からは何ら遺物は出土しなかった。

次に、これらの遺物から南西方向に約1m以内の場所で、約50cm程下層に、須恵器の高杯と提瓶のほぼ完形の遺物が出土した。高杯は、南側で正當位から南西方向に倒れかけた状態で、提瓶はその北側約40cm程の間隔をあけて正當位で、それぞれほぼ水平面上で出土した。これらの遺物は、堀方上場幅が約1m、堀方下場幅約80cmを測る埋葬施設の下層にある。

杯蓋身がセットで出土したものについては埋葬施設1、高杯と提瓶が出土したものについては埋葬施設2とした。

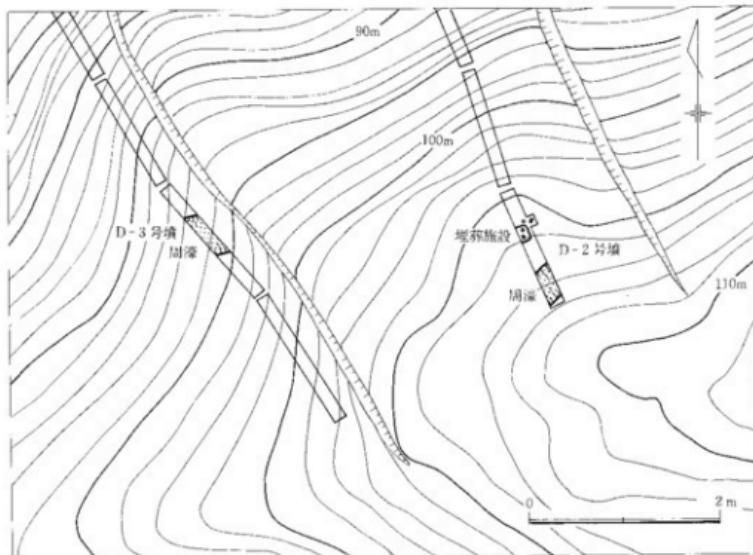
## 第2トレンチB

当トレンチの大きさは、 $2.0 \times 15.0\text{m}$ を測る。標高97~104mである。トレンチ南側の端に第2トレンチAに見られた墳丘が見られ、墳丘部分の盛土は、第2トレンチAに見られた層位と基本的に同一である。

墳丘裾部にある位置は、約50cmのテラス状の部分を掘削し、この部分に、3~5cm大の小石を混入した茶灰色粘質土(9)が敷いてあり、その上層に、黄茶灰色粘質土(8)、黒茶褐色粘質土(14)、黒茶褐色粘質土(4)が堅く版築されている。(8')および(4')は、(9)同様に同じような小礫を包含しており、直ぐ北側が急傾斜になるため、墳丘の基礎を強固にする意図があるよう見られる。この下層の土層は、それぞれ5~8cm程度の厚さである。この土層の上層には、黄灰色粘質土(16)が見られる。(16)は、厚い部分で20数cmを測り、下層と比較して柔かい。

## 第2トレンチC

当トレンチの大きさは、 $2.0 \times 15.0\text{m}$ を測る。標高88~98mを測る。比高差が約10mを測るところからわかるように急傾斜であり、表土除去すると直ぐ地山(灰茶色砂質土)である。トレンチ北側から、上方からの転落した土砂の堆積が幾分見られる。遺物の出土は見られなかった。



第13図 第2次調査区 遺構位置図

## 第2トレンチD

当トレンチの大きさは、 $2.0 \times 10.0\text{m}$  を測る。標高は83.0～88.0mである。尾根筋から谷筋にかけて設定した第2トレンチの一一番北側の谷筋に近い場所にあたり、摺鉢の底部のように徐々に傾斜が緩くなる。層序は、上方からの転落した土砂の堆積が認められ、上層から、灰茶黄色粘質土(7)、茶灰色粘質土(2)である。(7)中には、トレンチ中央部よりやや北側にあたる、幅2mの範囲で、炭を含む部分が見られた。第1次第5トレンチDと第2次第1トレンチEに見られた炭層程の多さはないが、斑点状に混入している。また地山掘削したテラス状の基道は検出されず、遺物の出土も無かった。

## 第6節 第3次調査

第3次調査区は、第1、2次調査区の調査対象は主に古墳の有無におかれていたのと違い、祭祀遺構の検出が目的であった。

つまり、第1次第5トレンチD及び第2次第1トレンチE、第2次トレンチDにおいて検出した各種の遺構が祭祀遺物や祭祀遺構と考えられるため、その規模や状況を明確にするための調査である。

調査は、第1次調査区の第5トレンチDを中心として、標高66～75mまでの斜面地に、同トレンチから西側へ約10m、東側へ約20mの範囲で実施した。同地区は、第5トレンチを中心として、西側部をA区とし、東側部を西からB、C区に分けた。

## 第1項 A区

第1次調査第5トレンチDの西側部にあたり、東西方向11m、南北方向10mを測る範囲で、遺構は、炭を包含するテラス状の平坦地を2ヶ所、土器棺4基を検出した。それぞれの遺構及び遺物については、次の通りである。

### 道状遺構1

第1次調査第5トレンチDにおける断面観察により検出された遺構で、このテラス状の平坦面は、幅約1m、東西方向約4mにわたり検出した。標高約70m付近をほぼ水平に走り、その上層は、炭を多く包含する茶褐色粘質土が被っている。炭層が存在する部分については、よく遺構を残していたが、炭の包含しない部分については、明確な遺構を検出しえなかった。遺物については、炭を含む茶褐色粘質土中から出土しなかったが、この炭を多く含む土層の上層から、手捏の高杯が数個出土した。この遺構との関連性は不明であるが、その出土状態から急斜面地の遺構である事を考えると、遺物の出土地点は、この遺構の直ぐ南側にあたる場所から転

落した公算が強い。

#### 道状遺構 2

当遺構は、A区北西部に検出したもので、A区の西側端部から北東方向に伸びる溝状の遺構である。西側端で幅約3m、全長約7mを測り、北西端部で自然消滅している。標高は66~69mである。当遺構の埋土は、茶褐色粘質土である。遺構の中央部付近では、4×2.5mの範囲で炭を多く含む土層を確認した。土器棺は、当遺構を中心として、東側から南側にかけて検出した。出土遺物については、当遺構中より何も出土していない。

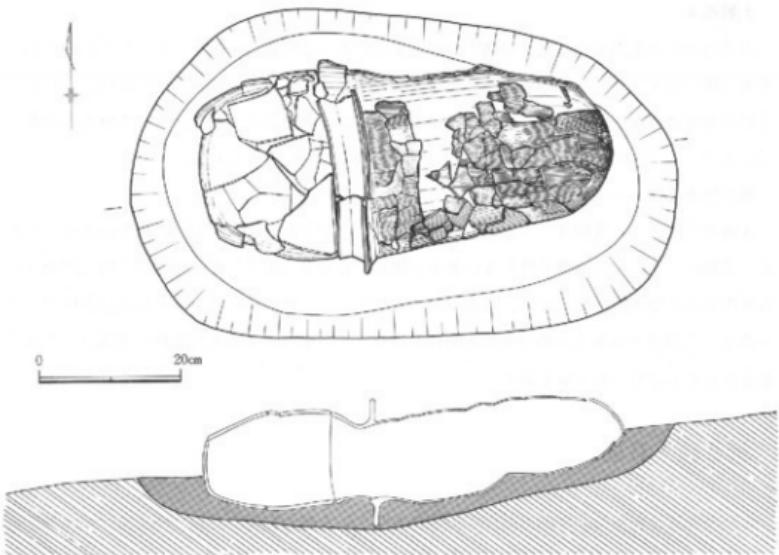
#### 土器棺 1

A区中央部付近のやや西側寄りに、道状遺構2の直ぐ南側で検出した。標高は約68mである。東西方向長径約1.5m、南北方向短径約0.9mを測る梢円形掘方を持つ土塙内に、羽釜を東側に置き、鍋を西側に置き、それぞれの口縁部を合せ口にしていている。土器棺全長1.17cmを測る。表土下約10cm掘り下げた段階で出土し、上層部分は後世の擾乱により削平されているが、大部分を現位置にとどめている。鍋の口縁を内側に入れ、羽釜の口縁を外側に被る状態である。重なっている部分は、それぞれ割れているため明確ではないが、約2~3cmの重なりがあり、口縁と口縁の間に間隙は見い出されない。羽釜と鍋の底部から掘方端部まで距離は、東西方向でそれぞれ約8、10cmを測り、南北方向でそれぞれ約12、8cmを測る。堀方底面は、同一平面でなく、凹凸があり東側から西側にかけてゆるく傾斜しており、土器棺自身もその底面に添うように傾いている。この底面に羽釜の鋸部分だけが接しているが、他の部分は、埋土である茶褐色粘質土上に横たえられている。羽釜および鍋そして堀方内からの出土遺物は無遺物である。

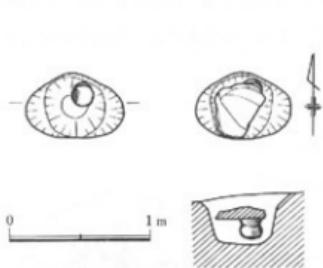
#### 土器棺 2

A地点のやや西側寄りの中央部に、急な傾斜を持つ斜面地に表土を約10cm掘り下げた段階で、道状遺構2の南側にあたり、土器棺1（羽釜棺）の直ぐ南側に、東西方向に長径70cm、南北方向に短径50cmを測る梢円形を呈した土塙を検出した。標高は67.8mである。土師器小型丸底壺を正當位に置き、その上に、35×40×15cmを測る自然石（花崗岩）をのせている。自然石の小型丸底壺の口縁と接する面は何ら人工的な加工痕ではなく、自然の平滑な面を使用しているだけである。また、土塙の規模は、この自然石を入れるために大きさとほぼ同等である。土塙の深度は約40cmを測り、ほぼ垂直に掘り窪められており、底部は、丸底状である。

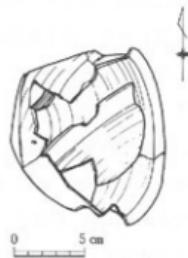
土塙の掘削されている土層は、赤黄褐色砂質土であり、軟質である。土塙内埋土は、灰茶褐色粘質土で、異なった土層は見られなく、小型丸底壺と石を安置する時には同じ土を埋戻した事が認められる。土塙内や小型丸底壺の中からは、副葬品と見られる遺物は出土しなかった。また、土塙上層が何如なる形状を成していたか、その構造はどのようにになっていたか、供獻遺物が存在したかまったく不明である。



第14図 土器棺 1



第15図 土器棺 2



第16図 土器棺 3

### 土器棺 3

A地点中央部の北側で、道状造構2の一番下側にあたる位置から出土した。標高は、約66.5mである。当土器棺は、茶褐色粘質土を掘り下げた段階で検出されたもので、土師器小型丸底壺を東側にして、須恵器広口壺を西側から被せるように横位に埋葬している。この土器棺については、上層部が削平を受けて土器棺1、2の様な土塙は検出されなかった。土器棺内には何ら遺物が見られなかった。

#### 土器棺 4

A地点の中央北端部の、道状遺構1の直ぐ東側にあたる位置から出土した。この土器棺だけが單一體で出土した。土師器の小型丸底壺の裏返した状態で出土した。この土器棺についても土塗の掘方は存在したと考えられるが、検出しえなかった。他の土器棺はすべて棺内を閉塞しているのに、この土器棺だけが開口している。木蓋の存在も考えられる。

#### 他の出土遺物

A地点で出土した遺物は、上記の土器棺の他に、小型手捏高杯、小刀、埴輪等がある。これらの遺物は、それぞれ遺構を伴わない表土や擾乱土層中から出土した。各遺物の出土場所は、A区内から小型手捏高杯、小刀、須恵器広口壺が出土し、B、C区内から小型手捏高杯や土馬が出土した場所と直線上に伸びる位置関係を持つ。この事は、これらの遺物を祭祀するための基道が必要不可欠である事を示す。

### 第2項 B区

A区の東側にあたり、東西方向10m、南北方向7mを測る範囲である。標高は、A区よりもやや高く69~73mである。

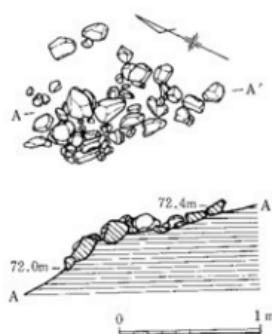
遺構は、集石遺構を検出した。A区から検出された道状遺構1やC区から検出された溝1の継続する遺構は検出されなかった。これは、斜面がかなり急な事と削平が顕著なために検出されなかったと思われる。出土遺物は、小型手捏高杯、土馬、小型丸底壺、広口壺が見られ、それれぞれ遺構に伴なったものではなかった。

#### 集石遺構 1

当遺構は、B区南西部に位置し、標高は、約72.0m~72.5mを測り、傾斜角度約12°である。集石遺構の規模は、東西方向1m、南北方向1.5mを測る。

石は、上下の重なりはほとんど見られない。石の大きさは、約5~25cm位まで各種のものが認められ、石の形状にも均一性や規則性は見い出されない。石材は、花崗岩の自然石を使用しており、加工された痕跡は見い出されない。

各石除去後は、何ら遺構は検出されなかった。また、この遺構に関わる遺物も出土しなかった。この遺構は、A区で検出された道状遺構1とC区で検出された溝1を繋ぐ直線上にある。遺構がある部分は、全体的に緩斜面に掘削されている様である。



第17図 集石遺構 1

### 第3項 C区

C区は、第3次調査区の東端部にあたり、東西方向10m、南北方向7mを測る範囲である。標高は、70~75mである。遺構は、中央部に小溝を検出した。遺物は、土師器小型手捏高杯、小型丸底壺が少量であるが出土した。

#### 溝

当遺構は、C区中央部をやや西側に下向しながら東北東から西南西に向けて走る小溝である。規模は、幅50~90cmを測り、深さは約20cmである。C区西端部で自然消滅しており、B区まで達しない。溝は、表土除去後直ぐ検出され、斜面地が急なところから堆積土もなく、地山掘削である。溝の埋土は、黄褐色砂質土で部分的に炭を含んでいる。炭の含む状況は、道状遺構1、2に見られたような集中したものではなく、第2次調査区第2トレンチDに見られたように拡散した混入である。溝内からは、遺物の出土はなかった。

## 第4章 遺物

第1次から第3次までの調査を通じて出土した遺物はコンテナに約21箱分あり、その多くは土器と埴輪片である。これらの遺物の中には、古墳の主体部と推定される位置から検出された須恵器と鉄器の他、古墳の周濠から検出された須恵器、第1次調査区中央の平坦地から比較的まとまって発見された円筒埴輪など原位置からほど遠くない場所より検出されたと認められるものがある。また、表土と第2層から多くの遺物が発見された。これら流土中の遺物の中には、古墳に伴うものと見られるが、どの古墳に属するものかは特定できない。須恵器片と、7~8世紀代と推定される祭祀関係の遺物、手づくね土器、土馬などが含まれる。さらに、土器梢として用いられた羽釜と把手付鍋のセットが1対である。以下、それぞれの古墳に伴うと考えられる遺物について略述し、その後、7~8世紀代の遺物について説明を加える。

### 第1節 古墳時代の遺物

#### 1. 土器

##### D-1号墳出土の須恵器（図版13）

D-1号墳上より周濠底へ転落したと見られる須恵器の壺が1点ある（1）。口頸部上半を欠損する。底部は丸底で、肩は丸味を帯びる。頸部は斜め上方に伸びる。やや厚手であり、内底には指押えのあとがのこる。

##### D-2号墳出土の須恵器（図版13）

埋葬施設1と推定される位置から検出された須恵器と、埋葬施設2より出土した須恵器がある。

埋葬施設2出土の須恵器は堤瓶1点（3）、高杯1点（2）の2点で、いずれも完形である。堤瓶は口頸部がラッパ状にひらき、口縁端部が下方に拡張される。把手は小さく屈曲するのみで環状をなさない。高杯は無蓋、長脚のものである。脚部はラッパ状にひらき、撥端部は肥厚してわずかに下方に屈曲する。透しは長方形のものを3方に穿っている。杯部下半にはヘラ描きによる斜線文を施す。

埋葬施設1出土の須恵器は杯身4点、杯蓋6点を数え、各々3点が完形である。杯身、杯蓋とも、ほとんど同様な形態を示している。

杯蓋（4~9）は口径15.8~16.4cmを測る大型なもので、全体に偏平な形態をなす。天井部と口縁の境の棱は丸味を持ち、わずかに段をなすのみである。口縁端部も丸味を帯びるが、内

側には浅い段をめぐらせている。また、天井部の内面には、同心円文の当て板痕を留めるもの(4・7)もある。

杯身(10~12)は口径13.0~14.8cmを測り、杯蓋と同様に大型偏平な器形である。たちあがりは長く、いくぶん内傾する。端部は丸味を帯び内側には浅い段を持つ。受部は外上方へ突出し、端部は丸い。

#### D-5号墳出土の須恵器(図版13)

周濠底より高杯の脚部2点(13・14)が出土した。これらはD-4号墳から転落した可能性もある。いずれも短脚で、長方形の透しを3方に穿つ。脚据部は明瞭な段をなして下方に屈曲する。脚柱部にはカキ目を施している。

#### D-8号墳出土の須恵器(図版13)

周濠内から、埴輪などと共に須恵器が出土している。これら周濠内遺物は、尾根上方からの流れ込みを一部に含んでいるが、ここでは、周濠底から検出され、D-8号墳に伴うと見られるものののみを取り上げる。

杯蓋(15~17)はいずれも口径10.6~12.0cmを測る小型である。天井部は丸味を持つと推定され、天井部と口縁部の境の稜は尖がり気味である。また、口縁部はわずかに外方に反るものもある。口縁端部は内側に傾斜し、明瞭な段をなす。

杯身(18~20)も口径10.5~12.3cmと小さい。たちあがりは長く、端部内面には明瞭な段をつくる。受部はほぼ水平に伸び、端部は尖がる。

甕の口縁部(23)は端部を肥厚させ断面三角形につくる。

甕の口縁部(24)は短く、頭部との境は、低いがシャープな段をなす。口縁端部は内面に明瞭な段を有する。口縁部および頭部には波状文を施す。

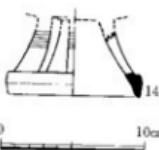
#### 土器だまり出土の須恵器(図版14)

第1次調査区中央部の平坦地から多くの須恵器片が出土している。これらはすべて表土および第2層からの出土であり、その多くは尾根上からの流れ込みと思われるが、どの古墳からのものかは確定できないものである。

杯蓋(25~27)は口径14.8~15.0cmを測る大型偏平なものである。口縁と天井部の境の稜は鈍く丸味を帯びる。口縁部はわずかに外反気味となり、端部は内側に傾斜して浅く凹む。

高杯の脚部(34)は長脚で、長方形の一段透しを3方に穿つ。透しの角には軽い面取りを施す。据部は下方に屈曲させ丸くつくる。

⑤の甕は大きくラバ状にひらく口頭部を持つ。口縁端部は上下に拡張し、断面三角形を呈する。口頭部上半には3条の沈線と2帯の波状文を配し、下半はカキ目で調整をする。この他に、有蓋高杯の蓋(31)、同杯身(32)、甕の口頭部(33)などがある。



第18図 D-5号墳出土の須恵器

## 2. 鉄器

D—8号墳の主体部と推定される位置より小刀、鉄鎌、鉄鎌が、主体部横の搅乱土中より大刀と鉄鎌が検出された。

**大刀**（図版19—1）把の末端を欠損するが、刀身は完形である。全長85.8cm、刀身長81.0cm、刃幅3.0cmを測る。鍛造。刀身はほぼ真直に伸び、鉢に向ってわずかに刃幅を減じる。鉢はわずかに丸味を帯びる。刀身の片面には鞘と見られる木質部が遺存している。関は直角につくり出す。把部が刀身に対して角度をなすのは2次的なものである。

**小刀**（図版19—2）ほぼ完形である。全長54.7cm、刀身長47.5cm。刃幅は関近くで3.0cmを測り、鉢に向ってしだいに細くつくる。把部は断面長方形を呈し、末端に向って細くする。関の付近は破損しており形状は不明である。また、把部の表面には樹皮かと見られる繊維質のものを巻きつけ、さらに木製の柄を装着した状況が観察できる。刀身にも鞘と見られる木質部がわずかに遺存する。

**鉄鎌**（図版14—3）刃先を下方に屈曲させた曲刀鎌である。完形。全長13.2cm刃幅1.7cmを測り実用に耐え得るものである。基部は小さく折り曲げてかえりとする。刃先の屈曲部には布を巻いた状況が観察できる。基部付近に柄を装着した痕跡は遺存していない。

**鉄鎌**（図版14—4～16）茎のみの破片を含めて13点出土した。すべて長頭鎌に属する。このうち④のみが片刃の鎌身を見えるほかは、柳葉式の同一形態のものである。長く伸びた範囲は断面長方形を呈している。茎は断面円形につくる。茎には矢柄を装着し、樹皮を巻き付けた様子が観察できる。

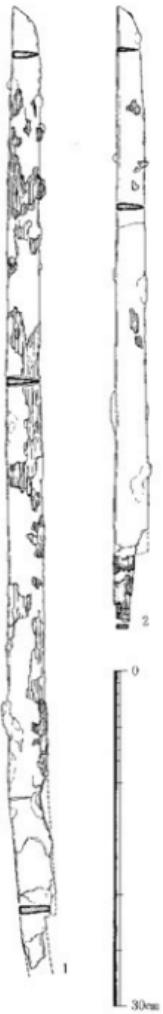
## 3. 墳輪

第1次調査区中央部の平坦地から下方の斜面にかけて列をなして円筒埴輪が発見されたほか、この付近の流土中から形象埴輪片が検出されているまた、D—8号墳の周濠中から須恵質の円筒埴輪片が出土した。

### 円筒埴輪（図版15～16）

土師質の軟質な焼成のもの（1～3、7～12）と須恵質の堅緻な焼成の埴輪（4～6）がある。全形を知り得るものはない。

土師質の埴輪は前述の平坦地から出土したもので、このうち基底部が残存しているものは①～③と⑨・⑩である。基底部の径は16.5～21.1cmを測る小型のものである。



第19図  
D-5号墳出土直刀

基底部から真直に立ち上がるるもの（9・12）と斜め上方にひらき気味のものとがある。凸帯はすべて極めて低く、断面は不整台形状を呈している。外面調整はすべてタテハケのみの仕上げである（6.5～8条/cm）。内面は指によるなで上げを行なう。基底部の仕上げには2種類のものが見られる。③は最下端までタテハケを施している。下端面は平坦である。また、これは最下段に円孔を穿つ特異な例もある。一方①は基底部までタテハケを施した後、基底部外側を板状工具で斜めにかき上げ、下端部を薄く仕上げている。

④・⑤は須恵質の堅敏な焼きで茶褐色を呈している。いずれも最上段部を残す。④はいくぶんいびつな焼き上がりで、口径は18.5×22.0cmを測る。⑤は20.0cmである。体部はどちらもほとんどの垂直に伸び、口縁でわずかに外反気味となる。凸帯は低く、断面三角形状につくる。口縁端部は平坦面をなす。外面調整はタテハケ（6条/cm）を下から上へ時計回りに施したものである。口縁部にはヨコナデを加えている。内面は口縁近くを斜めになで上げ、下方は下から上へなでている。なお、⑤には体部外面にヘラによる線刻が認められる。

⑥も須恵質の埴輪で、灰色を呈し、極めて堅敏な焼成である。基底部のみ遺存している。径は15.2cmを測る小型である。凸帯は低く不整台形状を呈する。外面最下端部までタテハケ（8.5条/cm）が施され、下から上へ時計回りに調整する。下端部は上部の重みでややつぶれたような形態を呈しており、下端部内面にはそれを補正するために、指頭で強く圧力を加えた痕が認められる。また、幅約3cmの粘土紐を卷いた痕跡も内面に観察できる。そのほか、③と⑥の下端面には成形時に粘土帯を接合した様子が顕著に残っている。

#### 形象埴輪（図版17・第20図）

馬形埴輪（1～6）と家形埴輪の破片（8～10）と見られるもの、蓋形埴輪（11・12）、盾形埴輪（13）がある。⑪の蓋形埴輪がほぼ完形であるのを除いては、すべて破片である。

①は障泥および鎧の部分である。障泥の四周は欠損しておりその外形は判らないが、表面を平滑に仕上げ、下半部はわずかに上方に反る。また一部にヘラ描きの線刻が遺存している。この上面には偏平な粘土紐を貼り付けて輪鎧の輪と柄を表現している。一方、障泥の裏面には粘土が厚く半環状に盛り上げられ、胴部との接合に備えたことが判る。明橙色を呈し、微砂粒を含む。焼成はやや軟質である。

②は馬の背の部分である。鞍の後輪の基部から尻繁を伸ばし、腰の中央部に位置する雲珠に繋げる。雲珠は粘土紐を環状に貼り付けたのみの簡単なもので、中心には円孔が穿たれている。鞍橋は基部を厚くし、しだいに薄くつくる。表面はすべて荒いハケ目を施した後、平滑になでて仕上げている。色調などは①と同様である。

③は馬の尾の部分である。粘土板を筒状に丸めて、一端を細くつくり、上方へ反らせる。現長11.5cmを測る。尾の先端は丸味を帯びる。さらに粘土紐をラセン状に2巻し、飾り馬の尻尾を表現している。黄白色を呈し、微砂粒を含む。焼成は軟質である。

④は蹄の部分である。筒状に伸びた脚の先端は段を画して太くつくる。円周の $\frac{1}{2}$ ほどの破片であるため、後部に割りがあったかどうかは解らない。①・②と同様の焼成である。

⑤は鞍橋の端に近い部分であり、体部との接合部ではざれている。鞍橋は、断面三角形状につくった粘土塊の上面に2つ折りにした粘土の薄板をかぶせたものである。基部には尻槃の末端と見られる粘土紐が一部に残存している。高さは5.5cmを測る。表面はナデで仕上げる。①・②・④と同様の焼成である。

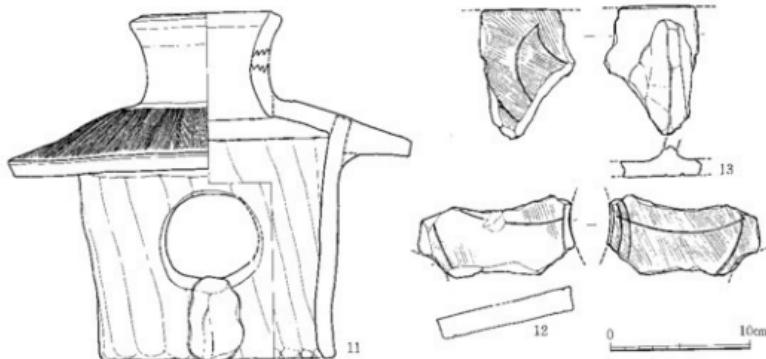
⑥も鞍橋の一部になるものであろう。全体の形状は明らかでない。つくりは⑤と同様に、芯となる粘土塊を薄い粘土で覆ったものである。また、片面にのみ履輪を表現したと見られる線刻が認められる。直線的に平行して伸びる2本の横線に、放射状の線を交差して刻したものである。黄白色を呈し、軟質な焼きである。

⑦は板状の破片である。弧状をなす側縁の一部が原形を残すのみで他は破損のため全形を窺い得ない。破片の下半部はわずかに屈曲している。表面にはやや荒いハケ目が疎らに遺存している。茶褐色を呈し、堅緻な焼きである。胎土は微鉢粒を含む。

⑧はわずかに反りをもった板状の破片である。一辺に直角の切り欠きがある。家の窓に当る部分であろうか。表面は荒いハケ目調整で仕上げ、内面は荒い指ナデである。焼成は⑦と同様である。

⑨は細長い板状の破片であるが四周とも破損している。破損した長辺に沿って鈍角に屈曲させている。家の尾根に当る部分であろうか。表面の仕上げ、焼成等は⑦・⑧と同じである。

⑩も板状をなす破片である。長辺を直線的に立ちおろし、その縁に沿って粘土紐を荒く指で押えて貼り付けている。その他の面は折損しているため、原形は明らかでない。仕上げ焼成等は⑦・⑧・⑨と同様である。



第20図 形象埴輪 (D-8号埴周濠出土)

⑪は蓋形埴輪である(第20図)。頭飾部は伴わないが、ほぼ完形である。低い円筒の上端部を覆って笠を取り付ける。円筒の高さは約17cm、笠の直径は約29cmを測る。笠の中央部には頭飾部を挿入するための頭部が接続する。頭部の上端は外反し、わずかに肥厚する。また、頭部の上縁内外面と笠との接合部、および笠の周縁は横ナデする。笠の上面は17条/cmの細かな放射状のハケ目で被われる。下部の円筒部分には向い合う位置に円孔が穿たれている。また、外面はともに指による荒いナデ上げで仕上げられている。なお、完存する一方の透し孔の下方には、円筒部の内外面に、粘土帯を2つ折りにして貼付している。補強のための措置であろう。全体に粗雑なつくりで凸帯などによる装飾はない。色調は赤褐色を呈し、微砂粒を含むが、比較的精良な胎土を用いている。焼成は良好である。

⑫は蓋の節板の破片である。内側の側縁と、外側の2段にわたる割りの一部が残存している。表面は4~5条/cmの荒いハケで調整し、線刻を施す。色調は明橙色を呈し、微砂粒を含む胎土を用いる。やや軟質な焼きである。⑪とは明らかに別個体である。

⑬は盾形埴輪の破片である。上端の一部が原形を残すのみで、周囲は欠損している。裏面には、盾を支える円筒の接合部分が残存しているところから、盾の左上端近くの破片と推定される。上面は荒いハケ(4~5条/cm)で調整し、退化した直弧文を刻する。裏面は荒い指ナデで仕上げている。色調は明橙色を呈し、胎土は微砂粒を含んでいる。焼成は堅緻である。

これらの形象埴輪片の中には、色調、焼成、胎土などが非常に似通ったものがある。馬形埴輪のうちでは、①・②・④・⑤がそれに当り、家形埴輪と推定されるもののうちでは⑧・⑨・⑩が同様である。これらの破片は同一個体となる可能性を含んでいるが、同種の破片はこの他にも多くあり、その中には必ずしも、馬形、家形にならないものもある。

## 第2節 7・8世紀代の遺物

ほぼ標高100m以下の調査区から7~8世紀代の遺物が多く発見されている。とくに第3次調査区からは土器棺として用いられた羽釜と鍋のセットをはじめとして、ミニチュアの高杯などの土器類、土馬などが出土している。これらのものは原位置を保つものもあるが、その多くは表土および堆積層中に散布していたものである。

### 1. 須恵器(図版18)

杯蓋、杯身、横瓶がD-7号墳周溝周辺の上面から出土した。また、広口壺が第3次調査区を中心として数点発見されている。この広口壺の中には後述の土師器の丸底壺と合せ口で出土したものもある(49)。

杯蓋はつまみのつかないもの(35~37)と宝珠つまみとかえりのつくもの(39~42)がある。

前者の蓋は全体に偏平な形状を呈し、やや内寄気味の口縁部をもつ。天井部と口縁部の境は丸い。口縁端部も丸くおさめる。宝珠つまみが付くと推定される蓋はいずれも小型である。天井部は盛り上がり頂部はヘラ削りする。かえりはいずれも小さく、口縁以下に突出するものはない。

杯身（38）はやや小ぶりで偏平な器形と推測できる。たちあがりは低く、内傾した後、中ほどで屈曲して直立する。受部はほぼ水平に伸び、端部は尖っている。

横瓶の口頭部（43）が1点ある。頭部はラッパ状にひらく。口縁端部は内側に折り返した様に拡張し、外傾する面をなす。残存部のはば全面にわたり自然釉がかかる。

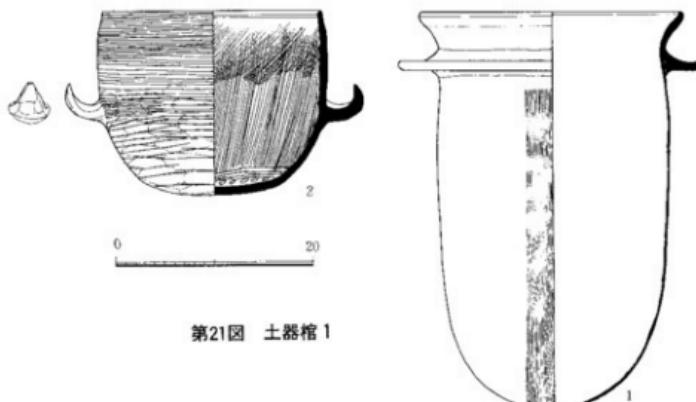
広口壺は大小2種類が確認できる。**④**～**⑥**は大型なもので**④**の口径は17.5cmを測る。**⑤**・**⑥**は断面長方形を呈する高台を具え、高台は外方へ踏ん張る。体部は底部から斜めに立ち上がり上半部で「く」の字に内寄する。頭部は大きくラッパ状にひらく。口縁は水平気味にひろがり上方へ小さくつまみ上げる。小型のもの（47～51）もほぼ同形態であるが、口縁はわずかに肥厚させるだけのものもある。口径は9.9～12.3cmを測る。これらの広口壺は大型の**⑤**と**⑥**が厚手で硬質であるのを除いては、いずれも灰白色を呈する極めて軟質な焼成である。

## 2. 土器器

### 羽釜（第21図-1）

第3次調査区より棺として出土したものである。後述の鍋と1対をなしている。

口径27.5cm、鋸径32.5cm、器高42.7cmを測る。筒状の体部に丸い底がつながる。口縁部は比較的長く、大きく外反し、端部に至ってわずかに内寄気味となる。端部は丸い。鋸はいくぶん上方へ反り気味に造らされている。口縁部および鋸は横ナデで仕上げる。体部内面はナデを施



第21図 土器棺1

し、外面は細かなタテハケ調整である。色調は茶褐色を呈し、角閃石を含む河内特有の胎土を用いている。

#### 鍋（第20図—2）

上述の羽釜とセットで棺に用いられたものである。

口径22.2cm、深さ18.9cmを測る。底部は平底風の丸底で、体部と底部の境は明瞭でない。体部はわずかに内寄気味に伸び、そのまま直口の口縁につづく。把手の平面形は比較的細い三角形状を呈し、中ほどから上方へ屈曲する。

口縁端部は肥厚し、内側に傾斜する。平坦面を持つ。

内面は全体をなでて仕上げたあと、体部に2段の斜放斜状暗文、底部に平行線文とラセン状暗文を加える。斜放斜状暗文は通有のものとは異なり下から上へ向って行なわれている。そのため、一本一本の暗文の間隔が一定せず、密に描いてはいるが、全体に乱雑な仕上がりとなっている。また、少しずつ器体を動かしながら暗文を施したため、5~7cmの幅をもって上段の斜放斜状暗文の施文開始位置が、段をなしてずれている。暗文の停止点は上段、下段とも一定していない。底部には、体部との境の位置に少なくとも3条の横位の平行暗文を施す。これは一部では山形をなすように直線を連続させながら、6~7回の接続で一周させたものである。内底にはラセン文を描く。部分的にしか確認できないが、おそらくは底部の中心までラセン文でうめたものであろう。

外面は体部上半をヨコナデで調整し、下半部から底部にかけてはヘラ削りを加えている。そのうち、横位の平行ヘラ磨きを施している。ヘラ磨きは上半部を密に、下半部はしだいに粗くなる。把手の接合部にも付根部分までヘラ磨きがおよんでいる。色調は明橙色を呈し、焼成も堅緻である。胎土はかなり精良なものを用いている。

#### 小型丸底壺（図版18）

3次調査区を中心として流土中より多く発見されているが、広口壺とセットで出土したもの（61）や、土塙内より石で蓋された状態で検出されたもの（67）も含まれている。

すべて口径11.2~7.5cmの内に含まれる小型のものであるが、そのうち<sup>60</sup>と<sup>61</sup>はやや大振りである。体部は半球形を呈し、斜め上方にひらく口縁部が付く。口縁端部を単純に丸く收めるもの、直立気味に立ち上がり口縁端部で外方に屈曲するもの（62・67）とがある。概して後者の方が器壁が薄く、平底気味である。口縁の内外面はヨコナデで仕上げ、体部内面にはナデを加える。体部外面は指頭圧痕をそのままとどめるものが多い。

#### 小型手捏高杯（図版19）

3次調査区を中心として流土中より検出されている。杯部あるいは脚部が完存するものが40点以上、この他に破片が多数ある。

器高は完形のものでも4.7cmを超えず、斜めにひらく脚部に、浅い杯部をのせたものである。

これらの小型手捏高杯を、おもに脚部のつくりによって分類すると以下の4類に大別できる。

A類（68～75）脚部が中程で屈曲して外方にひらくもの。厚手、大型のものが多い。脚部内面は細い円棒状のもので中心部を刺突し、回転させて脚柱内部を深くつくる。斜めに大きくひらいた裾端との間には明瞭な屈曲点を持つ。裾端部は丸く收めるものが多いが、中にはわずかに肥厚するものもある。杯部はやや深目のもの（68）と、浅い皿状のもの（71）がある。外面は杯部下半から脚部にかけて上下方向に指ナデを施す。さらにその後、脚部にねじりを加えたものもある（68・70・75）。脚部内面は、上半が回転によって平滑な面となり、裾部内面は指頭整形の後、なでて仕上げている。杯部はナデで調整する。

B類（76～80）脚部が斜めにひらき、裾端部で外反気味となるものである。A類に次いで厚手、大型なものが多い。脚部内面は円錐状の刺りを持ち、比較的深い。裾端部は肥厚する。杯部を残すものはない。脚部外面は上下方向の指ナデで仕上げる。脚部内面は横方向のナデで仕上げる。

C類（81～106）脚部が斜めにひらき、そのまま終るもの、あるいは裾部で内弯するもの。最も小型である。脚部内面は円錐状の刺りを持つが、B類より浅い。裾端部は肥厚しない。杯部を残すものは、すべて浅い皿状である。脚部外面は上下方向の指ナデで仕上げる。内面はヨコナデである。脚部にねじりを加えたものもある（84・94・105）。杯部内面はナデで仕上げる。この類のものが最も多い。

D類（106・107）脚部が太く、下半部が外反するもの。脚部には、いったん脚部を形作った後、内部に粘土を充填した形跡があり、内面はごく浅い凹面をなすのみである。杯部は遺存しない。脚部外面は上下方向の指ナデを施す。内面はなでて仕上げる。

#### 杯（図版18）

第2次調査区下方のEトレンチ内から2点の出土を見た。

②は丸底、直口の形態をなす。比較的深い。内面はヨコナデ調整の後、正放射状暗文を描く。外面は指頭整形の後、口縁部をヨコナデし、数条のヘラ磨きを加えている。口縁端部は小さく外反する。③は②より浅い器形で、口縁端部は内傾する面を持つ。内面はヨコナデ調整し、粗い正放射状暗文を施す。外面は口縁部をヨコナデするのみで、ヘラ磨きはない。

#### 高杯（図版18）

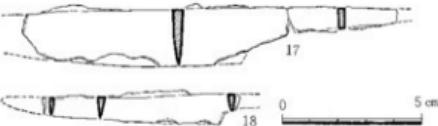
第3次調査区内を中心として多数出土しているが、図化できるものはわずかである（54～57）。④は浅い杯部に挿入式の脚部が付くものである。口縁部外面はヨコナデ仕上げ、内面は荒れのため不明である。⑤は杯底部にごく低い段を有するものである。脚部は中空で、下半部が屈曲して大きくひらく形態である。内面にはしばり目と指頭圧痕が認められる。⑥はやや小型のもので、脚は下半部に至ってゆるやかに屈曲する。⑦は浅い皿状の杯部で、正放射状暗文を施す。

### 3. 鉄器（第22図）

刀子が2点、D-8号墳の周濠および第3次調査区A区から出土している。

⑬は現長13.0cm、刀身長6.8cm、刃幅2.1cmを測る。刀身は鉛に向ってしだいに刃幅を細くする。鉛の形状は明らかでない。関はゆるやかなカーブを描いて茎につながる。茎は末端に向ってしだいに細くなる。柄を装着した痕跡は認められない。

⑭は現長6.8cm、最大刃幅1.1cmを測る。刀身はかなり細身につくられ、鉛に向ってさらに刃幅を減じてゆく。関は直角をなすように明瞭につくり出す。茎はそのほとんどを欠損している。



第22図 刀子（第3次調査区、D-8号墳周濠）

### 4. 土馬（図版20）

第3次調査区内から6点出土した。完形のものはなく、頭部が3点、胴部が1点、脚部が2点含まれる。これらはすべて土師質のものである。

①はかなり写実的な表情を持つ頭部である。頭部長は約6cmを測る。頭部と頸部は同一の粘土塊を用いており、頭部は円柱状に、頸部は立髪部分を薄くして断面三角形になるように形作っている。顔面は、ヘラの切り込みにより口を表わし、目および鼻孔も先の尖った工具の刺突によって表現している。また頭の両脇には薄い粘土を貼り付け、耳にしている。先端は欠損しており、耳の原形は解らない。立髪部分も磨滅、折損している。わずかに残った頭頂部を観察すると、先端をふくらませて丸く作っており、立髪を編んだ飾り馬を模したものである。そのほかに、馬具として手綱の面繫の表現があり、いずれも粘土紐を貼付して行なっている。粘土紐のはずれた部分も多いが、取り付けた痕が、浅い溝状の凹みとなって遺存している。手綱は口辺から頸部にかけて直線的に伸び、鏡板などはつくらない。面繫は顔の中心線を額から口にかけて縦に繋がる部分と、目と鼻の間隙を横位に走る帶とが交差している。明橙色を呈し、堅緻な焼き上がりである。

②は頸部の破片である。これは現存高で8.2cmを測り、かなり大型の土馬になる。幅の広い肩部からつづく頭部はしだいに扁平につくり、背面（立髪）はさらに薄くする。頭頂部付近の側縁は「く」の字形を描いている。立髪の始まりを意識したものであろう。顔面は残存しないが、2つ折りにした粘土板で、頸部の上端をはさみ込んで形づくるものである。頭部の上方に接着した痕跡がかすかに認められる。また、粘土帯を頸部の両脇に貼り付けたものは、耳の退化した表現であろう。さらに、破片下端の胸部に当る部分には、前脚につながるふくらみが2つつくり、出されている。なお背面の痕跡から、鞍を具えた上馬であったことが判る。

③は上述の①・②に比べてやや小ぶりな頸部、頭部の破片である。残存部はいずれも極めて扁平につくり、頸部の背側は薄く尖がる。頭部は頸部の上端を、2つ折りにした粘土板で被つて形づくる。頭頂部は折損している。口や鼻孔の表現は認められない。上端の欠損部付近に、竹管を押して目を表現した痕跡がかすかに残る。頸部中央に細長く貼り付けられた粘土紐は、一見、手綱を模したようにも見えるが、その先端が顔面の粘土板の下に隠れてしまっていることなどから、②の場合と同様に、耳の形態化した表現と思われる。色調は赤黄色を呈し、胎土は微砂粒を含む。焼成はやや軟質である。

④は尾に近い胴部の破片である。尾と胴は同一の粘土塊よりひねり出している。尾は水平に伸び先端はやや下がり気味となる。胴の下面欠損部には2つの凹みがつくり出され、後脚を挿着する際の備えとしている。鞍の表現はない。色調は橙白色を呈し、精良な胎土を用いる。焼成は堅緻である。

⑤と⑥はいずれも小型の土馬の脚部である。いずれも粘土を円柱状に丸め、下方をやや細する。下端の接地面は小さな平坦面をなし、これにより脚の傾きを知ることができる。⑤の方が⑥に比べていくぶん写実的な肉付けを行なっている。⑥は平滑な棒状を呈するのみである。色調は⑤が茶褐色、⑥が明橙色を呈している。胎土は⑤が砂を含み、⑥は精良なものを用いる。焼成はどちらも堅緻である。

## 第5章 まとめ

### 第1節 古墳の概要

調査対象地第1～3次調査区において既知されている古墳が2基存在する。第1次調査によって4基の古墳、第2次調査によって2基の古墳が新発見された。よって、調査区内では合計8基の古墳の存在が確認された事になる。

太平寺古墳群には26基の古墳が存在し、新たに6基が追加され、合計32基が確認された事になる。この内、前方後円墳3基、円墳又は円墳と見られる古墳29基である。古墳の規模は、前方後円墳が22～39m、円墳が7～15m位である。古墳が存在する標高は約40～140mに位置する。前方後円墳は、標高80～110mあり、それぞれ尾根筋の中心部分に存在している。

今回の調査区内の古墳について次の事が云える。

前方後円墳（D—1号墳）は、全長26mを測り、他の前方後円墳と比較すれば、中間の規模であり、標高は最高所に存在する。

円墳では、径7～15mまでの規模のものがあり、15m前後のものと10m前後に分類すれば、15m前後のものは、D—2号墳、10m前後のものは、D—3、4、5、6、7、8号墳に分れる。

出土遺物は、各古墳に見られるが、明確にしたのは、D—2号墳の埋葬施設から出土した須恵器の一群とD—8号墳の埋葬施設から出土した鉄製品の一群だけである。他の出土遺物は各古墳の周濠や周辺地から出土し、地形や出土状況から推察したものである。

太平寺古墳群の埋葬施設は、横穴式石室と木棺直葬がある。調査区内では、墳丘部分が削平され埋葬施設が消滅している古墳（D—4、5、6、7号墳）があり、これらの古墳については不明である。D—2、8号墳は、調査によって木棺直葬が明らかにされた。D—1、3号墳については、木棺直葬の可能性が高い。また、周辺の横穴式石室を持つ古墳の周濠や墓域の掘削状況に照らし合わせると、墳丘部分が削平されているけれども、横穴式石室である可能性は非常に低い。

現在までの調査によって明らかにされた古墳あるいは現地踏査によって判断出来る古墳について次の事が述べられる。つまり、当調査区に存在する古墳の埋葬施設が木棺直葬に限られる可能性が大きい事を述べた。太平寺古墳群は4つの尾根からなり、北側からA、B、C、D尾根とすると、各尾根に在る古墳の埋葬施設は、横穴式石室、木棺直葬、横穴式石室、木棺直葬というグループに分類可能である。

今回検出した古墳の年代については、遺物を特定の古墳と対応させるのが明確に出来なかつ

たため、古墳の変遷についてさらに詳細な遺物の検討が必要と考えられる。

古墳番号	墳形	墳丘直径	内部構造	埴輪の有無	備考
1	前方後円墳	26m	木棺直葬？	有	
2	円	14	木棺直葬	無	須恵器・蓋杯・高杯・提瓶・追葬？
3	円	11	木棺直葬？	無	土師器・須恵器細片
4	円	11	タ？	有	須恵質埴輪
5	円	9	タ？	有	蓋・馬・家
6	円	10	タ？	有	
7	円	10	タ？	？	土師器・須恵器
8	円	9	木棺直葬	有	直刀2・鐵鎌1・鐵簇

第2表 太平寺D尾根古墳一覧表（暫定表）

一応、各古墳から出土した可能性が高い遺物を示したのが上表（第2表）である。

また、これらの古墳から出土したと考えられる土師器や須恵器についても、埴輪のように大形遺物でないため、どのように廃棄されたのか把握出来ない。さらに詳細な遺物の検討が成されねばならない。古墳の遺物だけでなく、祭祀遺物も含まれているためその点についても考慮する必要がある。

埴輪についての時期も、出土須恵器と同時期が比定されうるから、古墳の変遷は、埴輪を持つ古墳から、埴輪を持たない古墳へと移る。8基の古墳の築造時期差は、最大1世紀を越えないだろう。

## 第2節 土器棺と道状遺構

土器棺は、第3次調査区のA区より4ヶ所で検出された。これらの土器棺は、羽釜と鍋を合口にしているものと土師器小型丸底壺と須恵器広口壺を合口にしているもの、そして、自然石の平らな面と小型丸底壺を合わせているもの、小型丸底壺単体で出土したものがある。

この内、羽釜と鍋のセット、石と小型丸底壺のセットは、それぞれの土器棺を埋設するための土塙を掘窓めている。羽釜と鍋のセットは上層部が削平され、掘方も底部だけを残していただけであるが、石と小型丸底壺のセットについては、土塙内にすっぽり埋っておりまったくの地下埋葬を呈している。その上層遺構については、不明である。小型丸底壺や広口壺のセットと小型丸底壺単体のものは、掘方については検出されなかったが、同様の土塙が掘削されていた可能性が強い。

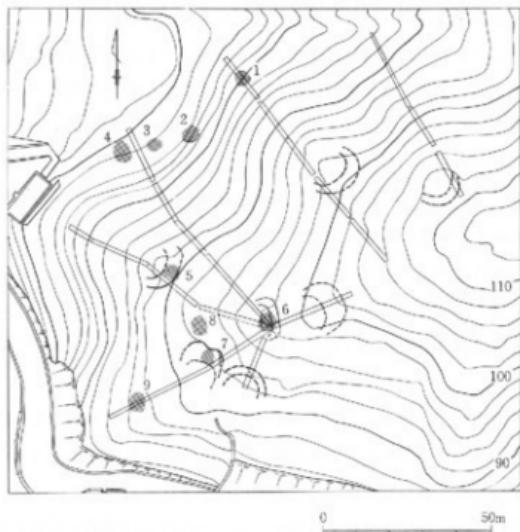
合口にしている土器棺は、横位に口縁を合わせている。羽釜と鍋のセットについては、鍋の口縁を羽釜の中へ入れ、羽釜を東側に、鍋を西側に置いている。小型丸底壺と広口壺のセットは、広口壺を西側に、小型丸底壺を東側に置くというより広口壺の中へびったり入り込んでいる。それぞれの方向については、ほぼ東西方向に向いているが、斜面地であるので転落しないように斜面に添っているのは当然の事で、方向は山の斜面に制約された理由が第1だろう。

石と小型丸底壺については、石と小型丸底壺を入れるための丁度いい土塙を掘りくぼめ、この中に、小型丸底壺を正常位に置き、この上に自然石を被せている。自然石の小型丸底壺の口縁と合わせる面は平らである。小型丸底壺が単体で出土したものは、裏向けた状態で出土した。他の土器棺はそれぞれの体部が密閉されており、開口したものはこの土器棺だけである。しかし、腐朽した木蓋等の存在した可能性が残されているものであるから、一概に単体であると断定できないだろう。

これらの土器棺はすべて、炭を包含した埋土を持つ道状造構1の道構内または極めて接近した位置に存在する。1m以内である、道状造構は、これらの土器棺埋葬するための墓道である事が考えられる。つまり、各土器棺は、急傾斜地に埋葬されており、これらの土器棺を埋葬するための土塙を掘削し、土器棺を埋葬する場合には、そのための足場となる平坦面がどうしても必要である。また、墓道の両端は、削平され消滅しているが、継続する可能性が観察された。この他に、A・B区の中間点に独立した道状造構2があり、C区中央部に溝を検出した。この両道構についても墓道の可能性があり、道状造構2の埋土内には、道状造構1の埋土内に混入した炭と同様の状態の炭が存在する。溝埋土中にも、割合希薄であるが炭の混入が見られた。3次調査区の全域から、小型手捏高杯が出土したが、特に土器棺や道状造構あるいは溝の周辺に多く、そしてまた、これらの道構の南側にあたる少し斜面上方の場所からの出土が中心となっているようである。この小型手捏高杯については再度検討を加えたいが、墓前祭祀の遺物と考えられ、道状造構2や溝1についても、墓道として使用せられた痕跡であると考えられる。

### 第3節 祭祀遺物

今回の調査において、祭祀遺物と考えられる遺物が多数出土した。その種類は、小型手捏高杯、土馬、小刀、小型丸底壺、広口壺、須恵器蓋杯等である。小型丸底壺や広口壺については、土器棺として埋葬された道構からの出土もあり、藏骨器としての性格も考えられるが、一応、祭祀遺物として取り上げておきたい。古墳については、多くが削平されており、遺存状態が非常に悪いところから、古墳の墳丘上や周塚内あるいはその周辺に位置したであろう祭祀遺物も、同様の擾乱を受けているところから祭祀に関する道構について、何らの痕跡も持たない。以下、出土場所別による祭祀遺物について説明を加えたい。



第23図 祭祀遺物出土地点

地 点	出土地点	標高(m)	小 型 手 捺 高 杯					小 刀	土 馬	小 型 丸 壺	広 口 壺	須 恵 器 蓋 杯
			A	B	C	D	合計					
第1地点	2次第1トレンチE	77~79			1		1		2			1
第2地点	3次C区	72~75			4		4				4	
第3地点	3次B区	71~73	10	4	10		24		1	1	1	
第4地点	3次A区	66~71	9	4	22		35	4		4	4	1
第5地点	D—8号墳周濠	86~89	1	3	5		9	1	(1)			
第6地点	D—5号墳周濠	96~98		1	2	1	4					
第7地点	D—7号墳周濠	91~93	1		5		6		1	1	1	3
第8地点	土塙1	91~94	1	1	9	1	12		(1)			2
第9地点	1次第2トレンチD	80~83	2	1	13		16					
計		66~98	24	12	61	2	111	5	6	10	7	6

第3表 祭祀遺物 出土地点別一覧表

注: 数値は、出土数量を表わす。この他にも破片が多く出土したが、1個体と判断出来るものについてのみの数値である。

祭祀遺物の出土地点は、大別して 2ヶ所に分ける事が出来る。D-5、7、8号墳がある丘陵尾根先端部の古墳周辺部にあたる地区と丘陵尾根北側斜面下方にあたる地区である。

1ヶ所目の地区は、尾根先端部の古墳の周濠内やその周辺に見られる。D-5号墳より標高の高い場所に在る古墳（D-1、2、3、4号墳）には、調査範囲が狭少のため発見されなかつたという制約はある。しかし、祭祀遺物は、表土採集する事も可能な事から、その確認のため検証したが、その痕跡がなく、祭祀遺物が存在した可能性は極めて少ない。古墳の周濠（D-5、7、8号墳）に多い事は、祭祀場所が、古墳の墳丘部や周濠にあった事を物語るものである。古墳以外の出土地点は、D-7号墳より西側下方にあたる地点とD-5、7、8号墳に取囲まれた地点がある。D-7号墳より西側下方にあたる地点は、トレンチ南側に古墳が存在した可能性があり、D-5、7、8号墳のように古墳周辺からの出土であると考えられる。D-5、7、8号墳に取囲まれた地点は、祭祀対象となるべき事物等は見い出されないが、丘陵先端の中央部に位置し、各地点への経由場所としての立地条件を持ち、各祭祀場所と何らかの関連性が見い出される場所である。

2ヶ所目の地区は、丘陵尾根北側の谷筋に近い斜面地である。当地区の特徴は、斜面に平行して東から西へ一直線に並ぶ事があげられる。この直線と平行するように、現在使われている里道もすぐ下方に在る。遺構は、道状遺構や溝として説明を加えたが、祭祀遺物は、これらの遺構を中心として出土しているところから、とりもなおさず祭祀に関する墓道たる事を示すものであろう。

祭祀の対象となる物については、上述の如く 1ヶ所に集中する事なく、点在する事が認められるのである。また、無軌道に点在するのではなく、尾根先端部に存在する古墳を中心に見られたり、古墳とは関わりなく、墓道を中心としてのグループに分けられる。しかし、対象物を特定する事は困難である。古墳の被葬者に対する祭祀としても、D-5、7、8号墳等西側に在る古墳に見られ、D-1、2、3号墳等には祭祀遺物が発見されていない。この事は、各古墳の被葬者に対する祭祀ではなく、祭祀の行なわれた古墳の存在する場所に何らかの意味がある事を示すものである。今後検討する必要があろう。

次に、出土遺物の種類による検討を行ないたい。

小型手捏高杯は、その数量点数からすれば一番多い遺物である。この遺物は、軟質で薄いところから破損しやすいために破片が多くなった。一応、A～D類までの4型式に分類したが、この他に分類出来ない遺物もかなりを数える。各型式について獨干の説明を加えると、次の如くである。

A型式は、土器棺や集石遺構を検出した第3、4地点からの出土が多く、他の地点からの出土はまばらである。B型式については、A型式からC型式に変遷する過渡期になるもので、A型式と同様な出土状況が見られる。C型式は、総数の半数以上を占め、製作上一番簡素化した

型式である。他の型式同様に、第3、4地点に集中する傾向を持つが、各地点にまんべんなく見られるようになる。D型式については、2点の出土数しか見られず、出土地点の傾向については明確にしえない。

小刀、土馬、小型丸底壺、広口壺、須恵器蓋杯等の遺物は、それぞれ5～10点が出土しているが、名遺物共に一ヶ所に限定した出土ではなく、各地点に点在する傾向をもつ。この事は、小型手捏高杯と同様に祭祀対象が同一の事物に対してではなく、祭祀場所が移動していく事があげられる。祭祀場所が移動する事と各地点の出土遺物に見る時期的な変遷は認められない。

これらの祭祀遺物は、7～8世紀の祭祀遺跡からあるいは集落遺跡から不遜的に出土している。しかし、祭祀遺物としての使途や性格を特定出来る遺物というのは少なく、集落遺跡のように多種類の遺物が同時に出土する場合には、とりわけ祭祀遺物としての性格を持つ遺物を限定する事が困難である。小型手捏高杯、小刀、土馬、高杯等の遺物については、祭祀に関わる遺物として幾分の配慮が成されるけれども、小型丸底壺、広口壺、須恵器蓋杯、羽釜、鍋等の遺物は本来の性格からみれば、祭祀遺物として取扱われ明確な造構に伴なって出土する稀なケースしかない。

今回の調査によって出土した遺物は、祭祀遺物としての性格を持ち、各遺物ごとのセット関係を言及出来なかった事は今後の課題を残したもの、その出土が集中的な状況ではなく、数ヶ所に分かれて検出したところから、出土傾向や時期変遷を考える上で多くの成果が得られた。

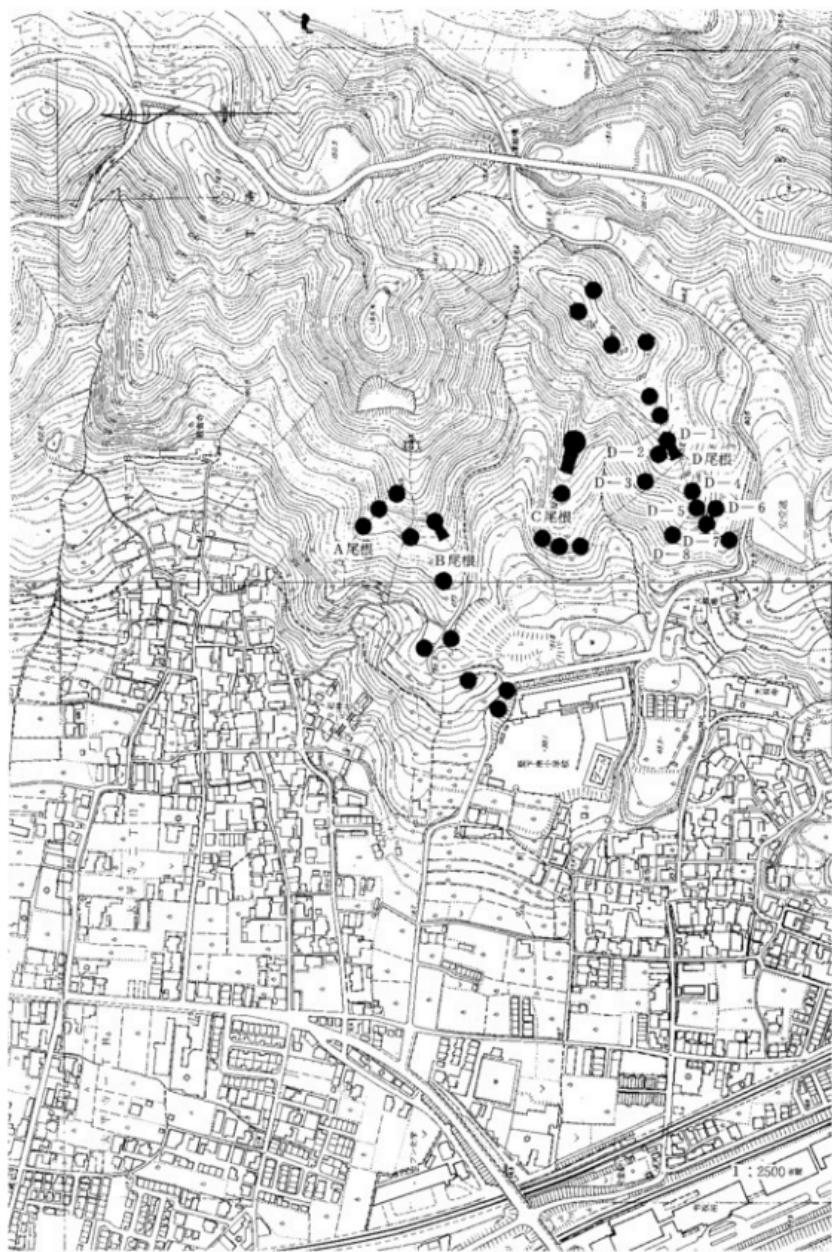
各遺物の出土分布は、出土地点別一覧表（第3表）に示した如く、各地点内からみた出土遺物をセット関係として捉える事は大過ないものである。しかし、そのために次の2つの条件を考慮しておかなければならない。第1点は、地上祭祀として使用した遺物と地下埋葬した遺物とに分け、この分離した地上祭祀と地下埋葬の遺物をセット関係として捉える事である。地上祭祀には、小型手捏高杯、高杯、土馬があり、地下埋葬として、小刀、小型丸底壺、広口壺、須恵器蓋杯等が考えられる。地下埋葬遺物は、各造構から出土したセット関係以外にセットとなる可能性は少ない。第2点は、出土地点が広範囲に及ぶところから、各地点での造構・遺物の遺存状態の相異がある。各遺物の出土数値はあながち不明瞭な割合を表わすものではないが、後世の散逸した危惧もあり、比較検討には注意を要する。

今後、祭祀遺物の検討を前述したセット関係だけにとどまらず、その方法、用途及び場所的、時期的変遷を辿る必要があろう。また、これらの祭祀遺物と時期を同じくして、当地区西側直下の丘陵裾部に河内六寺と呼ばれる古代寺院が在り、これらの古代寺院との関係も多いに注目されるところである。

図 版

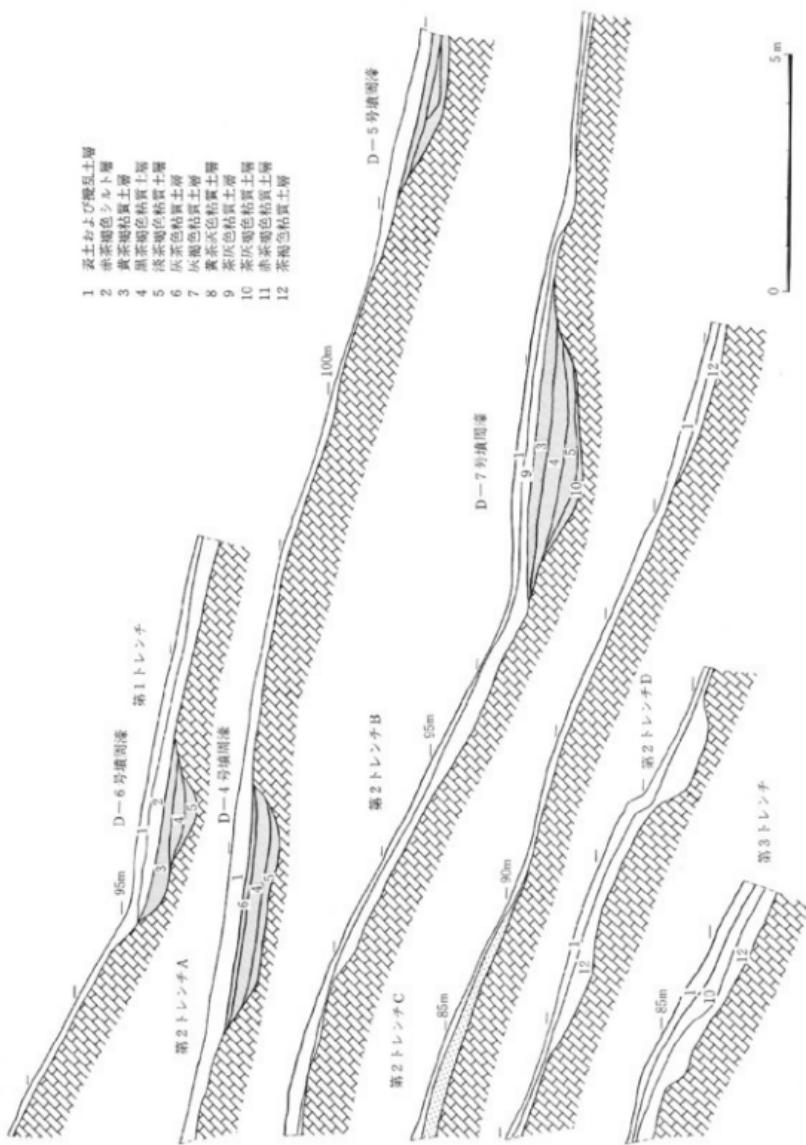


図版一 太平寺古墳群

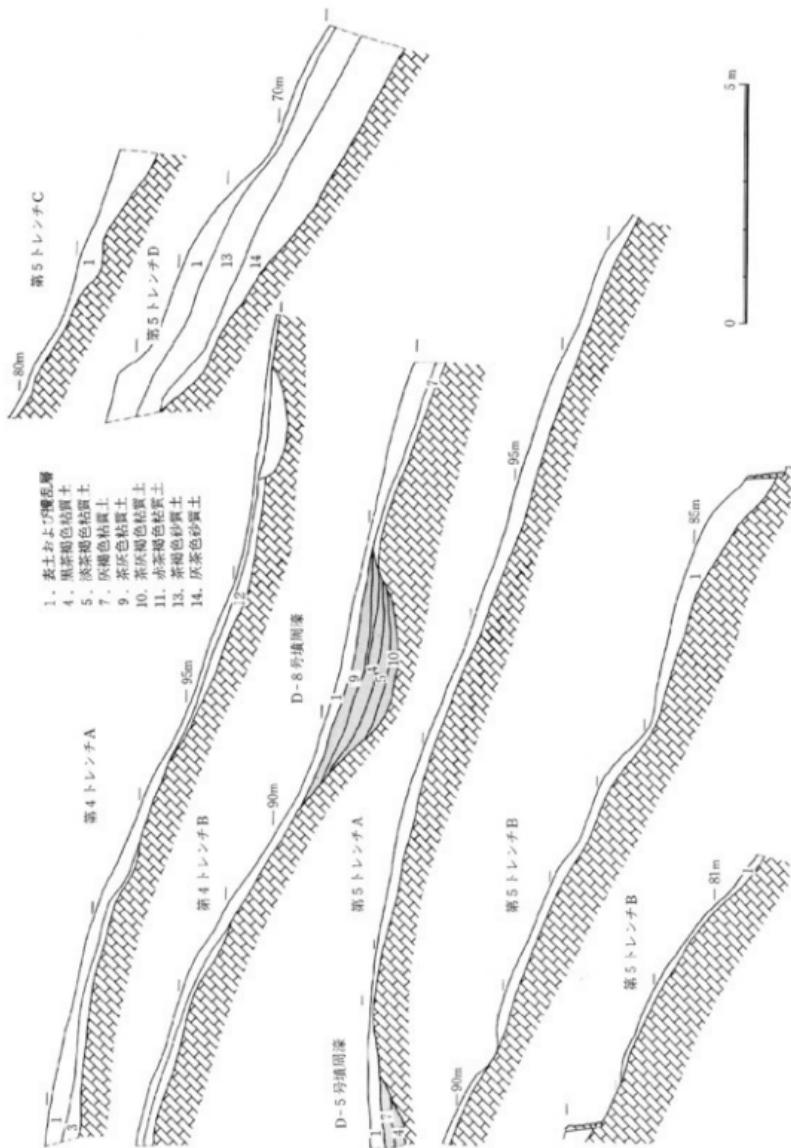


太平寺古墳群

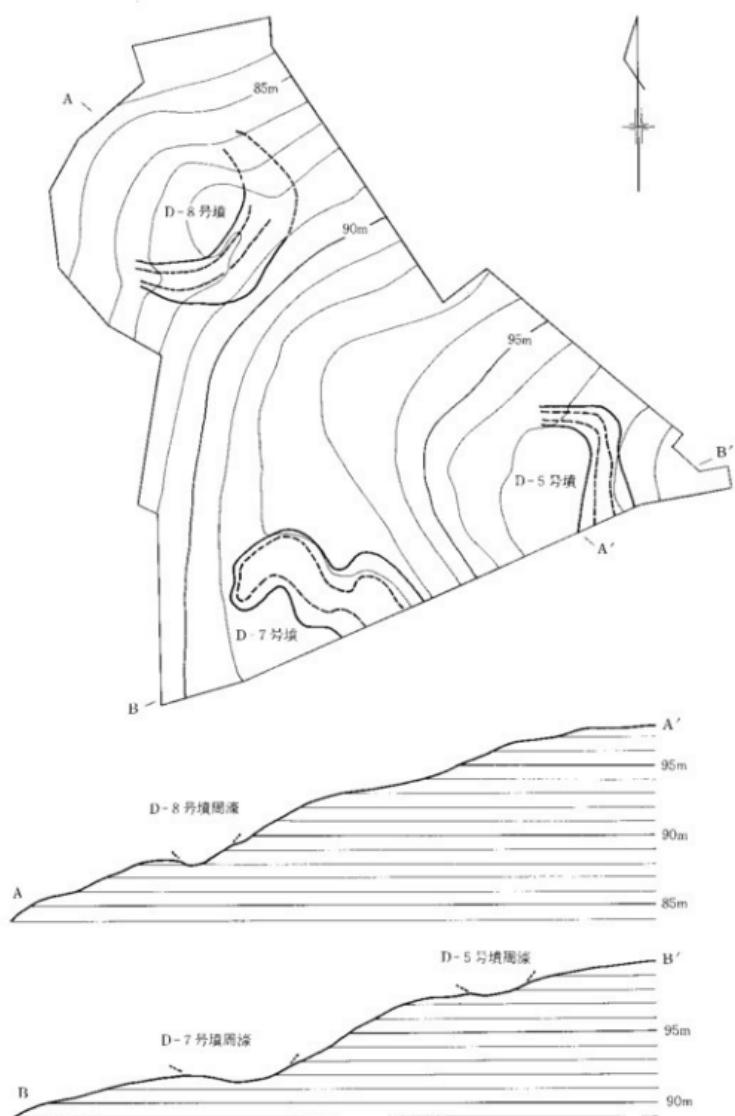
図版一 第一次調査区 第一～三トレンチ断面図



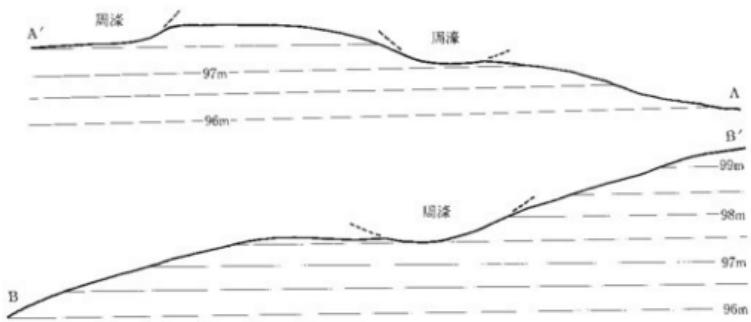
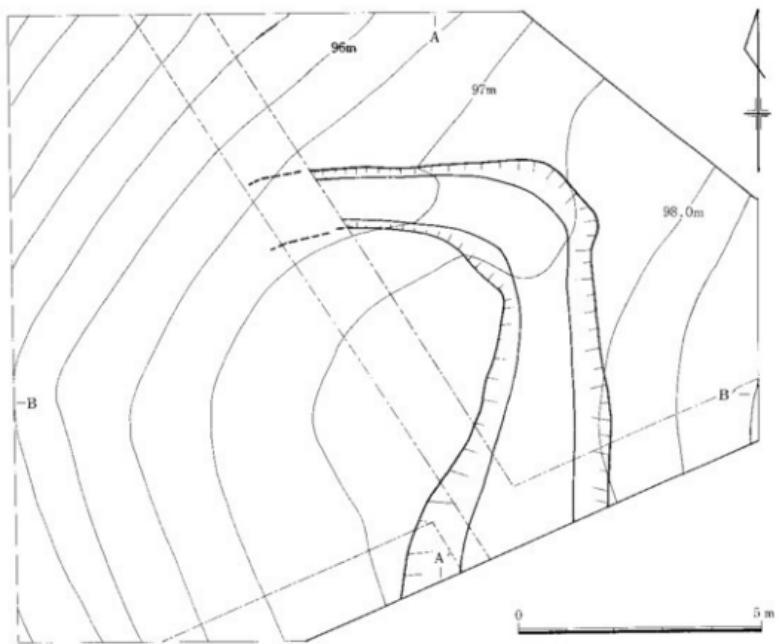
図版二 第一次調査区 第四～五トレンチ断面図

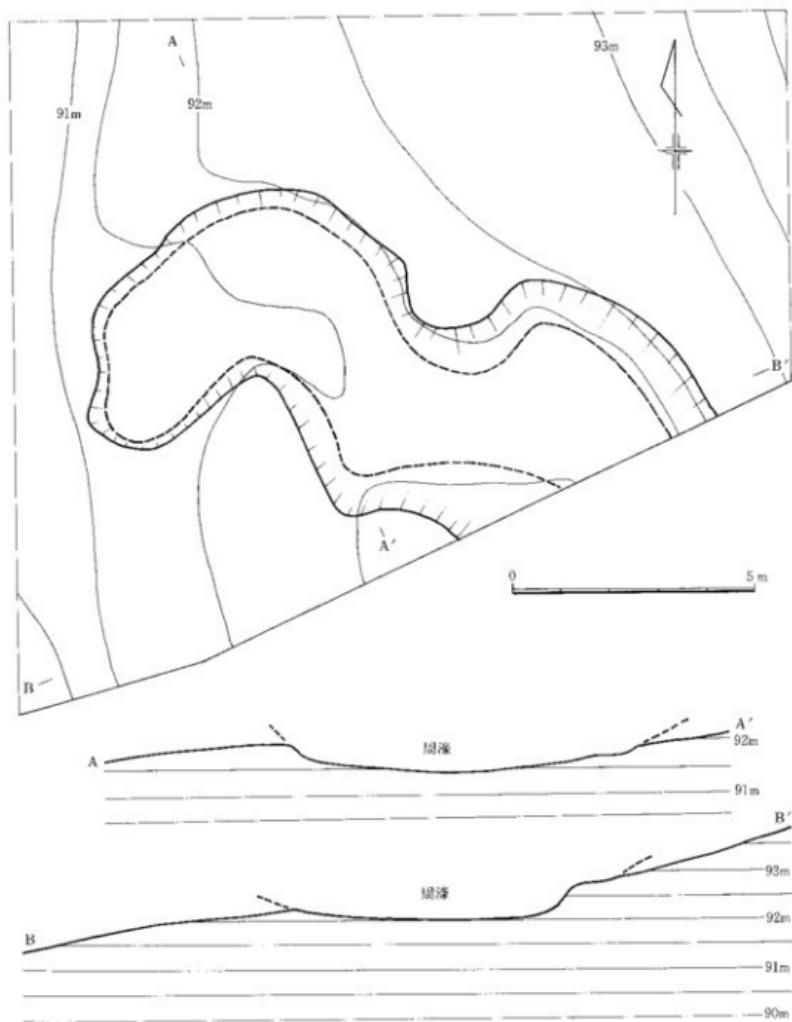


図版四 第一次調査区全体図

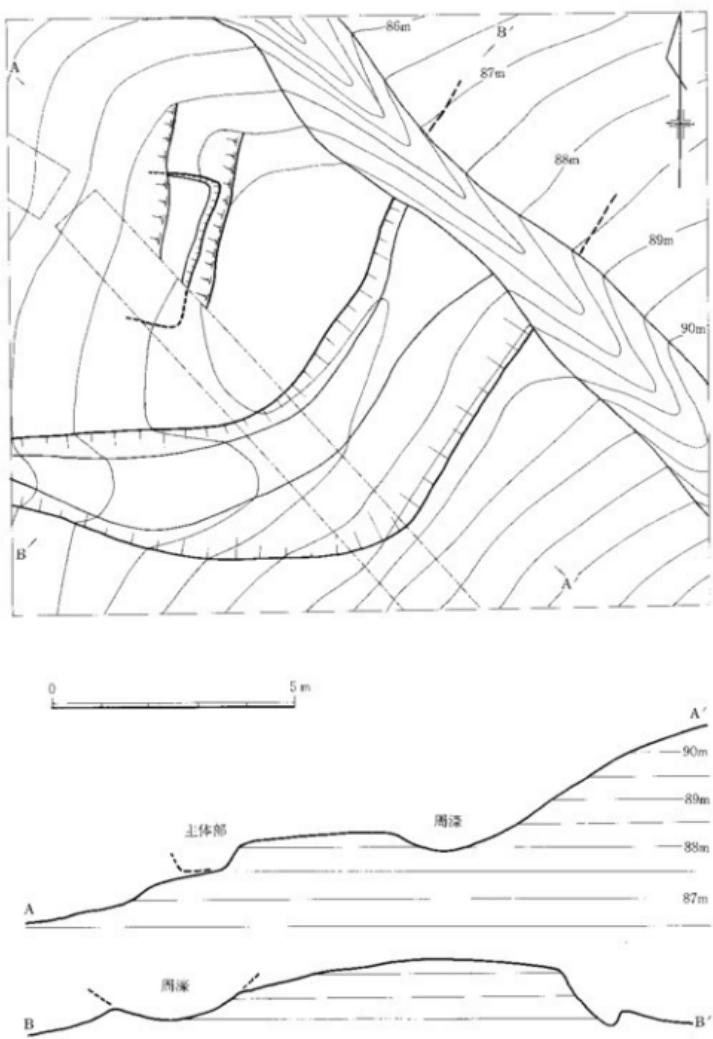


図版五  
D-50古墳

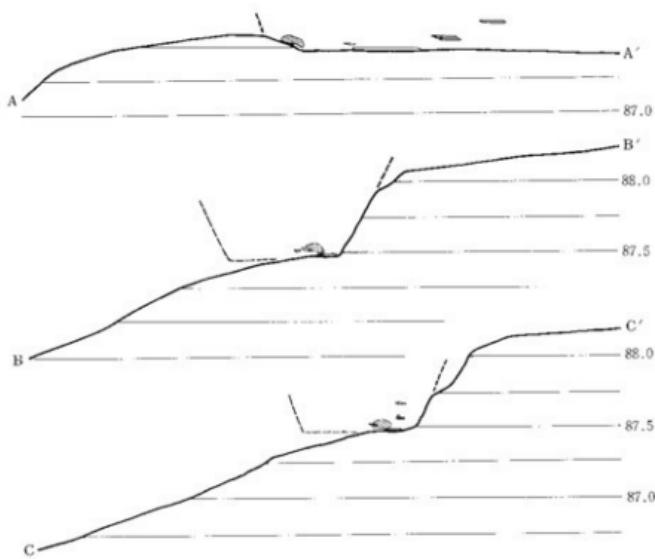
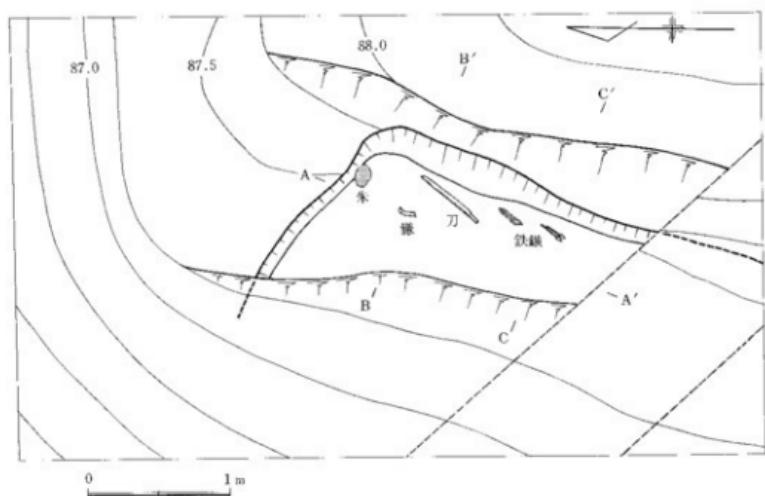




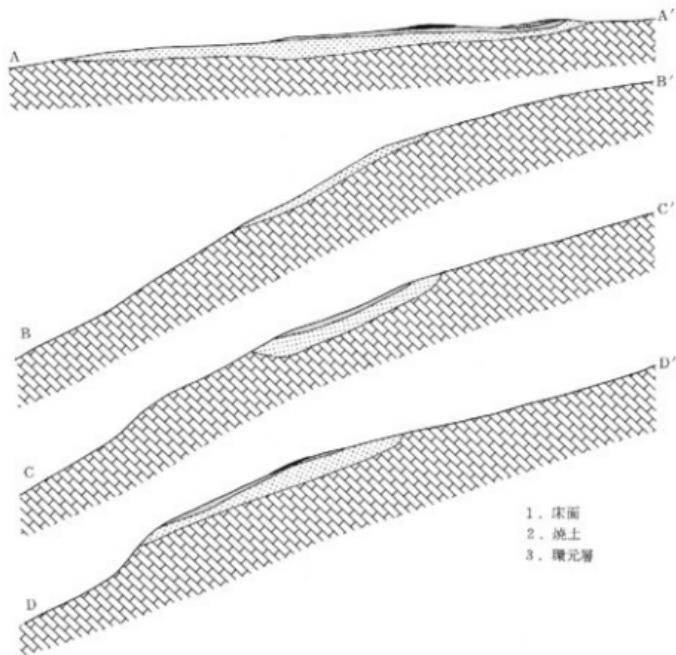
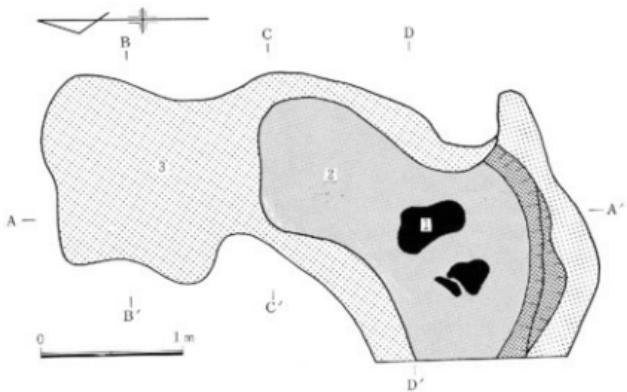
図版七 D—8号墳



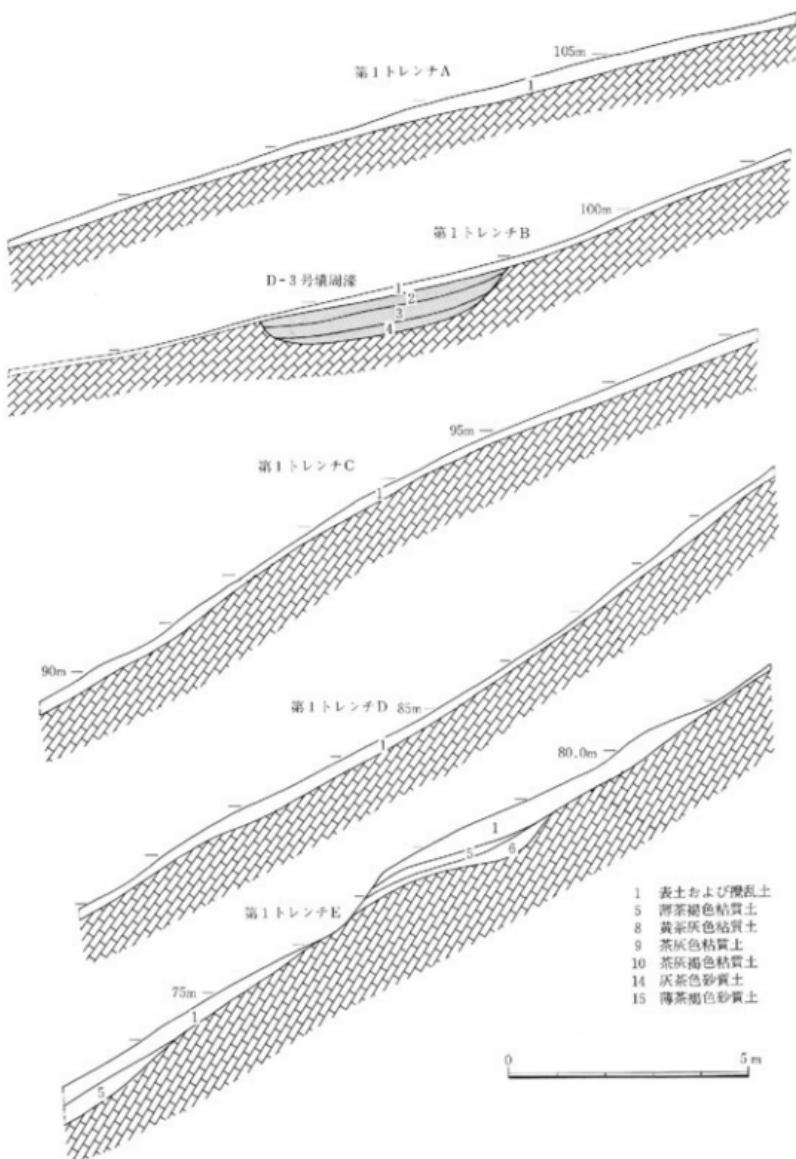
図版八 D→8号墳主体部



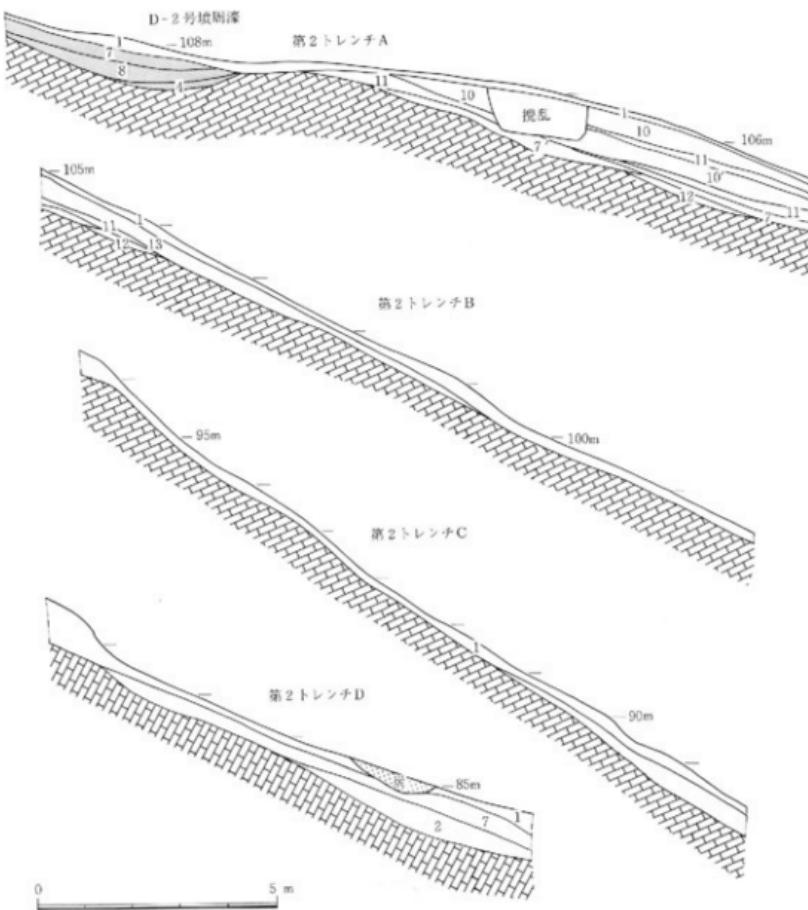
図版九 窓平面図・断面図



図版一〇 第二調査区第一トレンチ断面図

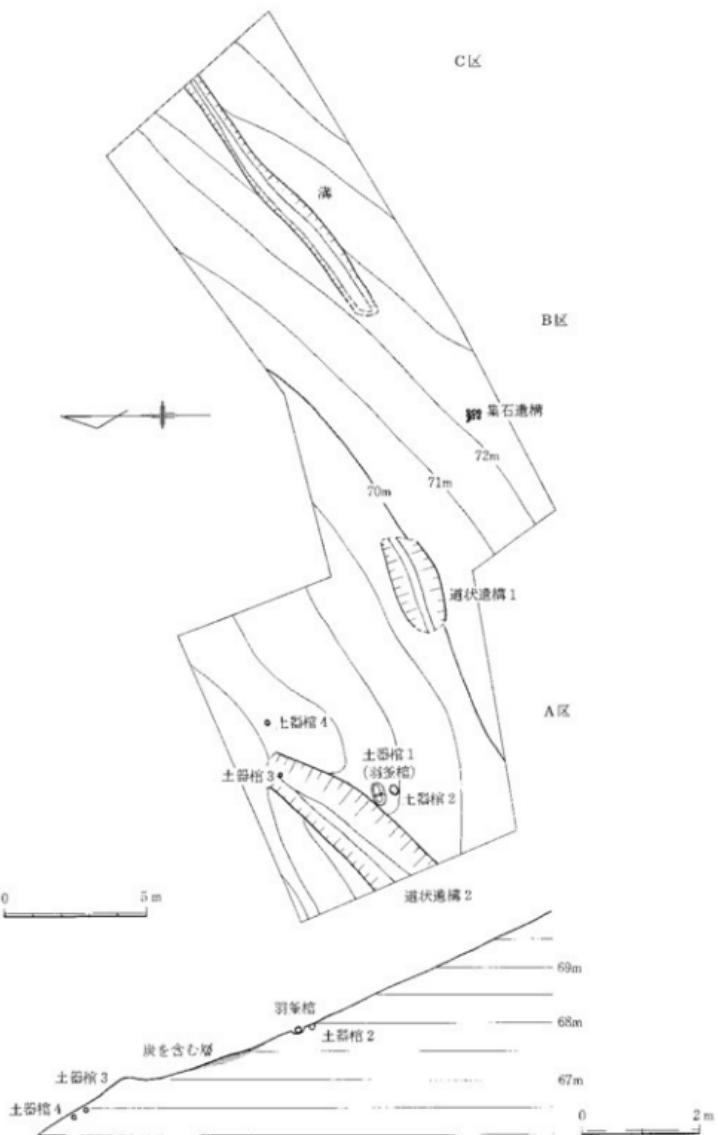


図版一一 第一調査区第2トレンチ断面図

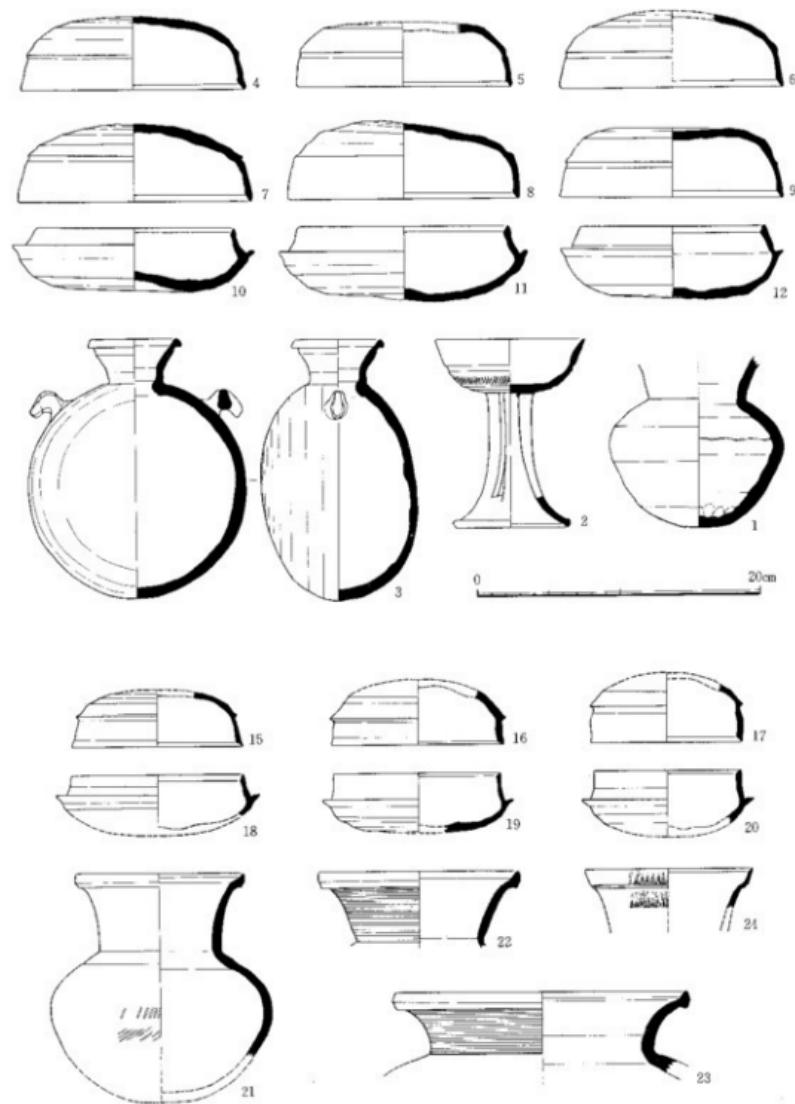


- |            |             |                   |
|------------|-------------|-------------------|
| 1 表土および擾乱土 | 5 薄茶褐色粘質土   | 8' 黄茶灰色粘質土（小礫を含む） |
| 2 赤茶褐色砂質土  | 7 灰褐色粘質土    | 9 茶灰色粘質土          |
| 3 黄茶褐色粘質土  | 7' タ（小礫を含む） | 16 黄灰色粘質土         |
| 4 黑茶褐色粘質土  | 8 黄茶灰色粘質土   |                   |

図版一二  
第三次調査区全体図

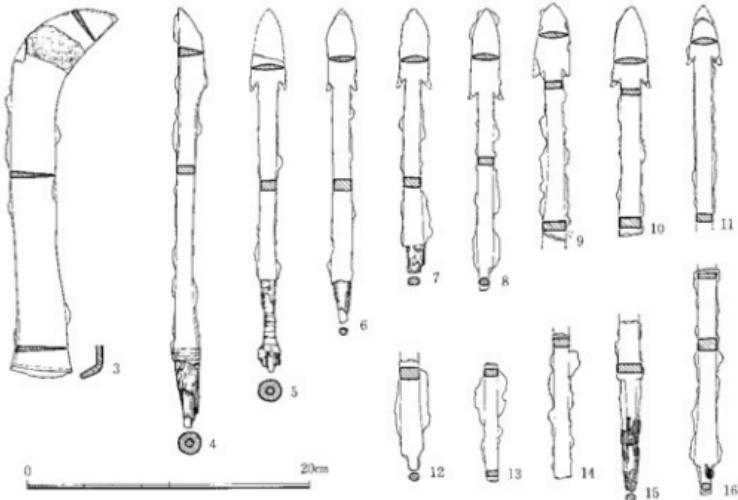
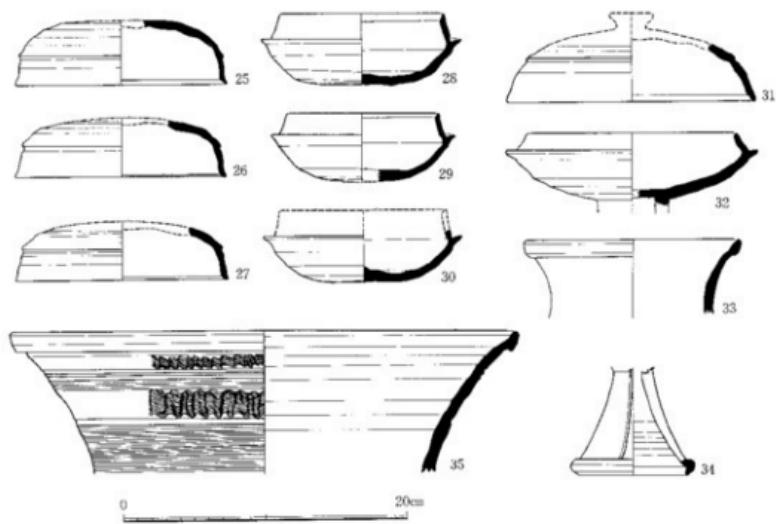


図版一三 古墳出土の須恵器実測図



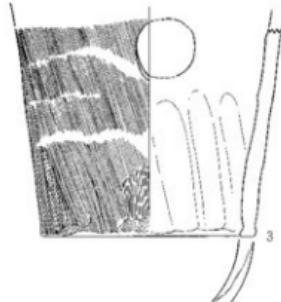
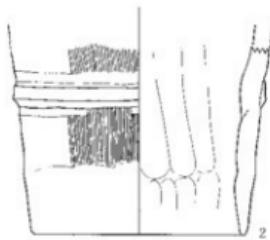
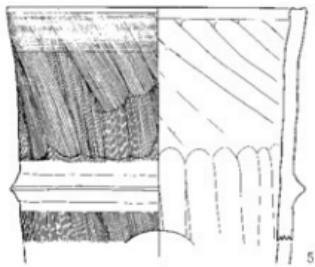
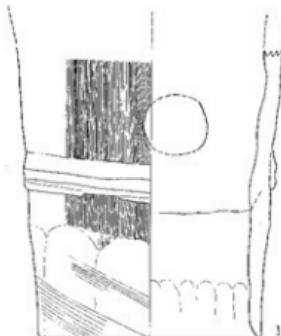
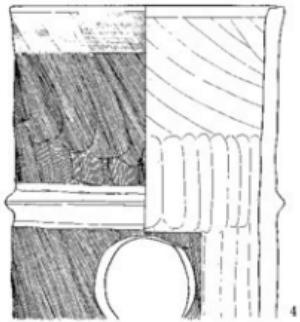
1. D - 1号墳出土 2~12. D - 2号墳出土 13~23. D - 8号墳出土

図版一四 古墳出土の須恵器・鉄器実測図



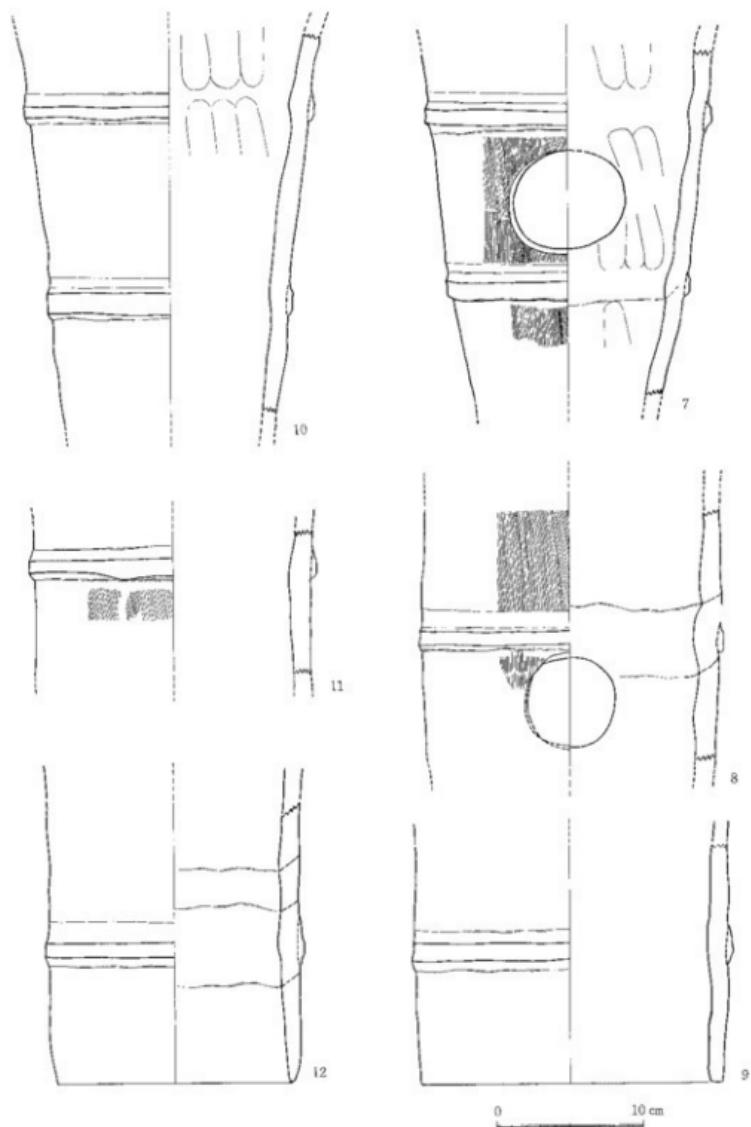
25~34. 須恵器 土器だまり出土 3~16. D~8号墳出土

図版一五 円筒埴輪実測図(1)

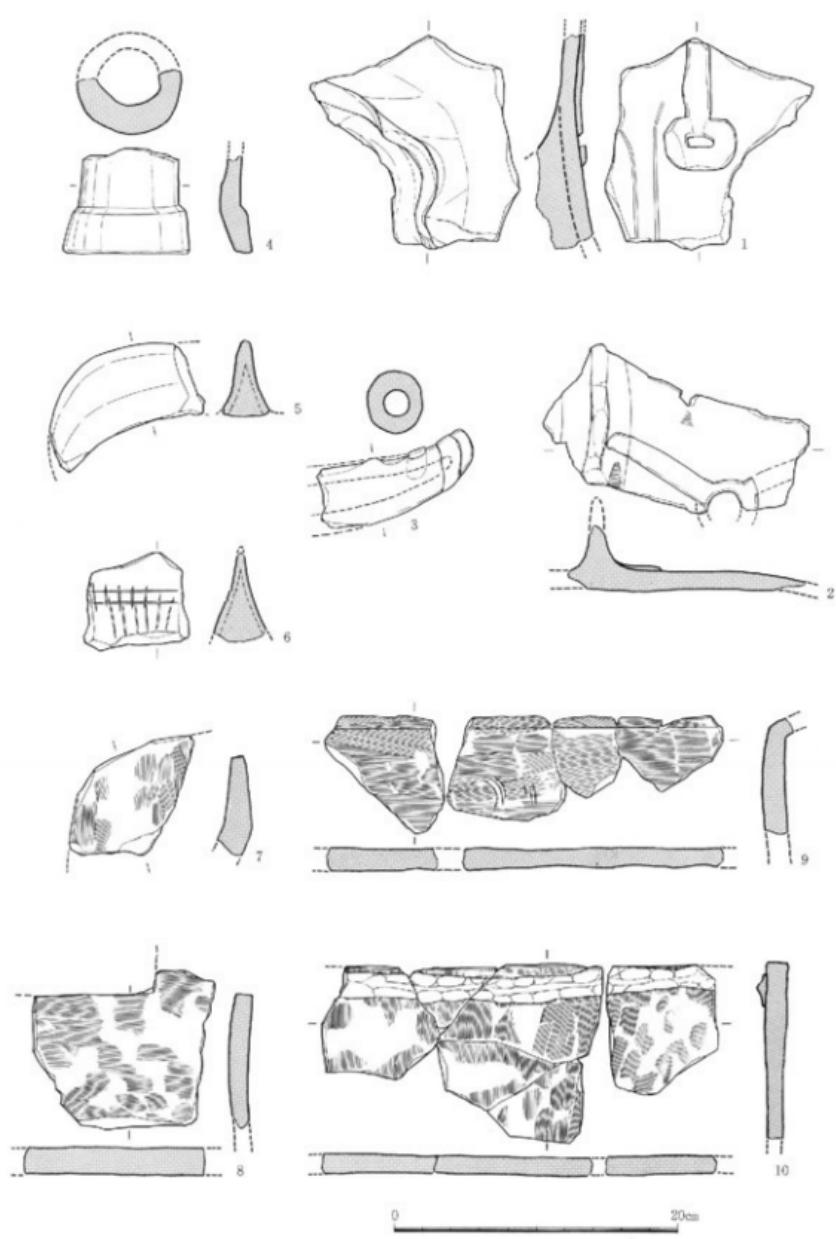


0 10cm

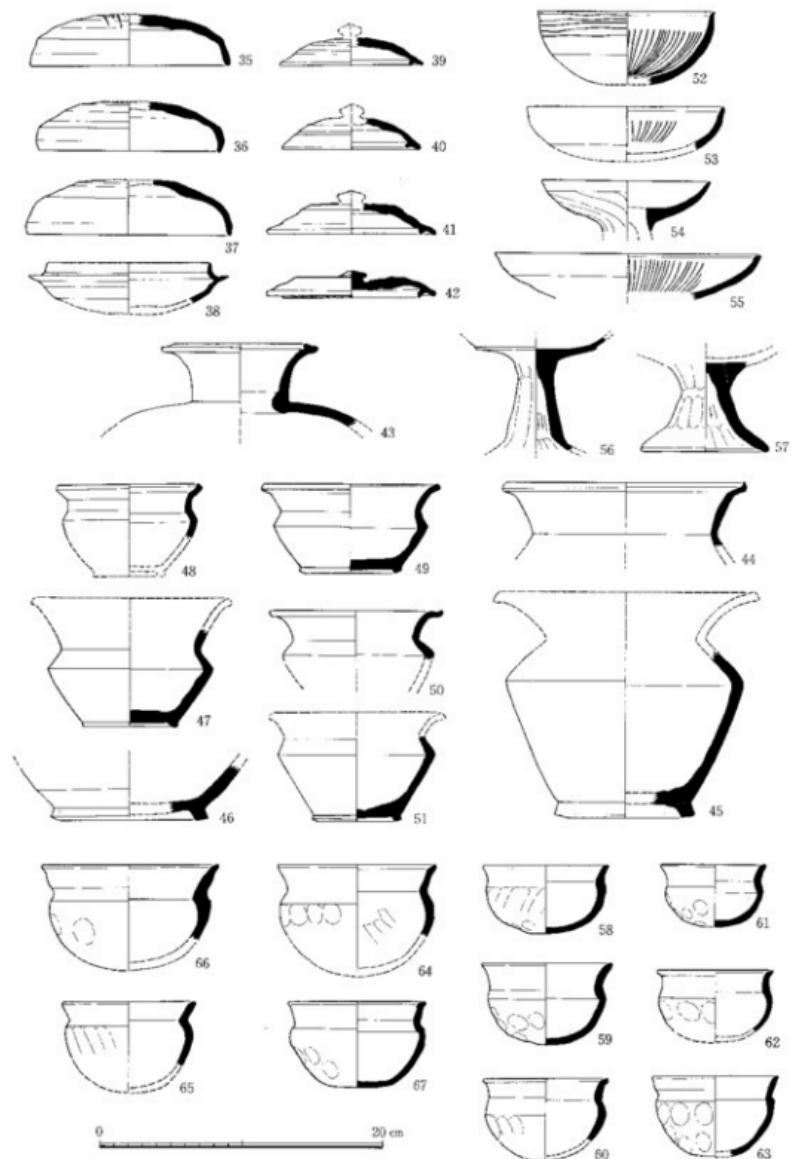
図版一六 円筒埴輪実測図(2)



図版一七 形象埴輪実測図

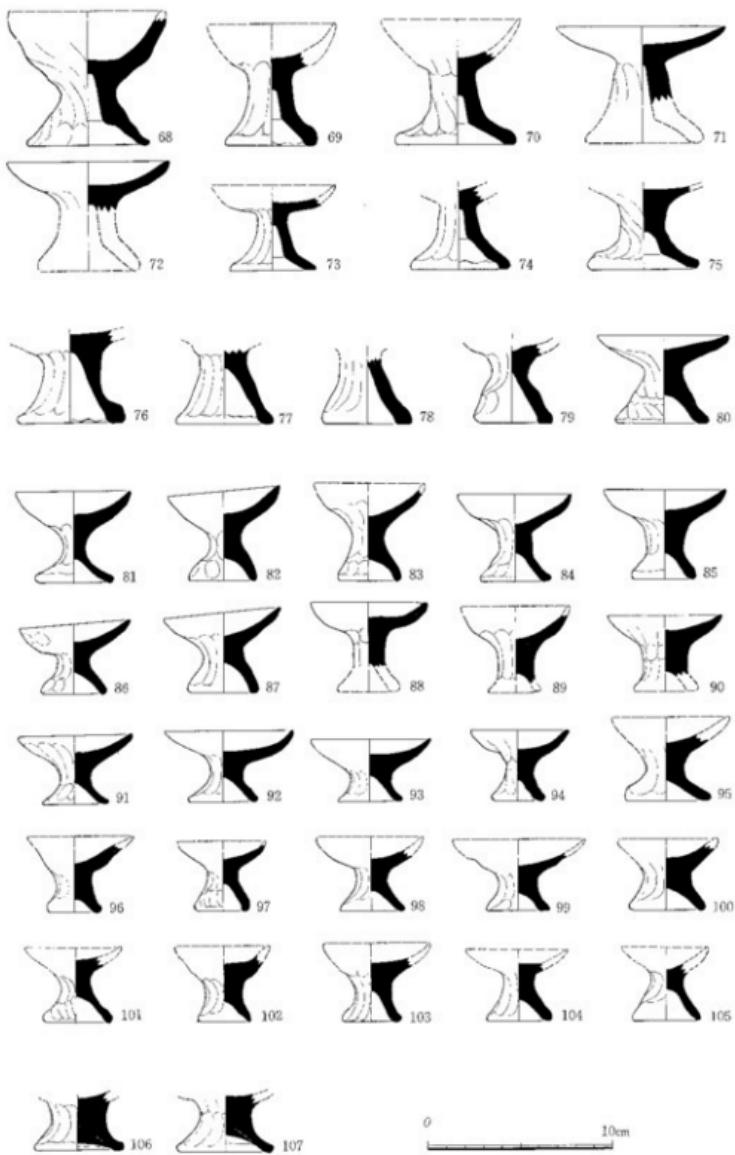


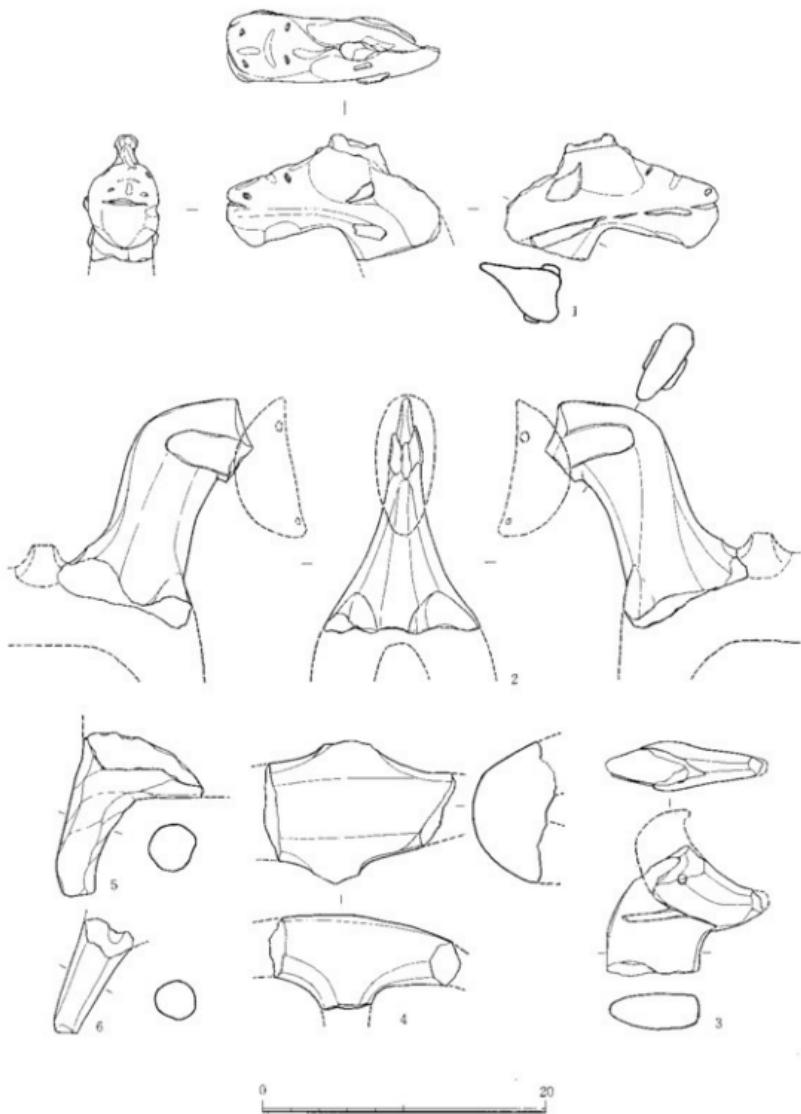
図版一八 その他の土器実測図



35~51. 須恵器 52~67. 土師器

図版一九 手捏高杯実測図





図版二十一 太平寺古墳群遠景 その一



太平寺古墳群



調査区遠景



太平寺古墳群遠景（南西側から）



調査区から大和川を望む



調査区遠景



第1次調査区遠景



第1トレンチ



第3トレンチ



第2トレンチ



第2トレンチ

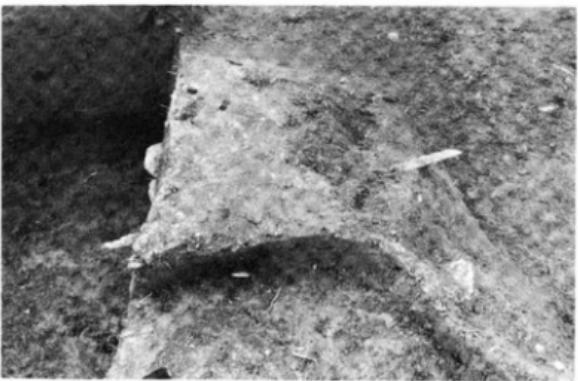
図版二十五 第四トレンチ



第4トレンチC



第4トレンチB



大刀出土状況



第4トレンチ



第7トレンチ



D—5号墳（西側から）



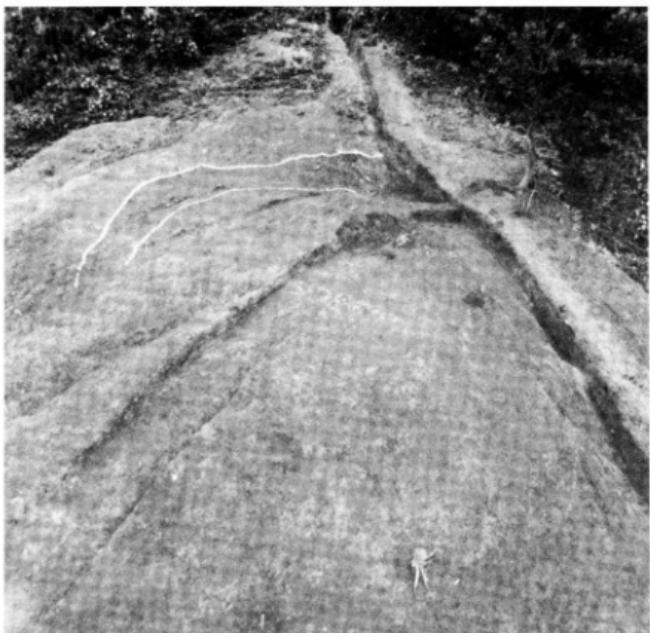
D—5号墳（西側から）



D—5号墳周濠（北側から）

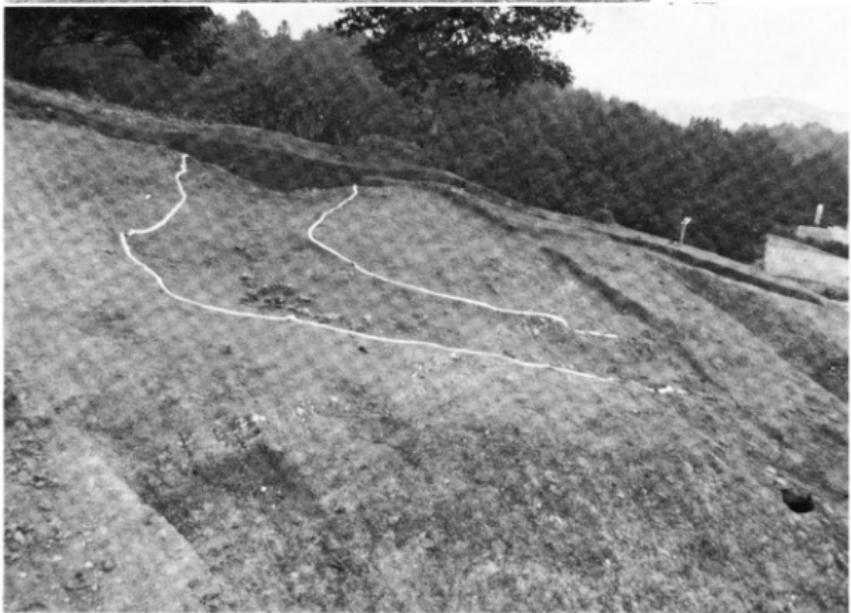


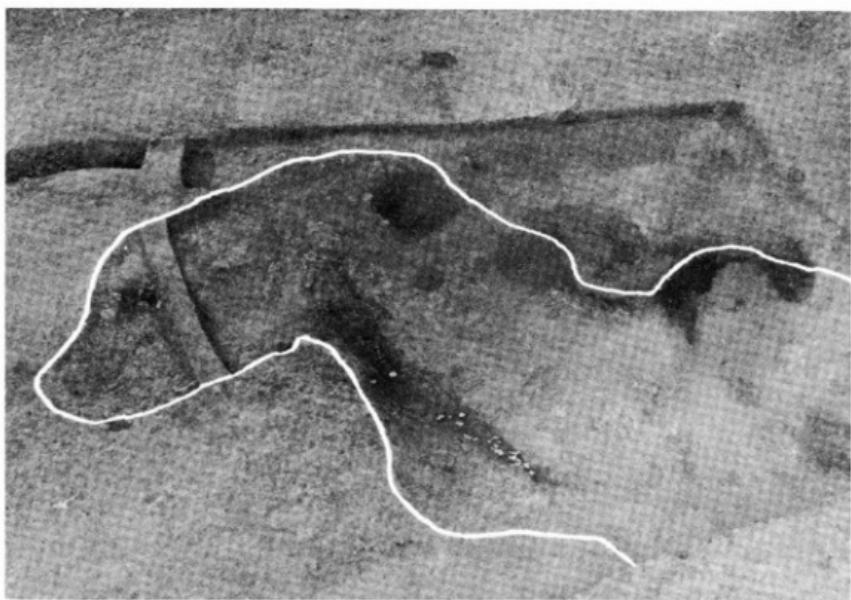
D—5号墳周濠断面（北側から）



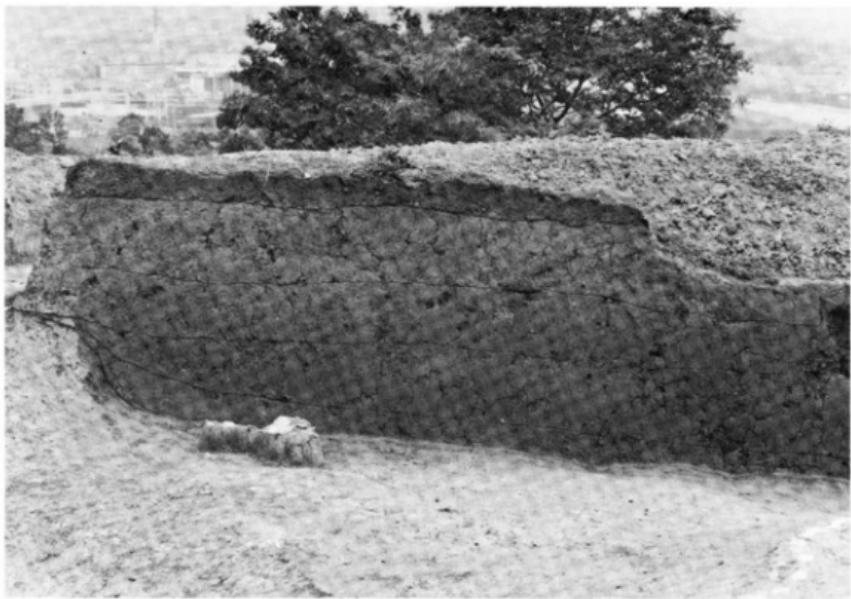
D—5号墳（西側から）

(北側から)





D—7号墳（南側から）



D—7号墳周濠断面（東側から）



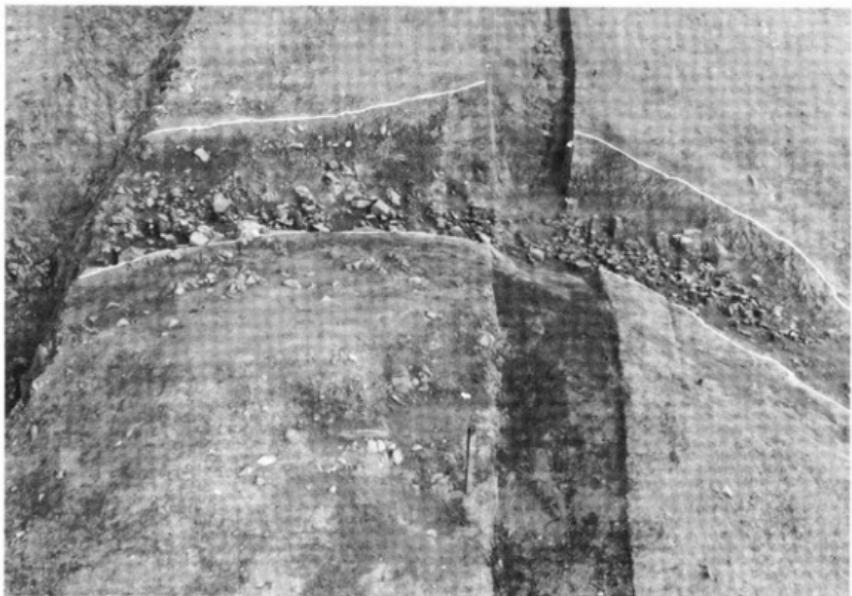
D—7号墳周濠断面（北側から）



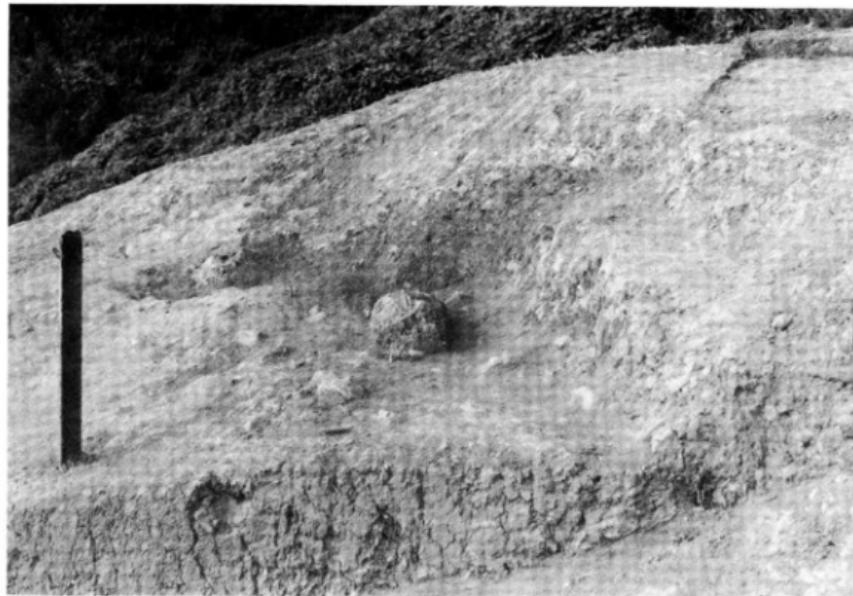
D—7号墳周濠断面（北側から）



D—8号墳（北側から）



D—8号墳（北側から）



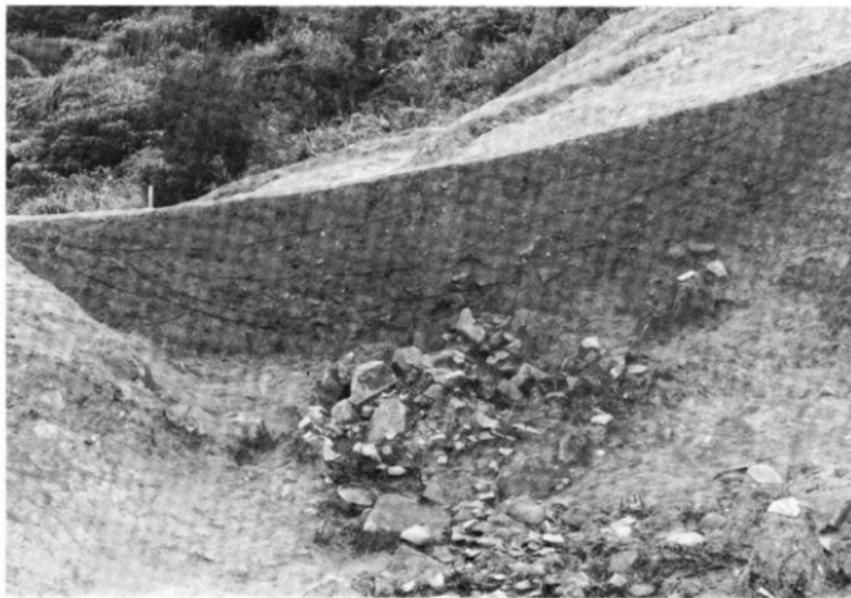
D—8号墳主体部（西側から）



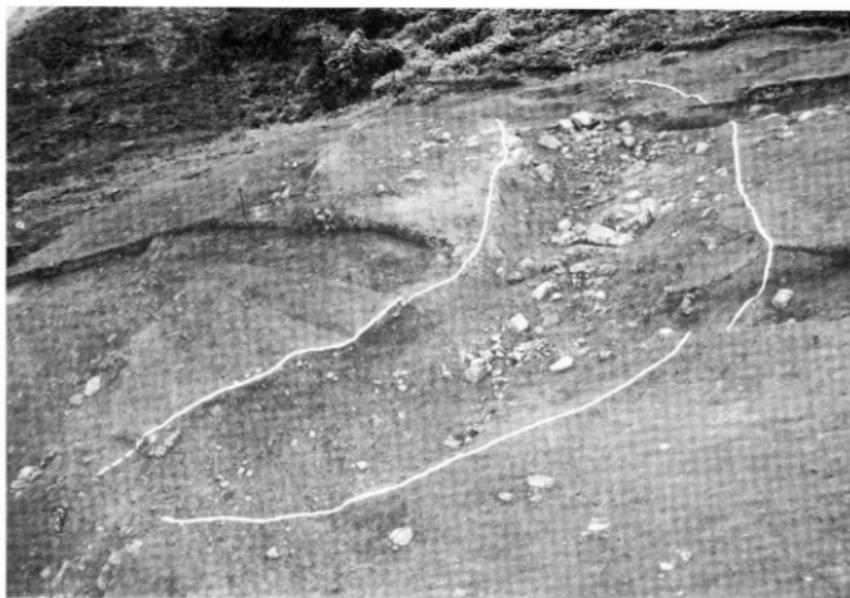
D—8号墳主体部 遺物出土状況



D—8号墳周濠（北側から）



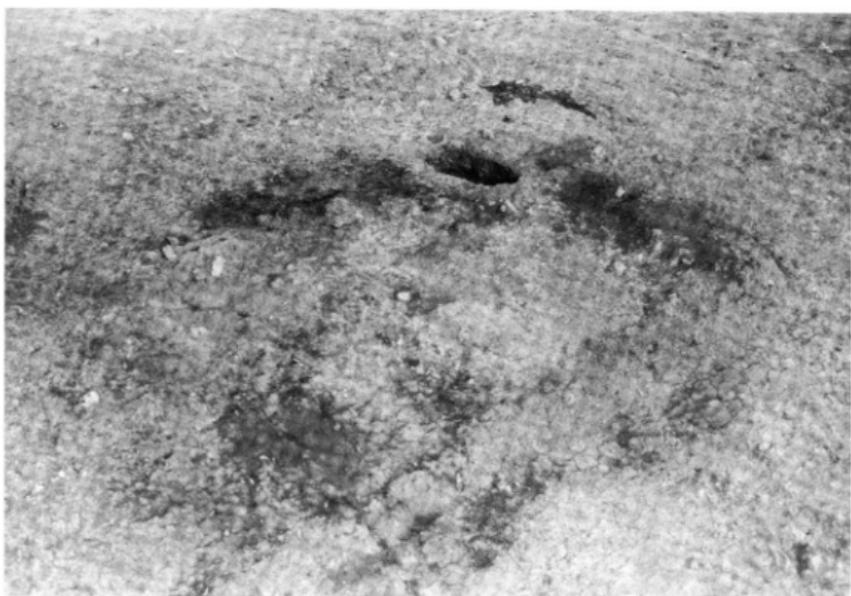
D—8号墳周濠断面（西側から）



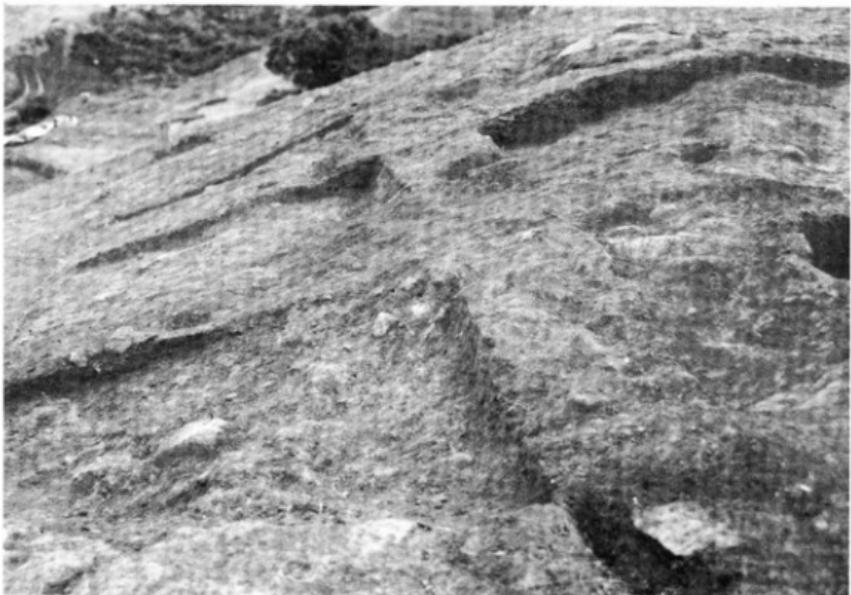
D—8号墳 周濠（西側から）



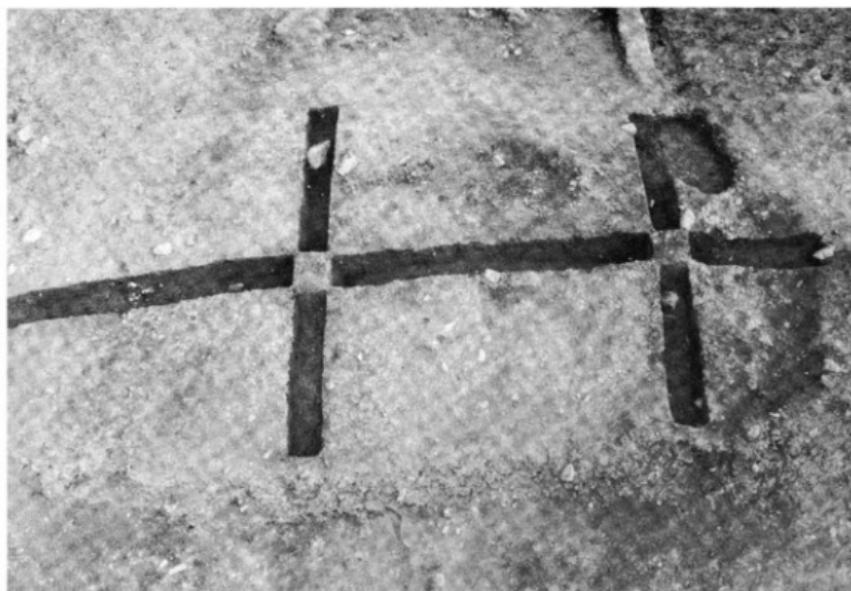
D—8号墳 遺物出土状況



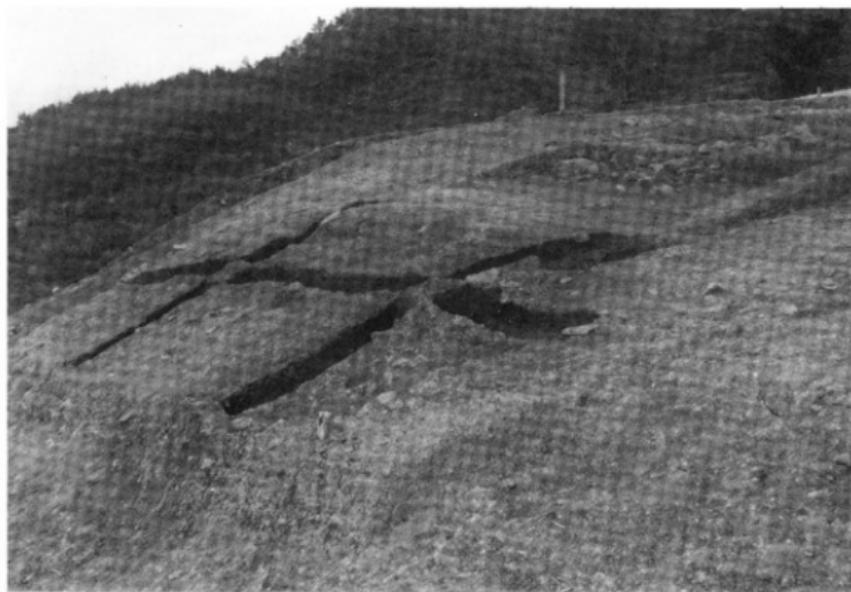
窯1 全景（西側から）



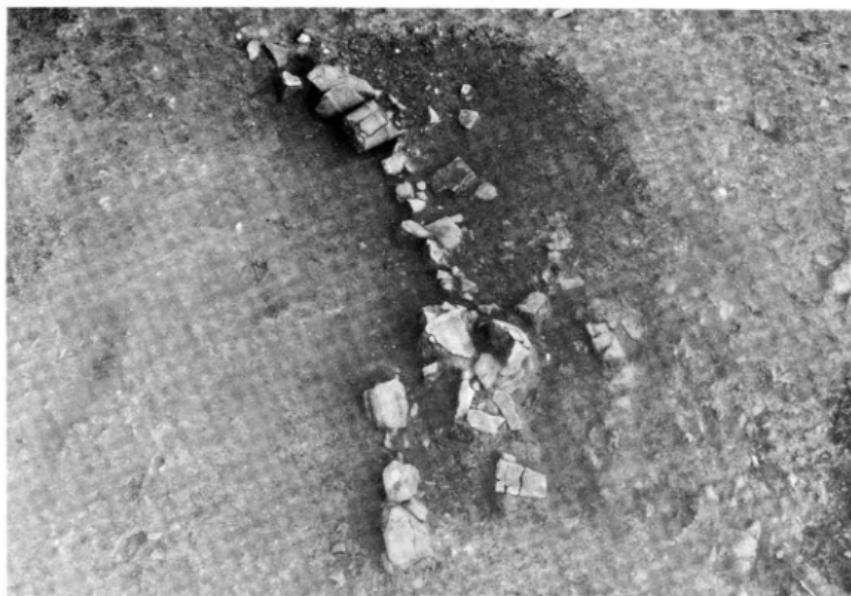
窯1 床面（南側から）



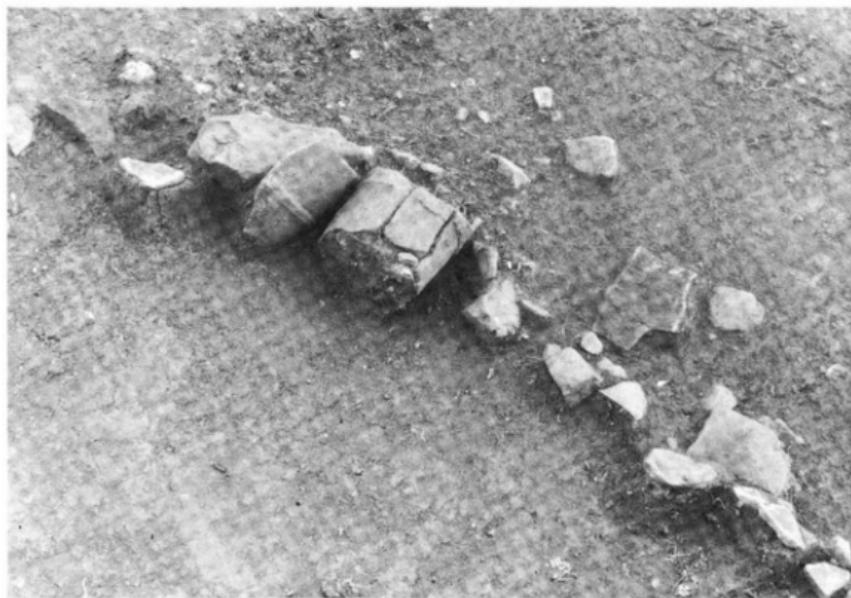
窯1立割後（西側から）



窯1遠景（南側から）



平垣地西側斜面地 墓輪出土狀況



同細部



作業風景その1



作業風景その2



空撮（真上から）



第2次調査区（北側から）



2次 第1トレンチ全景（北側から）



2次 第2トレンチ全景（北側から）



2次 伐採後風景その1



2次 伐採後風景その2



2次 第2トレンチ周濠（北東側から）



2次 D-2号墳墳丘断面（東側から）



2次 遺物出土状況（北側から）



2次 遺物出土状況（東側から）



調査前全景  
(北側から)



3次 A、B区全景 (北側から)



3次 A区堆積土除去後（北側から）



3次 A区道状造構1断面（西側から）



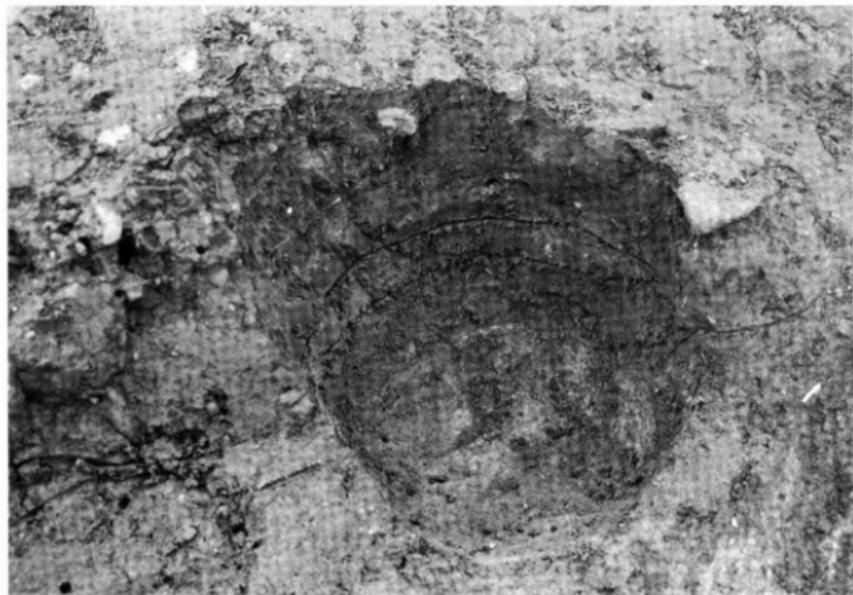
3次 土器棺1 (北側から)



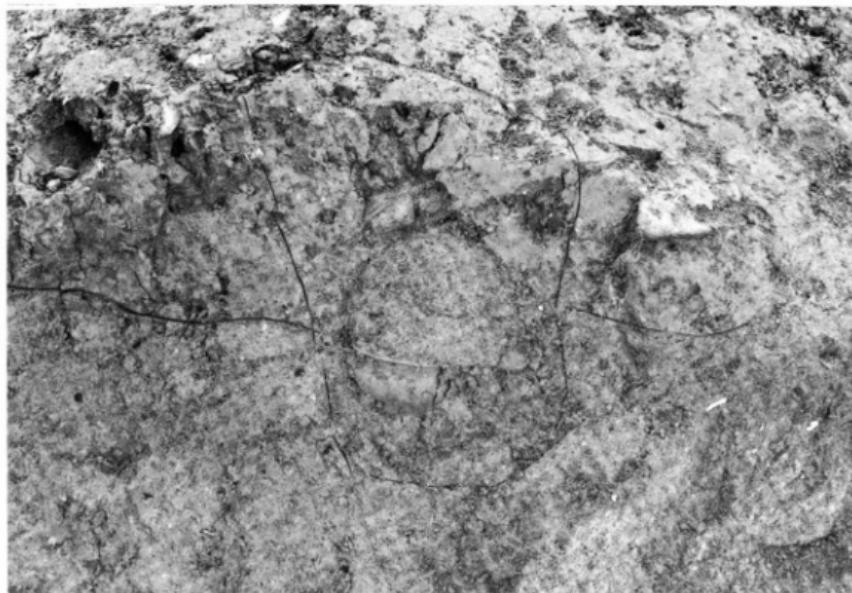
3次 土器棺1 (西側から)



3次 土器棺2横断面（その3）



3次 土器棺2横断面（その4）



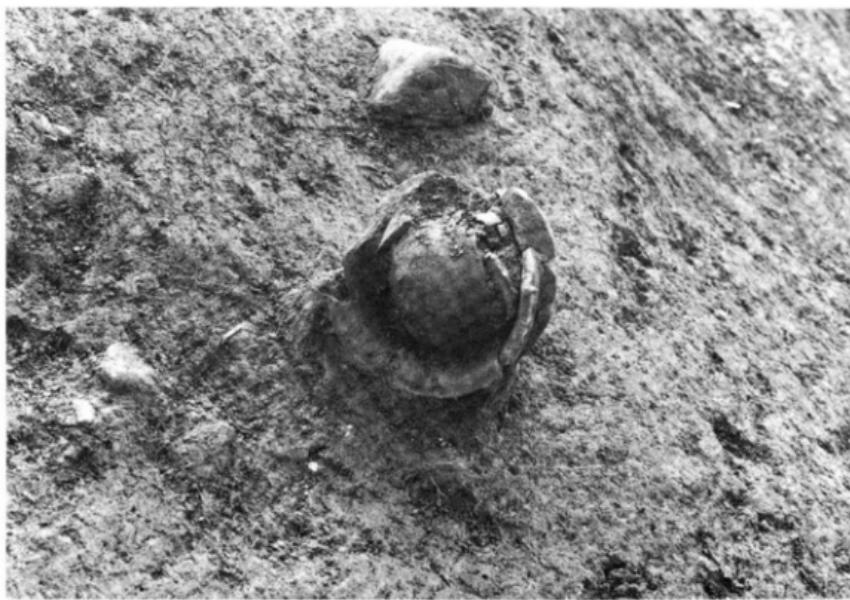
3次 土器棺2横断面（その1）(北側から)



3次 土器棺横断面（その2）



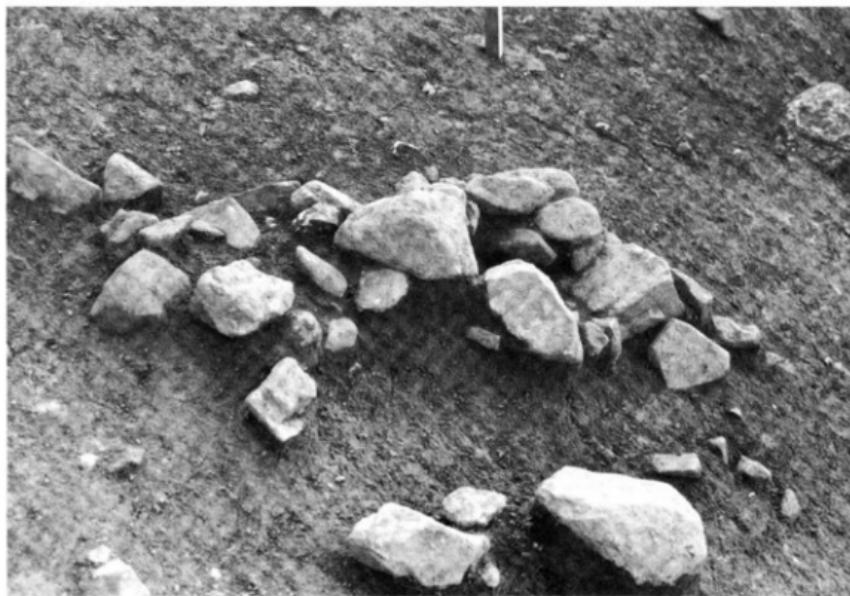
3次 土器館 3 (北側から)



3次 土器館 3 (東側から)



3次 集石遺構（南側から）



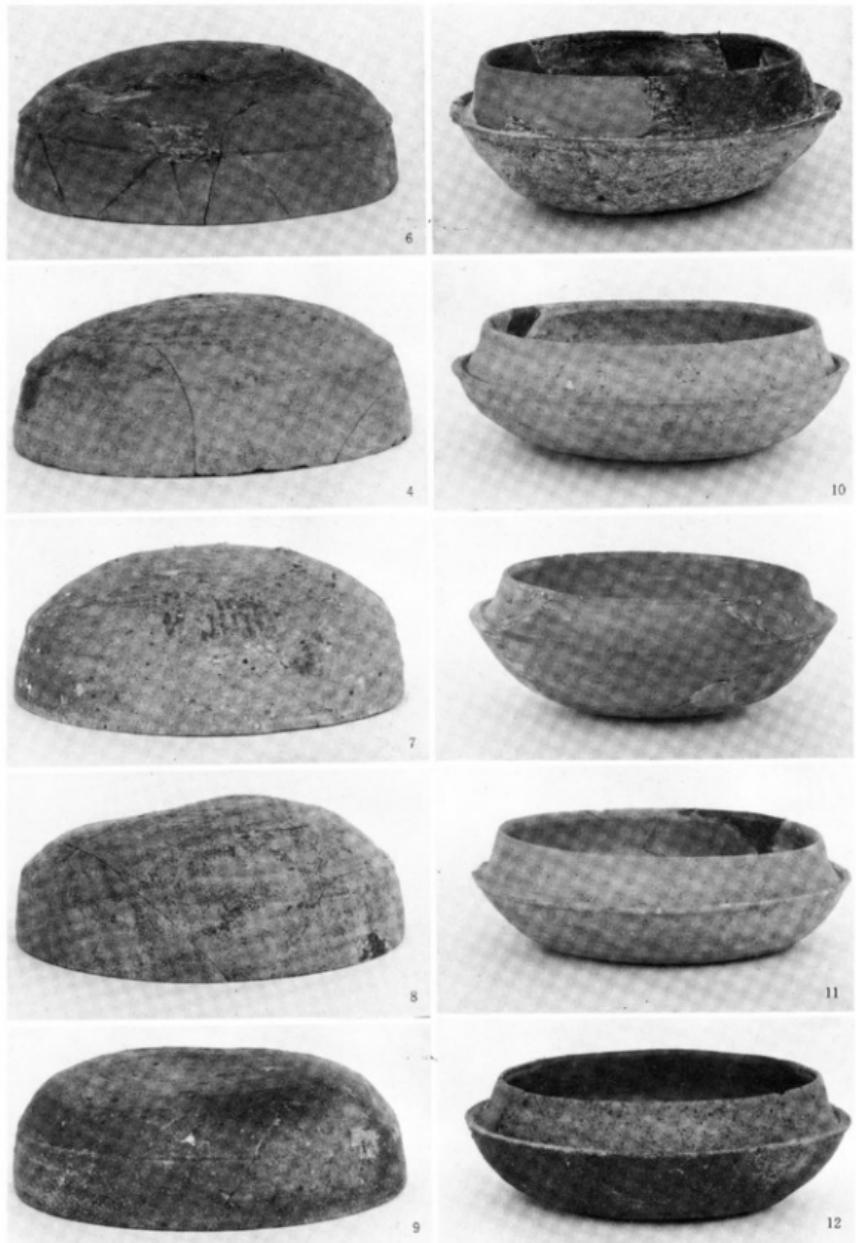
3次 集石遺構（北側から）



石垣（横側から）



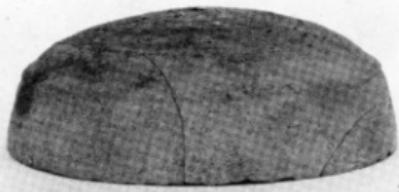
石垣（正面から）



D-2号墳 出土遺物



24



25



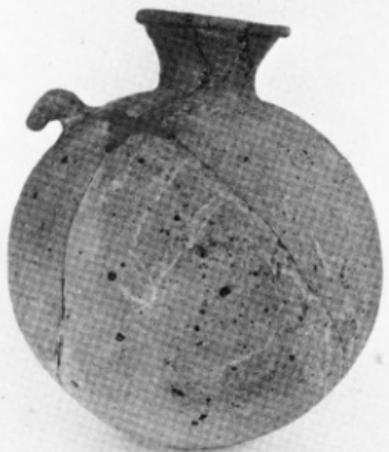
21



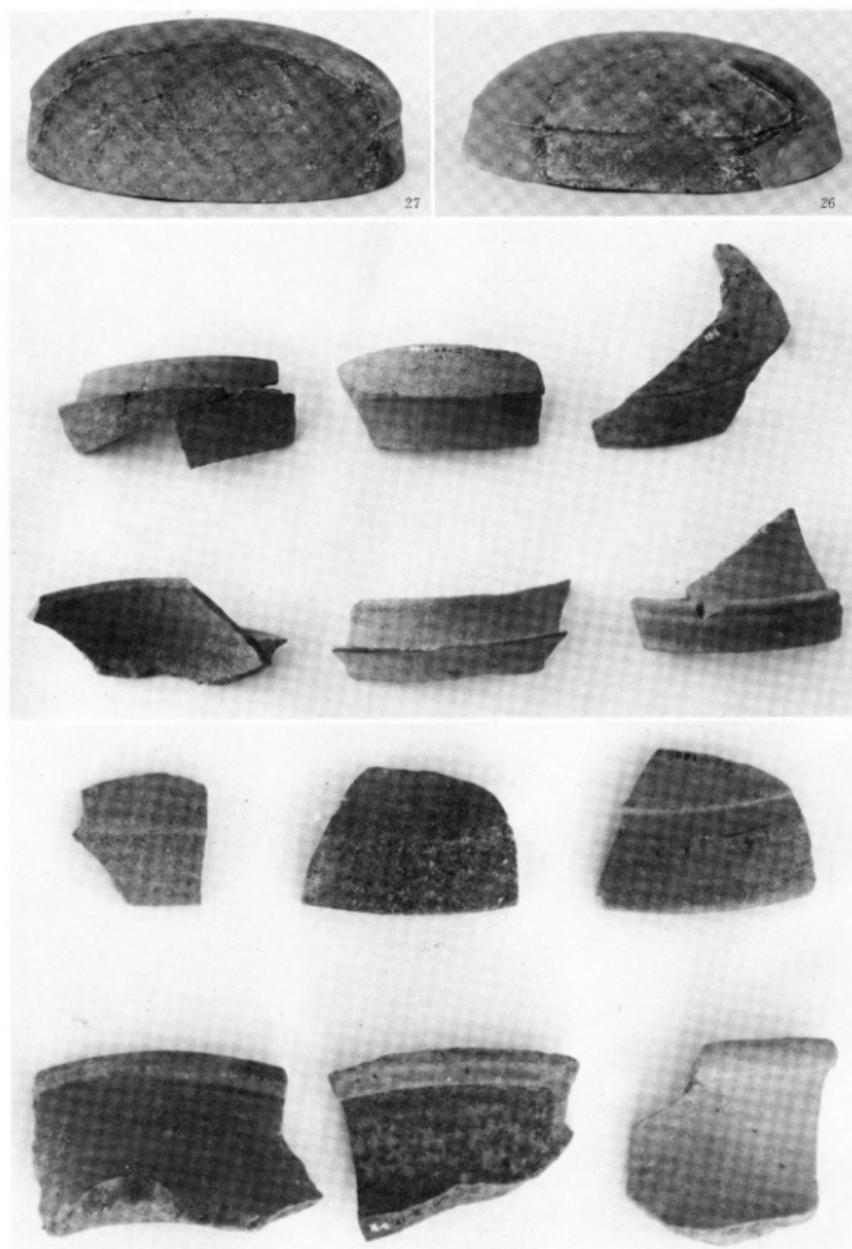
22



2



3



須恵器（蓋・杯・甕）



D-8号墳出土鐵製品



2

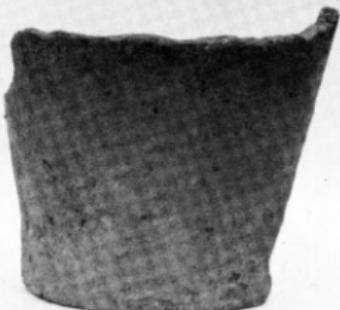


1

D-8号墳出土刀



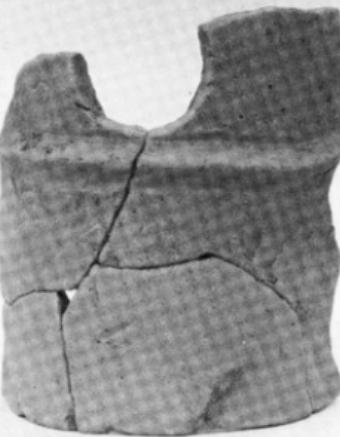
2



3



1



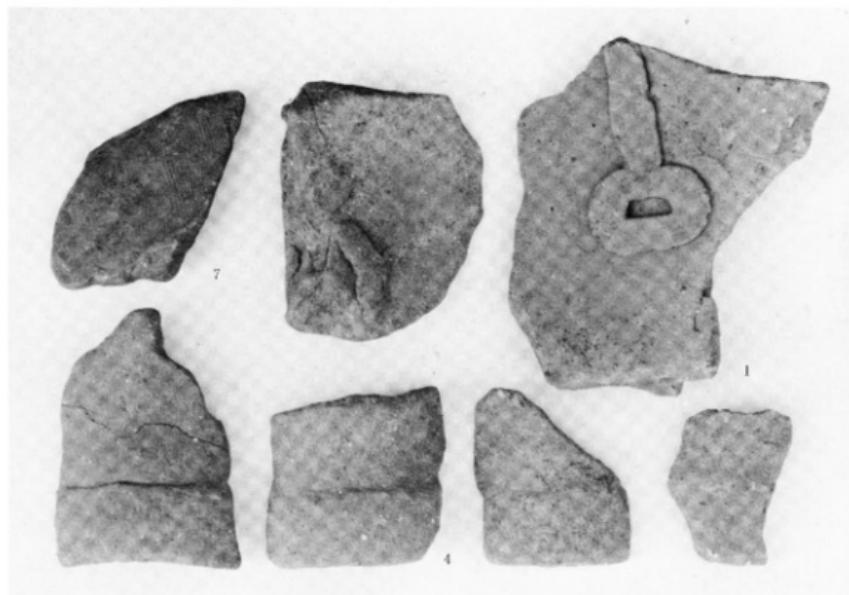
4



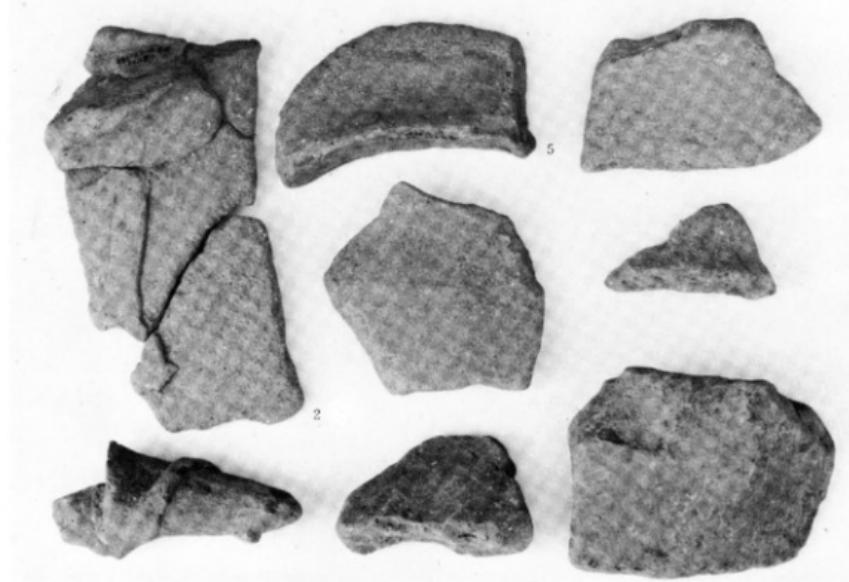
9



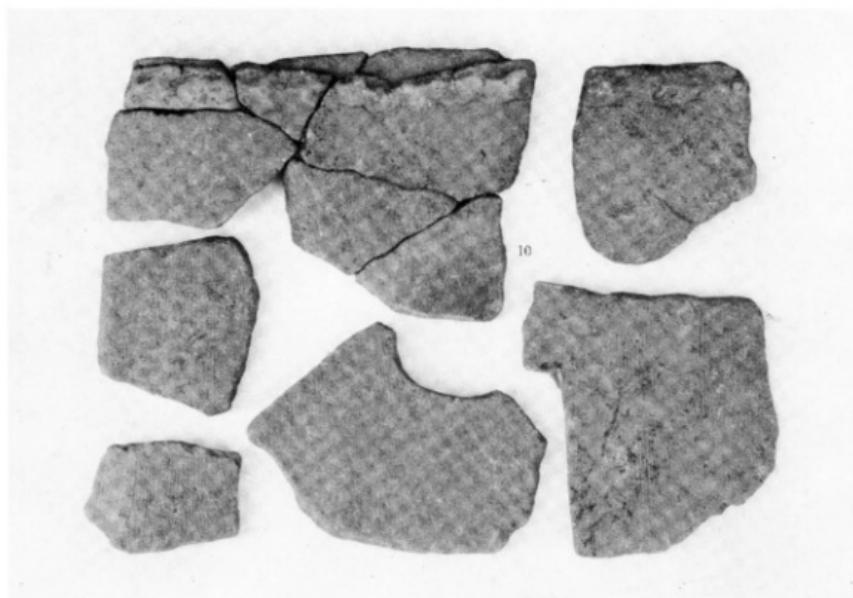
5



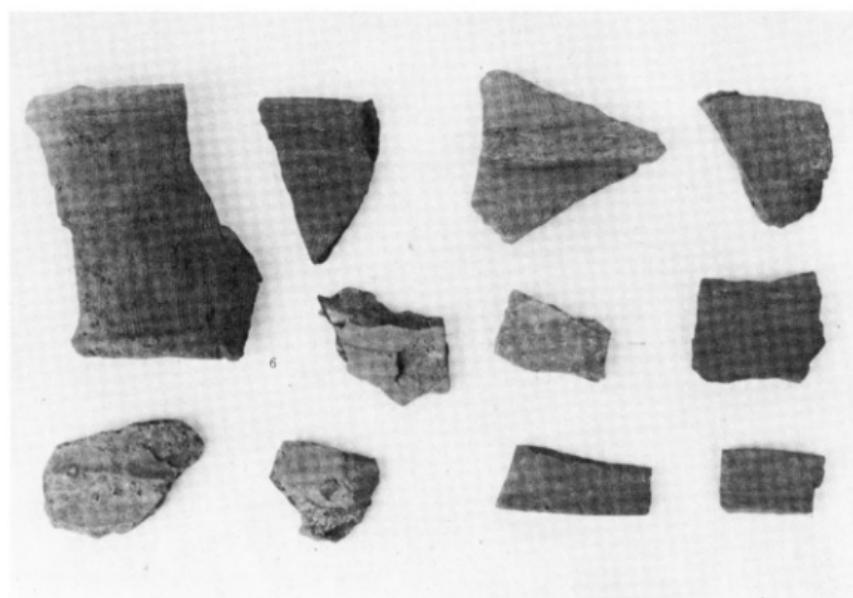
馬形埴輪



馬形埴輪



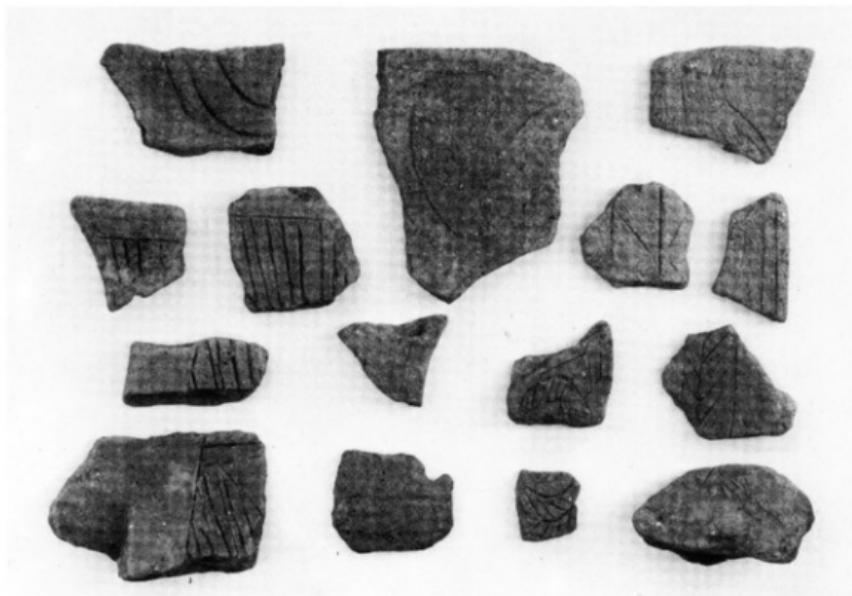
形象埴輪



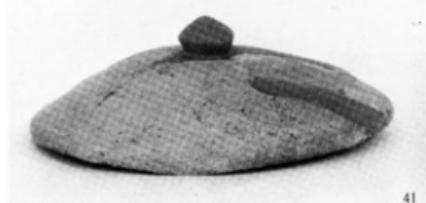
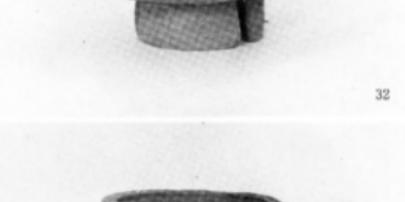
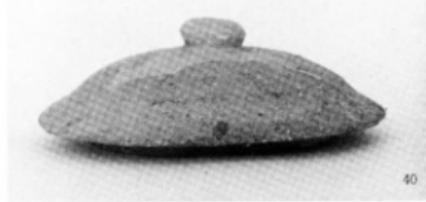
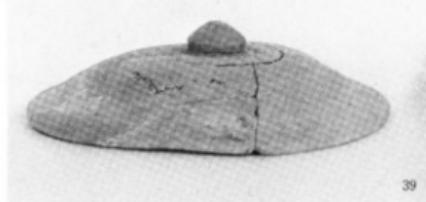
須恵質埴輪



形象埴輪



形象埴輪





58



63



61



59



67



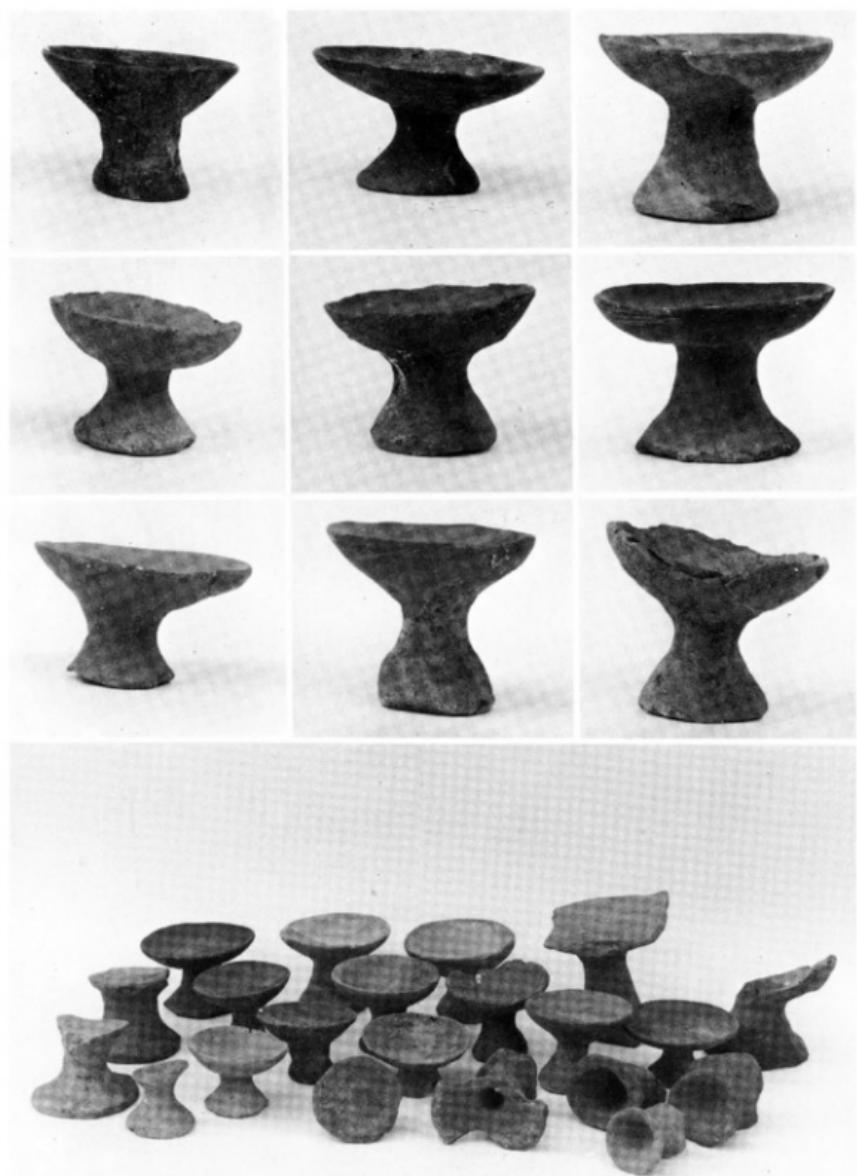
49



51



45



小型手捏高杯

太平寺古墳群

安堂配水池に伴う発掘調査

柏原市埋蔵文化財発掘調査報告82-IV

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内線 716

発行年月日 昭和58年3月31日

印 刷 K.K 中島弘文堂印刷所

